

上海

横光利一

青空文庫



## 序

この作品は私の最初の長篇である。私はそのころ、今とは違つて、先ず外界を視ることに精神を集中しなければならぬと思つていたので、この作品も、その企画の最終に現れたものであるから、人物よりもむしろ、自然を含む外界の運動体としての海港となつて、上海が現れてしまつた。昭和七年に私はこの作を改造社から出したが、今見ると、最も力を尽した作品であるので、そのままにしておくには捨て切れぬ愛着を感じ、全篇を改竄することにした。幸い書物展望社の好意により、再び纏めることの出来たのを

悦ばしく思う。この書をもつて上海の決定版としたい。

横光利一

〔昭和十年〕

## 一

満潮になると河は膨ふくれて逆流した。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていった。海關の尖塔が夜霧の中で煙り始めた。突堤に積み上げられた樽の上で、苦力たちが湿つて來た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が傾いてぎしぎし動き出した。白皙明敏な中古代の勇士のような顔をしている参木は、街を廻つてバンドまで帰つて來た。波打際のベンチにはロシヤ人の疲れた春婦たちが並んでいた。彼女らの黙々とした瞳の前で、

潮に逆らつた。※の青いランプがはてしなく廻っている。

「あんた、急ぐの。」

春婦の一人が首を参木の方へ振り向けて英語で訊ねた。彼は女の二重になつた頸の皺に白い斑点のあるのを見た。

「空いているのよ、ここは。」

参木は女と並んで坐つたまま黙つていた。灯を消して蝟集しているモーターボートの首を連ねて、鎖で縛られた桟橋の黒い足が並んでいた。

「煙草。」と女はいつた。

参木は煙草を出した。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金もないと見えるな。」

「お金もないし、お国もないわ。」

「それや、困つたの。」

霧が帆桁ほげたにからまりながら湯気のように流れて來た。女は煙草に火をつけけた。石垣に縛られた船が波に揺れるたびごとに、舷名のローマ字を瓦斯燈ガスとうの光りに代る代る浮き上らせた。樽の上で賭博をしている支那人の首の中から、鈍い銅貨の音が聞えて來た。

「あんた、行かない。」

「今夜は駄目だよ。」

「つまんないわ。」

女は足を組み合わした。遠くの橋の上を馬車が一台通つて行つた。参木は時計を出して見た。甲谷こうやの来るのはもうすぐだつた。彼は甲谷に宮子という踊子を一人紹介されるはずになつていた。

甲谷はシンガポールの材木の中から、この濁つた底知れぬ虚無の街のシャンハイ上じょう海かいに妻めとを娶りに来たのである。濡れた菩提樹ぼだいじゆの隙間しまから、縞しまを作つた瓦斯燈の光りが、春婦たちの皺のよつた靴先へ流れていった。すると、その縞の中で、ひと流れの霧が急がしそうに朦朧もうろうと動き始めた。

「帰ろうか。」と一人の女がいつた。

春婦たちは立ち上ると鉄柵に添つてぞろぞろ歩いた。一番後になつた若い女が、青ざめた眼でちらりと参木の方を振り返つた。

すると、参木は煙草を銜えたまま、突然夢のような悲しさに襲わくわおそれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のように彼を見降ろして行つてしまつたからである。

春婦たちは船を繋いだ黒い縄を跨ぎながら、樽の間へ消えてしまつた。後には踏み潰されたバナナの皮が、濡れた羽毛と一緒に残つていた。突堤の先端に立つてゐる警羅けいらの塔の入口から、長靴はを履いた二本の足が突き出ていた。参木は一人になるとベンチに凭れながら古里ふるさとの母のことを考えた。その苦労を続けてなおますます優しい手紙を書いて来る母のことを。——彼はもう十年日本へ帰つたことがない。その間、彼は銀行の格子こうしの中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫わされていただけだつた。彼は、忍

耐とは、この生活の上で他人の不正を正しく見せ続ける努力にす  
ぎぬということを知り始めた。そうして、彼はそれが馬鹿げたこ  
とだと思う以上に、いつの間にかだんだんと死の魅力に牽ひかれて  
いった。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死の方法を考えた。  
それがもはや彼の生活の唯一の整理法であるかのように。彼は甲  
谷を掴つかまえて酒を飲むといつもいうのだ。

——お前は百万円掴んだとき、成功したと思うだろう。ところ  
が俺は、首を縄で縛つて、踏台を足で蹴りつけたとき、やつたぞ  
と思うんだ。——

彼は絶えずその真似だけはやって来た。しかし、彼の母が頭の  
中に浮び上るとまたその次の日も朝からズボンに足を突き込んで

歩いていた。

——俺の生きているのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——

参木に許されていることは、事実、ただ時々古めかしい幼児のことを追想して涙を流すことだけだつた。彼は泣くときに思うのである。

——えーい、ひとつ、こちらあたりで泣いてやれ。——

それから、彼はポケットへ両手を突き込んで各国人の自棄糞な馬鹿騒ぎを、祭りを見るように見に行くのだ。——

しかし、甲谷がシンガポールから来てからは、参木は久し振りに元気になつた。甲谷と彼とは小学校時代からの友達だつた。参

木は甲谷の妹の競子を深く愛していた。しかし、甲谷がそれを知つたのは、競子が人妻になつて後だつた。甲谷はいつた。

「馬鹿だね、君は、何ぜ俺に一言それをいわなかつたのだ。いつたら、俺は。」

いつたら甲谷は困るにちがいないと、参木は思つて黙つていた。そして、今までひとりひそかに困つっていたのは参木である。だが、彼は今は一切のことをあきらめてしまつてゐる。——生活の騒ぎのこと、彼女のこと、日本のこと。ただ時々彼は海外から眺めていると、日本の着々として進歩する波動を感じて喜ぶことがあるだけだつた。しかし、彼は最近、甲谷から競子の良人おつとが肺病で死にかかつてゐるという消息を聞かされてからは、身体

から釘が一本抜けたような自由さが感じられて来たのである。

## 二

崩れかけた煉瓦れんがの街。その狭い通りには、黒い着物を袖長そでながに着た支那人の群れが、海底の昆布のようにぞろり満ちて淀んでいた。乞食らは小石を敷きつめた道の上に蹲うずくまつっていた。彼らの頭の上の店頭には、魚の気胞や、血の滴したたつた鯉の胴切りが下っている。そのまた横の果物屋には、マンゴやバナナが盛り上ったまま、鋪道の上まで溢れていた。果物屋の横には豚屋がある。皮を剥むかれた無数の豚は、爪を垂れ下げたまま、肉色の洞穴を造つてうす暗く

窟くぼんでいる。そのぎつしり詰つた豚の壁の奥底からは、一点の白い時計の台盤だけが、眼のように光っていた。

この豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の看板のかかつた家の入口までは、歪ゆがんだ煉瓦の柱に支えられた深い露路が続いていた。参木と逢うべきはずの甲谷はトルコ風呂の湯気の中で、蓄音器を聴きながら、お柳りゆうに彼の脊中をマッサージさせていた。お柳は富豪の支那人の妾になりながら、この浴場の店主を兼ねた。勿も論ちろん、お柳は客の浴室へ出入すべき身ではない。だが、彼女の好みにあつた客を選ぶためには、番号のついたその幾つもの浴室を遊ばせておくことは不経済には相違ない。

お柳は客の浴室へ来るのは前からいつも、身体いっぱいに豊

富な石鹼の泡を塗つていた。マツサージがすむと、主人は客の身体に石鹼を塗り始めた。——間もなく二人の首が、眞面目な白い泡の中から浮き上るとお柳はいつた。

「今夜はどちら。」

甲谷は参木と逢わねばならぬことを考えた。

「参木が突堤で待つてゐるのだが、もう幾時です。」

「そうね、でも、拠ほつといたつて、あの方こちらへいらっしゃるに違ひないわ。それよりあなた、いつ頃シンガポールへお帰りになるの。」

「それは分らないんですよ。僕は材木会社の外交部にいるもんですから、こちらのフイリッピン材を蹴落してからでなくちや、と

思つてゐるんです。」

「じゃ、もう奥さまはお探しになりましたの。」

「いや、それは、まあそう急いだことじやなし、——何も女房のことなんか、今ごろいわなくたつて、良いでしよう。」

お柳の泡がいきなり甲谷の額に叩きつけられた。スイツチがひねられた。壁から吹き込む蒸氣と一緒に蓄音器がベリー・マインを歌い出した。それに合せて、甲谷は小さぎみなステップを踏み始めた。すると、ゆっくり絞り出された石鹼の泡は、その中に包んだ肉体を清めながら、ぽたぽた白い花のように滴しだらつた。やがて、蒸氣が浴室に溢れ出すと、一面長方形の眞白な靄もやの中に、主人も客も茫々として見えなくなつた。蒸氣の中からお柳の声が聞えて

來た。

「あなたに馬券分けようか。」

「もうプレミヤムがついてるんですか。」

「それや、つくさ。でも、負けてもいいわよ。」

「ああ、苦しい、一寸ちよつとそこの蒸氣き、とめてくれないかな。」

「だつて、もういい加減に覺悟を定めるもんよ。ここじや誰だつて、一度は死ぬほど苦しくなるんだから。」

そのまま、二人の声は切れてしまうと、蒸氣もぷつりととまつてしまつた。

参木は疲れながらトルコ風呂まで帰つて來た。しかし、そのときはもう甲谷は参木に逢いに突堤へ行つた後だつた。参木は応接間のソファーに沈み込んだまま黙つていた。浴場の奥から湯女たちの笑う声と一緒に、ポルトギーズの猥雑の歌が聞えて來た。時々蒸氣を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上の真赤なチューリップが首を垂れたまま慄えていた。一人の湯女が彼の傍へ近寄つて來た。彼女は参木の横へ腰を降ろすと横目で彼の高く締つた鼻を眺めていた。

「眠いのかい。」と参木は訊ねた。  
女は両手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてるのかね。」

女が黙つて頷くと参木はいつた。

「じゃ、ひとつ頼もう。」

参木は前からこの無口な女が好きであつた。彼女の名はお杉と  
いう。お杉は参木が来ると、女たちの肩越しにいつも参木の顔を  
うつとり眺めているのが常であつた。間もなく湯女たちが狭い廊  
下いっぱいに水々しい空氣をたてて乱れて來た。

「まあ、参木さん、しばらくね。」

参木はステッキの握りの上に顎あごを乗せたままじろりと女たちを見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなそうね。」と、一人がいつ

た。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それじや、風呂へでも入れて貰おう。」

女たちはぱつと崩れて笑い出した。そこへお杉が浴室の準備を

整えて戻つて來た。参木は浴室へ這入ると、寝椅子の上へ仰向け

に長くなつた。皮膚が湯気に浸つて膨れて來た。彼はだんだんに

眠くなると、ふとこのまま蒸氣を出し放して眠つてみようと考え

た。彼はスイツチをひねるとタオルを喰<sup>くわ</sup>えて眼を瞑<sup>と</sup>じた。身体が

刻々に熱くなつた。もしこのまま死ねたらとそう思うと、競子の

顔が浮んで來た。債鬼の周章<sup>あわ</sup>てた顔がちらついた。惨忍な専務の

顔が。——専務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。  
間もなく銀行は停止を食ううちにちがいない。格子の中から見た無数  
の顔が、暴風のように渦巻くだろう。だが、駄目だ。何もかも、  
人間の皺<sup>しわ</sup>を製造するために出来てるのだ。——ドアーチが開いた。  
誰でもいい。参木は眼を瞑<sup>つむ</sup>つたまま動かなかつた。空気が幅広い  
圧力で動搖した。すると彼はいきなり、タオルで眼かくしをされ  
ていた。お柳だ。お柳なら、皺を延ばすのが商売だ。——

「お杉さん。」と参木は故意にお杉の名前をいつてみた。

誰も彼には答えなかつた。参木はやがてお柳が自分に擦り寄る  
であろう誘いをお杉が自分にするものとして思つたかった。いや、  
それよりお柳に、自分がお杉と遊ぶ楽しみを知らせたかつた。彼

はまだ一度もお柳の誘いを赦したことがない。それ故お柳を怒らすことが、彼には彼女の慾情をますます華やかに感じることが出来そうに思われたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしながら、両手を拡げて身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて逃さぬぞ。俺の手は蜘蛛くもみたいな手だから、用心してくれ。」

すると、彼の予想とは反対に、急にドアが開いて誰か出て行く気配がした。この空虚な間に何事が起るのだろう。参木はしばらくじつとしたまま、空氣に触れる皮膚に意識を集めていた。と、突然、ドアの外で、荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ突き飛ばされた女があつた。すると、女は彼の足元で泣き始めた。お杉

だ。——参木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に対しても激しい怒りを感じて來た。だが、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つていた。参木は自分でタオルを解くと、泣いているお杉の乱れた髪を眺めていた。彼はお杉に黙つて浴室から出ると服を着た。それから、彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。お柳は笑いながら這入つて來ると、白々しいとぼけた顔で彼にいつた。

「まあ、随分今夜は遅かつたわね。」

「遅いは遅いが、しかし、さつきはどうしたんだ。」

「何が？」

「いや、あのお杉さ。」と参木はいつた。

「あの子は駄目よ。いくじ意久地が無くつて。」

「それで、僕にひつつけようていうんかい。」

「まア、そうしていただけれや、結構だわ。」

参木は自分の戯れが間もなく女一人の生活を奪うのだと気がついた。彼がお杉を救うためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼がお柳に頭を下げたら、なお彼女はお杉を拋ほり出すに定きまつているのだ。それなら、自分はどうすれば良いのだろう。参木

は寝台の上からお柳の片手を持つと抱き寄せるようにしていった。

「おい、お柳さん、俺がこんなことをいうのは初めてだが、実は俺は、この間から死ぬことばかり考えていてね。」

「どうしてそんなに死にたいの。」とお柳はひやかすようにいつた。

「どうしてつて、まだ分らぬ柄でもないだろう。」

「だつて、あたしや、死ぬ人のことなんか分んないさ。」

「これほど情けを籠めていて、それにまだそういうわれるようじや、もう俺も死ぬことも出来ぬじやないか。いい加減に何んとか、しきるべくいいなさい。」

お柳は参木の肩を叩くといった。

「ふん、黙つて聞いてたら、女殺しのようなことをいい出すわね。これじや、あたしだつて死にたくなるわよ。」

お柳は立ち上ると部屋の中から出ようとした。参木はまたお柳の手を持つた。

「おい、何んとかしてくれ。このまま行かれちや、俺は今夜は危

いんだ。」

「いいよ、あんたなんか死んだつて、くたばつたつて。」

「俺が死んだら、だいいちお前さんが困るじやないか。」

「さアさア、馬鹿なことを言わないで、放してよ。今夜はあたしだつて、死にたいのよ。」

お柳は参木の手を振り切つて出ていった。彼はこの馬鹿げた形の狂いを感じると、お柳に対する怒<sup>いかり</sup>がますます輪をかけて嵩<sup>こう</sup>じて来た。彼は寝台の上へ倒れたまま、心をなだめるように、毛布の柔かな毛なみをそろりそろりと撫<sup>な</sup>でてみた。すると、またドア一が開いた。と、またお杉が突き飛ばされて転んで來た。お杉は倒れたまま顔も上げずに泣き始めた。参木は彼女の傍へ近よること

が出来なかつた。彼はただ寝台の上から、お杉の倒れた背中のひくひく微動するのを眺めていた。彼は生毛うぶげの生えているお杉の首もとから、黒い金魚のようななまめかしさを感じて來た。彼はちかぢかとお杉の首を見ようとして降りていつた。しかし、ふと彼は、お柳がどこからか覗いているのを嗅かぎつけると、また首をひとつ込めた。

「おい、お杉さん。こつちへ来なさい。」

彼はお杉の傍へ近よると彼女を抱きかかえて寝台の上へ連れて來た。お杉はすくみながら寝台の上へ乗せられても、まだ背中を参木に向けたまま泣き続けた。

「おい、おい、泣くな。」と参木はいうと、ひとり仰向きに寝こ

ろんでも、また楽しむようにお杉の顔を眺め始めた。

お杉は一寸参木の片手が肩へ触れると、「いやだいやだ。」と  
いうように身体を振った。が、彼女は寝台から降りようともせず  
に、袂たもとを顔にあてて泣き続けた。参木はお杉の片腕を撫でながら、  
「さア、俺の話を聞くんだぜ。良いか、昔、昔、ある所に、王様  
とお姫さまとがありました。」

すると、お杉は急に激しく泣き出した。参木は起き上ると眉を  
顰ひそめたまま、寝台から足をぶらぶらさせて黙つていた。彼は天井  
に停つている煽風機の羽根を眺めながら、どうして好きな女には、  
指一本触れることが出来ないのかと考えた。——これには何か、  
原理がある。——しばらく彼は小首をかしげながら、しゃくり上

げるお杉の泣き声を聞いていたが、「さて、俺の帽子はどこいった？」と見廻すと、そのまま部屋の外へ出ていった。

#### 四

甲谷は突堤へ行つたが参木の姿は見えなかつた。ただ掃除夫のうす汚れた赤い法被<sup>はっぴ</sup>が、霧の中でごそごそと動いているだけだつた。しかし、なおよく見ると、菩提樹の下の真暗なベンチの上で、印度人の鬚<sup>ひげ</sup>が幾つも鳥の巣のようにかたまつて竦んでいた。彼は芝生の先端を歩いてみた。二つの河の流れの打ち合う波のうえで、

大理石を積んだ小舟がゆるゆると波にもまれて廻っていた。甲谷はチユーリップが円陣をつくつて咲いている芝生の中まで歩いて来た。すると、突然、彼は自分の美しい容貌の変化を思い出した。彼はすぐ引き返すと、車を呼び寄せて宮子のいる踊場の方へ走らせた。

——もし宮子が結婚しないといえば、いや、何に、そのときは  
そのときさ。——

踊場の周囲には建物がもたれ合つて建つていた。つた薦ねがその建物の割れ目から這いながら、窓の上まで蔽つていた。踊場では、ダンスガールのきりきり廻つた袖の中から、アジヤ主義者の建築師、山口が甲谷を見付けて笑い出した。山口は甲谷がシンガポールへ

行く前の遊び仲間の一人であつた。甲谷は山口と向い合つて坐るといつた。

「実に久し振りだね。この頃は君どうだ。いつ見ても楽しそうな顔をしているのは、君の顔だよ。」

「それが、見た通りの醜態だがね。ああ、そうだ。参木にこの間逢つたら、君は嫁探しに来たつていつたが、ほんとうかい。」山口は溢れるような微笑を湛<sup>たた</sup>えて甲谷を見上げた。

「うむ、嫁もついでに探していこうと思つちやいるんだが、いいのがあるかね。あつたら一つ頼みたいね。もつとも、君のセコンドハンドじや御免だぜ。」甲谷はにやにや笑いながらホールの中を見廻した。

「いや、ところが、それになかなか話せる奴がいるんだよ。オルガというロシヤ人だが、どうだひとつ。参木の奴にどうかと思つたのだが、あ奴いっつはああいうドン・キホーテで面白くなし、どうだ君は。——意志はないか。」と山口は真面目な顔で相談した。

「じゃ君にはもう意志はなくなつてゐるんだな、そのオルガといふのには？」

「いや、それやある、しかし、ああいう女は他人のものにしつく方が、どうも面白味が多そなんだよ。」

甲谷は山口の言葉を聞き流しながら、這入つて来るときから探しづけている宮子の姿をまた搜した。だが、宮子の姿はいつまでたつても見えなかつた。

「しかし、僕の細君にして、それからまだ君が面目をほどこそう  
というんじや、それや、あんまり面白すぎるじやないか。」

「いいじやないか、細君なんかにしなけれや。倦きればまたその  
ときはそのときさ。まあ、今はトウエンティ見当の月給で結構だ  
よ。」

山口は肱<sup>ひじ</sup>をつきながら、甲谷のうろうろしつづける視線の方を  
自分も追つた。外人たちがぼつりぼつりとホールの中へ這入つて  
来た。

「ときに話は違うが、古屋の奴はどうしている。」と甲谷は訊ね  
た。

「ああ、古屋か、あの男は芸者の細君を月賦で買つては變えてる

よ。  
」

「まだこちらにいるのかね。」

「うむ、いる。前の細君だつてまだ全額 払<sup>はらいこみ</sup>込<sup>いれこみ</sup>にはなつていな  
いんだのに、また次のが、これが月賦だ。」

「御橋はどうした。」

「御橋も達者だ。しかし、先生、どうもあんまり妾<sup>めかけ</sup>を大切にする  
のでつき合い難いよ。あ奴<sup>いのち</sup>も参木のような馬鹿者だね。」

しかし、甲谷は山口の話を聞こうともせず、うつろな眼で宮子  
はどうした、宮子はどうした、と絶えず思いながらまた訊ねつづ  
けていくのであった。

「ふむ、木村はどうした。」

「木村には先日一度逢つたかな。奴さん、相変らず競馬狂でね、いつだかロシヤ人の妾を六人大競馬に連れてつて、負け出したのさ。ところが、あの男は振つてる。<sup>ふる</sup>負けたらその場で妾を一人ずつ売り飛ばすじやないか。それですつかり負けちやつてね、その日に六人とも売つちゃつて、まだお負けに上着からチヨツキまで質に叩き込んで、さアてとか何んとかいつて澄していんんだが、先生が妾を持つのは、まああれは貯金をしているようなものなんだよ。俺もお陰でだいぶん迷惑をさせられたが、オルガという女も、つまり、木村から処分されて來たもんさ。」

しかし、甲谷は別段面白くもなさそうに、「君はこのごろどうしているんだ。」としばらくたつてまた訊ねた。

「俺か、俺はこの頃は建築屋はそつちのけで、死人拾いという奴をやつてゐる。此奴（こいつ）は骨の折れる商売だが、なかなか文化に有益な商売でね。一度俺と一緒について来ないか。面白い所を見せてやるよ。」

「それや、どうすることをするんだね。つまり死人の売買か。」と甲谷は訊ねた。

「いや、そんな野蛮なもんじやないよ。支那人から死体を買い取つて掃除をしてやるんだが、一人の死人で、生きてるロシア人の女を七人持てる、七人。それもロシアの貴族だぞ。」

どうだというように山口の唇は歪ゆがんでいた。この豪傑ならそれは平気なことにちがいない、と甲谷は思つて踊りを見た。これは

また、うどんを捏ねて いるよ うな踊の隙から、 楽手たちの自棄糞おどり やけくそ なトランペットが振り廻されて光つて いた。すると突然、山口は踊りの中の一人の典雅な支那婦人を見付けて囁いた。

「あッ、あれは 芳秋蘭ほうしゅうらん だ。」

「芳秋蘭つて、それや何んだ。」と甲谷は初めて大きな眼を光らせて山口の方へ首をよせた。

「あの女は共産党では、たいへんだ。君の兄貴の高重たかしげ 君はあの女を知つてるよ。」

甲谷が振り返つて芳秋蘭を見ようとすると、そこへ、細つそりと肉の緊しまつた、智的な眼の二重に光る宮子が、二階から降りて来て甲谷の傍の椅子へ來た。

「今晚は、お静かだわね。」

「うむ、いま細君の話をしてるところだよ。」と甲谷はいつて手を出した。

「まあ、そう、じや、あたしあちらへ逃げてましょ。」

宮子は身を翻すように、ひらりと盆栽の棕櫚シユロを廻つていくと、甲谷はまた山口の方へ向き返つた。

「それで、さつきの死人の話だが、何んだか少し込み入つた話じゃないか。」

「死人か。まあまあ、それより一踊りして来なさい。死人のことは後でもいいさ。」

「それじゃ、一寸失敬。」

甲谷は宮子に追いついて二人で組むと、踊の群れの中へ流れて  
いった。宮子は甲谷の肩に口をあてて囁いた。

「今夜の足は重いわね。あたしはその人の重さで、何を考えてる  
のかつていうことが、まあだいたい分るのよ。」

「じゃ、僕は？」と甲谷は訊ねた。

「あなたは、奥様が見つかりそうよ。」

「左様。」

実は、甲谷は一人の死人と七人の妾について考えたのだ。――  
何んと奇怪な生活法ではないか。廃物利用の極意である。甲谷は  
その話を聞くまでは、激しく宮子と結婚したい希望をもつていた。  
だが、七人の女と一人の死人の価値とを聞いてからは、妻帯者の

不幸ばかりが浮んで来てならぬのであつた。踊がすむと甲谷は山口の傍へ戻つて來た。

「君、さつきの死人の話をもう少し聞かしてくれよ。」

「まあ、そう急がなくつたつて、死人はいつでもじつとしているよ。」

「ところが、貧乏だつて、じつとしているさ。」と甲谷はいつてまた宮子の方をちらりと見た。

「だつて、君は貧乏しているようには見えんじやないか。」

「いや、それや、僕も僕だが、それより参木の奴のことなんだよ。あ奴をもう少し何んとかしてやらないと、死んでしまう。」

「死ぬつて、参木の奴が？」と山口は顎を突き出した。

「うむ、あ奴は近頃、死ぬことばかり考えておるのだ。」

「じゃ、俺に金儲けをさせてくれるようなもんじやないか。」

甲谷は足をぱつと両方へ拡げると、身を振り動かして大きな声で笑い出した。

「そうだ、あの男は、今に君に金儲けくらいはさすだろう。」

「それや、面白い。よし、そんならひとつ、参木を俺の会社の社長にしてやろう。」

甲谷は山口の豪傑笑いの中から、参木に対するいくらかの友情を嗅ぎ<sup>か</sup>つけると喜び勇んで乗り出した。

「君の会社は何んというんだ。」

「いや、名前はまだだが、ひとつ、君から参木の奴に話してみて

くれ。あ奴が死人になりたいなんて、それや、もつて来いの商売だよ。」

「それで、その死人をどうする会社だ。」

「つまり、人間の骨をそのままの形で保存しこうっていうんだ。これを輸出すると一人前が二百円になつて来る。」

甲谷は二百円もする会社の材木の太さを考えながら、

「しかし、そんなに人間の骨が売れるのか。」と小声で訊ねた。  
「君、医者に売るんだよ。医者ならそこは彼らの手先でどこへでも自由きが効くのさ。もともと僕だつて、学術用に英國人の医者から頼まれたのが初まりなんだ。」

甲谷は參木が人間製造会社の支配人に納まつてゐる所を想像し

た。すると、やがて、彼らしい幸福が、骸骨の踊りの中から舞い上つて来るのではないかと思われた。

「それで踊りを見ていて、よく骸骨に見えないもんだね。」と甲谷は眉を吊り上げて笑つた。

「それがこの頃困るんだ。俺の家の地下室は骸骨でいっぱいさ。生きてる人間を見ていても一番先に肋骨が見えてくる。とにかく君、人間という奴は誰でも障子みたいに骨があるんだと思うと、おかしくなるもんだよ。」

笑いながらアブサンを飲む大きな山口の唇が開きかかると、再びダンスが始まり出した。甲谷は立ち上つて彼にいった。

「君、ひとつ踊つて来るからね、そこから骸骨の踊りでも見ていい

てくれ。」

甲谷はまた宮子と組んで、モールの下で揺れ始めた男女の背中の中へ流れ込んだ。甲谷は宮子の冷たい耳元で囁いた。

「君、今夜は宜しく頼んでおきます。」

「何に？」

「いや、何んでもないさ。いたつて当たり前のことだよ。」

「いやよ。風儀が悪いじゃないの。」

「だつて、結婚しなけれやなお風儀が悪くなるさ。」

「もう、お饒舌りしちゃ、塵埃しゃべごみを吸うわよ。」

しかし、甲谷は山口の眼がうす笑いを浮べて光っているのを見たびに、いざれどちらも骸骨だと気がつくようにな、激しく宮子

の脊中を人の背中で廻し始めるのであつた。そのとき、宮子は山口がしたように、急に甲谷の耳もとで小声でいった。

「あなた、ちよつと、あそこに芳秋蘭が来ているわ。」

甲谷は山口にいわれたまま忘れていた女のことを思い出して振り返つた。だが芳秋蘭の姿はもう廻る人の輪の中に流れ込んで見えなかつた。

「君、その芳秋蘭という女の方へ、僕をひっぱつていつてみてくれないか。さつきも山口がその女の事をいつてたが、何んだ。」

宮子は甲谷を引いて逆に流れの中を廻つていつた。甲谷はあれかこれかと宮子の視線のままに首を廻わしているうちに、不意に背後の肩の中から、一対の支那の男女の顔が現れた。甲谷は吹か

れたように眼を据えると宮子にいった。

「あれか。」

「そう。」

甲谷は宮子を今度は逆に引きながら、芳秋蘭の後から廻つていった。すると、くるくる廻るたびごとに、芳秋蘭の顔も舞いながら、男の肩の彼方から甲谷の方を覗いていた。甲谷はその美しい眼前の女性を、自分の兄の高重も知つているのだと思うと、かすかに微笑を送らずにはいられなかつた。しかし、秋蘭の眼は澄み渡つたまま、甲谷の笑顔の前を平然と廻り続けて踊りが終んだ。

——歌余舞い倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転——。

甲谷は徐校濤の美人譜中的一句を思い浮べながら、宮子にティ

ケツトを手渡した。

「あの婦人は実に綺麗だ。珍らしい。」

「そうね。珍らしいわ。」

宮子のむツと膨れかかつた口元を楽しげに眺めながら、甲谷は山口の傍へ戻つて来るとまたいつた。

「君、あの芳秋蘭という婦人は珍らしい。どうして君はあの女を知っているんだ？」

「僕は君、これでも君の知らぬ間にアジヤ主義者のオーソリチーになつてゐるのだぜ。この上海で有名な支那人なら、たいていは知つてるさ。」山口は満面脂肪に漲みなぎつた顔を笑わせて秋蘭の方を見た。

「じゃ、僕は以後心を入れかえて君を尊敬するから、ひとつあの婦人を紹介してくれ。」

「いや、それは駄目だ。」と山口はいつて手を上げた。

「どうしてだ。」

「だつて、君を紹介するのは、日本の恥をさらすようなもんじやないか。」

「しかし、君がもう代表して恥をさらしてくれているなら、何も僕が晒さらしたつてかまわぬだろう。」

山口は虚を突かれたように大げさに眼を見張った。

「ところが、それが、僕のはお柳の主人の錢石山せんせきさんに紹介されたんだからね。錢石山より、まだ僕の方がましだろう。」

「じゃ、今夜は思いとまるとしようかね。」

甲谷と山口が、片隅の芳秋蘭のテーブルの方へ視線を奪われて黙り始めると、それに代つて、宮子を張り合う外人たちが、夜ごとの騒ぎを始めて快活に動き出した。山口は甲谷の腕を引くと、宮子の方を向きながらいつた。

「おい甲谷、君はあるの宮子が好きなんじやないか。」

「そう、まあ、見た通りの所だね。」

「ところがあれは、腕が凄いからやめなさい。あそこにいる外人は、見えてるとみなあの女のいいなりだよ。」

「じゃ、君も一度は叩かれたことがあるんだな。」

「いや、あの女は、日本人なんか相手にしたら、お目にかかるん

よ。あれはスパイかも知れないぜ。」

「よろしい。」と甲谷はいうと、昂然と胸を反らした。

二人は煙草をとり上げて吸いながら、しばらく外人たちの宮子をからかう会話に耳を傾けて黙っていた。

「あれは君、アメリカ人かい。」と、しばらくして甲谷は訊ねた。  
 「うむ、あれはパーマーシップビルディングの社員が二人と、マー  
 カンテイル・マリン・コンパニーが一人だ。ところが、今日はこ  
 れならまだ静かな方で、ときどき宮子を中心に、ここで歐洲大戦  
 が始まることもあつたりしてね。それが楽しみで、実はここへ来  
 るんだが、あの女の本心だけは流石の俺にも分らんね。」

山口はゆつくり首をめぐらせて、外人たちから芳秋蘭のいるテ

ーブルの方へ向き返つた。すると、「おツ」と彼はいつて背を起すと、うろたえたように周囲をくるくる見廻しながら甲谷にいた。

「どこへ行つた。芳秋蘭？」

甲谷はそれには返事も返さず黙つて立ち上ると、山口を捨てていきなり表へ飛び出した。芳秋蘭の黄色な帽子の宝石が、街燈にきらめきながら車の上を揺れていつた。甲谷は黄包車ワンドボウツを呼びとめると、すぐ帽子も冠かぶらず彼女の後から追つていつた。彼は車の上で上半身を前に延ばし、もつと走れ、もつと走れ、といいながら、頭の中では芳秋蘭を追いもせず、しきりにだんだん遠ざかっていく宮子の幻影を追つてゐるのであつた。

——あの女は、あれは素敵だ。あが俺の嫁になれば、もう世の中は締めたものだ。

ブリッジ形の秋蘭の鼻は、ときどき左右の店頭に向きながら、街路樹の葉蔭の間を貫いて辻つた。唾を吐いている乞食や、鋪道の上で銅貨を叩いている車夫や口の周囲を光らせながら料亭から出て来た客や、煙管を喰せる喰わえて人の顔を見ている売卜者やらが、通りすぎる秋蘭の顔を振り返つて眺めていた。甲谷は彼らがそんなに振り返り始めると、ふと忘れかけている秋蘭の美しさを、再び思い浮べて彼らのように新鮮になつた。ひき緊つた口もと、大きな黒い眼。鷺水式の前髪。胡蝶形の首飾。淡灰色の上着とスカート。——しかし、宮子は？ 彼女の周囲では外人たちが競つて

宮子の嗜好を研究し、伸縮自在な彼女の視線の流れを追い求め、  
彼女と踊る敵の度数を暗黙の中に数え合い、そうして、ますます  
宮子を高く彼らの肩の上へ祭り上げる方法ばかりをとつていて。  
しかし、あの女をシンガポールへ連れていつたら、美人の少いシ  
ンガポールの日本人たちは、ひつくり返つて騒ぐだろう。

甲谷はふと気がつくと、秋蘭の車が、突然横から現われた水道  
自動車に喰い留められて停止した。すると、甲谷の車はその隙に  
割り込んで、秋蘭を追い抜くと同時に、自動車の側面に沿つて辻  
り出した。甲谷の追つて来た努力は、全くそこで停止させられね  
ばならぬのだ。彼は振り返つて秋蘭を見た。彼女は背広の青年を  
後に従えて、足を組み直しながら甲谷を見た。甲谷は彼女の顔か

ら、一瞬、舞踏場の記憶を呼び起したかのごとき微動を感じた。しかし、甲谷の車夫は、並んだ自動車が急激に速度を出し始めると同時に、彼もまた一層速力を出して走り出した。秋蘭との距離がだんだん拡がつていった。甲谷は再び振り返つて秋蘭を見た。だが、そのときには、もう秋蘭の姿は見えなくて、アカシヤの花蔭に傾いた青い壁が、瓦斯燈の光りを受けながら蒼ざめて連つているのが眼についただけだった。

山口はもう甲谷の帰りが待ちくたびれて、ホールから外へ出た。金色の寝台の金具、家鴨のぶつぶつした肌、切られた真赤な水みずく慈姑、青々と連つた砂糖黍の光沢、女の沓や両替屋の鉄窓。

玉菜、マンゴ、蠟燭、乞食、——それらのひつ詰つた街角で、彼はさてこれからどこへ行つたものやらと考えた。すると、トルコ風呂で背中をマッサージしてくれるたびに、いつも羞しそうに頬を赭あからめているお杉の顔が浮んで来た。数々の羞はじを知らぬ放埒ほうらつな女を見て来続けている山口には、お杉の滑らかに光つた淡黒い皮膚や、瞼毛まつげの影にうるみを湛えた黒い眼や、かつちり緊しまつた足や腕などは、忘れられた岩陰で、虫氣もなくひとり成長していた若芽のように感じられた。

——しかし、待てよ、あの女を嗅かぎつけてるのは、まさか俺だけじやないだろう。——

山口は早くお杉を見に行こうと急に思い立つと、立ち停どまつて顔

を上げた。すると、忽ち、もう先きから、街の隅々から彼の拳動を窺つていた車夫の群が、殺到して來た。山口はうす笑いを洩しながら車夫の顔をすらりと見廻して、その一つに飛び乗つた。

山口はトルコ風呂へ着くと誰も人のいない応接室へ這入り込んだ。じんじんと蒸氣を出す壁の振動が、かすかに身体に響いて來た。彼はソファーヘもたれて煙草を吸つた。

しかし、前方の壁に嵌つた鏡を見つけると彼は立ち上つて口髭をひねくつてみた。すると頭の上の時計の音から、ふと家に一人残しておいたオルガの姿が浮んで來た。オルガは昨夜、急に癲の発作を起して彼の手首に爪を立てたのだ。山口は手首の爪痕をカフスの中から出したり、引つ込めたりしてみているうちに、

腹部を出して悶<sup>もん</sup>転<sup>てん</sup>しているオルガの反り返つた咽喉<sup>のど</sup>が、お杉の咽喉に変つて來た。

「おい。山口君。」

突然、開いたドアの間から、甲谷の兄の長い高重の顔が現れた。山口は振り返つて煙草を上げた。

「しばらくだね。さつきまで君の弟とサラセンで踊つてたんだが、あんまりあれは、上海へ置いとくといけないぜ。」

「じゃ、今夜弟はここへ来るんだな。僕はあ奴<sup>いっ</sup>をこないだから探してたんだが。」

「いや、それは分らんぞ。君の弟は俺をほつたらかして、芳秋蘭の後からつけてつたままなんだよ。どうも手も早けりや足も早い

よ。」

「じゃ、秋蘭は踊場にいたのかい。」と高重は眼を見張つた。  
「うむ、いた。実は俺も後からつけてみようと思つてたんだが、  
おさきに君の弟にやられたよ。」

高重と山口はソファへ並んだ。高重は突き出た淡い口髭の周  
囲をとがらせながら、黒い顔の中で、一層いぶか訝しそうに眉をひそ顰めて  
いった。

「秋蘭が今頃サラセンで踊つてるなんて、それはおかしいぞ。誰  
かいたか、傍にロシア人でもいなかつたか。」

「いたね。一人若い男がついてたよ。」

高重は東洋紡績の工人係りで、芳秋蘭は彼の下に潜んでいる職

女であつた。その職女が日本人経営の踊場へ来ることに關して、高重の理解し兼ねていることは、早<sup>は</sup>や山口にも分るのであつた。

「しかし、いずれ秋蘭だつてスパイだろう。どこへだつて現れるさ。」と山口はいつた。

「ところが、僕の工場には今しきりにロシアの手が這入つて來るのでね。<sup>やつ</sup>こ奴<sup>やつ</sup>にはたまらんのだ。いつ爆発するか分らんので、実はひやひやしているのだよ。手先の秋蘭は、どうも戦闘力が激しくつてね。」

「ロシアか、あれは不思議な奴<sup>やつ</sup>だのう。わしにはあ奴<sup>いっ</sup>は分らんよ。」

山口はまた立ち上ると、鏡を覗き込みながら、

「どうです。高重さん、いっぱい今夜は？」

「よろしいですとも。」

「それじや、一つ。」

山口は好人物の坊主のような円顔を急にてかてか勢い込ませると廊下へ出た。彼はそこで、お杉をひと目と、急がしそうに湯女部屋を覗いてみた。そこにもお杉がいないと、今度は階段を二階の方へ三、四段上つてみて、人気のなさそうな気配を感じると、また浴場の中を覗き廻つた。

「駄目、駄目、今日は思惑計画、一切手違いというところだ。」

「何をこそぞそこで狙つてているのだ。」と高重はいつた。

山口は高重には答えずに、表へ出ようとすると、湯女の静江が

這入つて來た。彼女は山口を見ると、いきなりぴつたりと彼の胸にくつつくように立ちはだかつて、早口でいった。

「あのね、今さきお杉さんが首になつたのよ。お神さんが嫉妬もや燒いて、ほりだしてしまつたの。あの子可哀想に、しくしく泣いて出ていつたわ。」

「どこへいつた？」山口は思わず外へ乗り出した。

「どこへって、それがあの人、行くところなんかあれば誰も心配しやしないけど、そんなとこなんかないんですもの。」

山口は後から来る高重にかまわず、急いで三、四歩通りの方へ歩いていった。しかし、勿論もちろん、今頃からお杉の行先なんか探したつて分ろうはずもないのに気がつくと、またくるりと廻つて静

江の傍へ引き返した。

「お杉の行先が知れたら、すぐ知らせてくれないか。分つたかい。  
」

彼は暗闇の方へ向き返つて、五ドル紙幣を静江に握らせて、また高重の後を追つて來た。

「どうも今夜は、金の要ることばかりだよ。」

「なんだ。お杉つて？」

「いや、これがなかなか可憐な代物しろものさ、甲谷が秋蘭を追つかけていきよつたから、そんならこつちを一つと思つたら、風呂屋のお神こうが首を切つて抛り出したとこだというのさ。ひでえ野郎だ。」

高重は山口がお杉の家出で周章あわて出したのを見ると、お杉とは

どんな女だつたのかと考えた。前に高重は妹の競子が娘の頃、彼女を山口にならやつても良いと思つたこともあつたのだ。その頃は、山口も競子が好きで、彼女を包む沢山の男たち同様に、競子の後を暇さえあれば追いかけたのである。山口は大通へ出ると、霧の深まつて来始めた左右の街を見廻しながらいつた。

「これからサラセンへいつても良いが、まさか甲谷は、今頃まで俺を待つてる気遣いもなかろうね。」

「芳秋蘭を追つかけていつたのなら、ひよつとしたら、奴、今頃はやられているかもしけないぜ。あの女はいつでもピストルを持つてるからな。」

「しかし、女に親切にして、撃<sup>う</sup>たれたという話はまだ聞かんよ。」

それより君はどうなんだ。あの秋蘭は素晴らしい美人だが、毎日あの女を使っているくせに、まさか金仏かなぶつでもないだろう。

「ところが、あの女は大丈夫だ。僕はあの女の正体を、まだ知らないことにしてあるんだ。」

「それや、知つたら逃げられる恐れがあるからな。」

「冗談いつちや困るよ。僕はこれでも、今は日本を背負つて立っているようなもんだからね。僕があの女に少しでも引かれちや、  
忽ち工場たちまは丸潰れだ。君のアジヤ主義も結構だが、もう少しほは  
われわれ国粹主義者の苦心も、考えてくれたつて良いだろう。」

「国粹主義か、よく分つた。それじや、いっぱい飲んでからひとつ今夜は議論をしよう。おい。」

と、山口はステッキを上げて 黄包車ワングボウツを呼びとめた。

## 五

お杉はその夜、参木が去るとお柳に呼ばれて首を切られた。これは参木が早くも寝台の上で予想したほども、確かな心理の現れを形の上で示しただけであつた。お杉はしばらく事件の性質が、無論何のことだか分らなかつた。彼女はトルコ風呂の入口から出て来ると、明日からもう再びここへ来ることが出来ぬのだと知り始めた。彼女は露地を出ると、鋪道に閉め出された黄包車ワングボウツの車輪の傍を通り、また露路の中へ這入つていつた。露路の中には、

霧にからまつた円い柱が廻廊のように並んでいた。暗い中から、耳輪の脱れかかった老婆が咳きをしながら歩いて來た。お杉は柱の数を算えると、泣いては停り、泣いては停つた。彼女は露路を抜けると裏街を流れている泥溝どろどぶに添つてまた歩いた。泥溝の水面には真黒な泡がぶくりぶくりと上つていた。その泥溝を包んだ漆喰しっくいの剥げかかった横腹で、青みどろが静に水面の油を舐なめていた。

お杉は参木の下宿の下まで來ると、火の消えた二階の窓を仰いでみた。彼女はここまで、もう一度参木の顔をただ漫然と眺めに來たのである。それから——彼女はそれからのことは、ただ泣く以外には知らなかつた。お杉は漆喰の欄干にもたれたまま片手で

額を<sup>おさ</sup>壓えていた。彼女の傍には、豚の骨や吐き出された砂糖黍の  
噛み粕<sup>かす</sup>の中から瓦斯燈<sup>ガスとう</sup>が傾いて立つていた。彼女は多分その瓦斯  
燈の光りが消えて、参木の部屋の窓が開くまで動かぬだろう。彼  
女の見ている泥溝の上では、その間にも、泡の吹き出す黒い芥<sup>あくた</sup>が  
徐々に寄り合いながら一つの島を築いていた。その島の真中には、  
雛の黄色い死骸が猫の膨れた死骸と一緒に首を寄せ、腹を見せた  
便器や靴や菜つ葉が、じつとり積つたまま動かなかつた。

夜が更けていった。屋根と屋根とを奥深く割つている泥溝の上  
から、霧が一層激しく流れて來た。お杉は欄干にもたれたまま、  
うどうとい眠りをし始めた。すると、急に彼女は靴音を聞いて眼  
を醒した。見ていると、霧に曇つた人影が一人だんだん自分の方

へ近づいて来た。お杉はその人影と眼を合した。

「お杉さんか。」と男はいった。

男は芳秋蘭を追つたあと、酔いながら踊場から踊場と追つて、参木の所へ帰つて來た甲谷であつた。

「どうした。今頃、さア、上れ。」

甲谷はお杉の手を持つと引つ張りながら階段を上つていつた。

お杉は二階へ通されたが、参木の姿は見えなかつた。甲谷は部屋の中で裸体になると、トルコ風呂に飛び込むように寝台に身を投げた。

「さア、お杉さん、参木はまだだぞ。僕は寝るよ。疲れた。君はそこらで寝ていてくれ。」

いつたかと思うと、甲谷はもう眼を瞑じて眠り出した。お杉はどうしたものやら分らぬので、寝台の下で甲谷の脱ぎ捨てた服を黙つて置んでいた。彼女が少し身を動かすと、男の匂いが部屋の中で波を立てた。お杉は部屋を片附けると、参木の愛用しているコルネットの銀の金具を恐<sup>こわ</sup>そうに撫<sup>と</sup>でてみた。それから、本箱の中の分らぬ洋書の背中を眺めてみて、眠むそうな自分の顔がぼんやり硝子に映っているのを見つけると、思わず顔をひっこめてまた覗いた。彼女はしばらくはざことりと物音がしても「もしや参木が」というように身を起した。が、参木は二時が打つても帰らなかつた。そのうち、彼女はいつの間にか、積まれた楽譜に身をよせたまま、波や魚や、群れる子供の夢を見ながら眠つていつた。

ふとお杉は夜中におぼろげに眼が醒めた。すると、部屋の中は真暗になつていた。と、その暗の中で、彼女は自分の身体を抱きすくめて来る腕を感じた。お杉は苦しさに抵抗した。しかし、彼女の頭は、まだ子供の押し寄せて来る夢を見ながら、ますます身体に力を込めて逃げようとするのだった。

「あの、——駄目よ、駄目よ。」

彼女は何者にともなく、しきりに激しく声を立てようとした。しかし、声は咽喉につかえて出なかつた。お杉は汗をびっしりとかきながら、立ち上ろうとして膝を立てた。そのとき、耳の傍で、男の声がしたと思うと、お杉ははツとして身体をとめた。彼女は

甲谷の身体を感じたのだ。と、間もなく、お杉はぐるぐると舞い始めた闇の中で、頭と一緒にがっくり崩れおちる楽譜の音を聞きつけた。

翌朝お杉が眼を醒ますと、参木が甲谷と一つの寝台の上で眠つていた。お杉は昨夜の出来事を思い出した。すると、今まで自分を奪つたものは甲谷だとばかり思つていたのに、急に、それは参木ではないかと思い出した。しかし、それをどうして二人に訊き正すことが出来るだろう。彼女は昨夜は、全く自分の眠さと真暗な闇の中で起つたことだけを、朧<sup>おぼ</sup>ろげに覚えているだけだつた。

お杉はしばらく、朝日の縞の中に浮いている二人の寝顔を見較べながら、首を傾けて立つていた。物売りの声が、露路の隅々にま

で這入つて来ると、花売りの声も混つて來た。

「メークイホー、デーデホー、パーレーホツホ、パーレーホ。」

お杉は参木の服を壁にかけると湯を沸わかした。彼女は二人のうち

の誰か起きたら、自分を今日からここへ置くように頼んでみよう  
と考えた。だが、さてその二人の中の、誰に頼めばよいのか彼女

には分らなかつた。お杉は湯の沸く間、窓にもたれて下の小路を

眺めていた。昨夜眺めた泥溝どろどぶの上には、石炭を積んだ荷舟が、

黒い帆を上げたまま停つていた。その舟の動かぬ舵や、道から露

出した鉄管には、藁屑や沓下くつしたや、果実の皮がひつかかつて溜つ

ていた。ぶくぶく出る無数の泡は、泥のように塊かたまりながら、その

半面を朝日に光らせて狭い裏街の中を悠々と流れていつた。お杉

はそれらの泡を見ていると、欄干に投げかけている自分の身体が、人の売物になつてぶらりと下つているように思われた。もしここから出て行けば、彼女はどこへ行つて良いのか当あてがなかつた。間もなく、あちこちの窓から泥溝へ向つて塵埃ごみが投げ込まれた。鶏の群は塵埃の舞い立つたびごとに、黄色い羽根を拡げてぱたぱたと裏垣の上を飛び廻つた。湯が沸き出した頃になると、泥溝を挟んだ家々に、支那服の洗濯物がかかり始めた。物売りの籠に盛られたマンゴや白蘭花パーレーホーが、その洗濯物の下を見え隠れしながら曲つていつた。

やがて、甲谷が起きてきた。彼はお杉に逢うとタオルを肩に投げかけていた。

「どうだ、眠られたか。」

次に参木が起きてくると、眠そうにお杉に笑いながらいった。

「どうした、昨夜は？」

しかし、お杉は誰にも黙つて笑っていた。二人の背中が洗面所の方へ消えていくと、彼女は、そのどちらに自分が奪われているのかますます分らなくなつて來るのであつた。

## 六

参木はお杉を残したまま甲谷と一緒に家を出た。通りは朝の出勤時間で黄包車ワンドボウツの群れが、路いつぱいに河のように流れていた。

二人はその黄包車の上に浮きながら人々と一緒に流れていった。二人はお杉に関しては、どちらも分り合っているように黙つていた。その実、参木は甲谷がお杉を連れて来たのにちがいないと思っていた。そうして甲谷は、参木がお杉を呼び出したのにちがいないと。

建物と建物の間から、またひと流れの黄包車が流れて來た。その流れが辻ごとに合すると、更に緊密して行く車に車夫たちの姿は見えなくなり、人々は波の上に半身を浮べた無言の群集となつて、同じ速度で辻つていつた。参木にはその群集の下に、さらに車を動かす一団の群集が潜んでいるようには見えなかつた。彼は煉瓦の建物の岸壁に沿つて、ほうはい 澄湃として浮き流れるその各国人

の華やかな波眺めながら、誰か知人の顔が浮いていないかと探してみた。すると、後に浮いていたはずの甲谷が、彼と並んで流れで来た。

「おい、お杉はいつたい、どうしたんだ。」と参木は初めて甲谷に訊いた。

「じゃ、君も知らないのか。」

「じゃ、君が連れて帰つたんじやないんだな。」

「馬鹿をいいなさい。俺が帰つたらお杉が戸口に立つてたんじやないか。」

「ははア、じゃ、首を切られて行くとこがなかつたんだ。」

参木は昨夜のお柳の見幕を思い出すと、お杉の災いがいよいよわざわざ

自分に原因していることを感じて暗くなつた。しかし、それにしても、お杉が自分の家から出て行こうとしない所が不思議であつた。何か甲谷がお杉に釘を打つようなことをしたのではないか。この甲谷が昨夜お杉と一室にいたとすれば、そうだ、甲谷のことなら――。

彼は甲谷の顔を眺めてみた。その美しい才氣走つた眼の周囲から、参木はふと甲谷の妹の競子の容貌を感じ出した。すると、彼はお杉を傷つけたものが自分でなくして、自分の愛人の兄だということに、不満足な安らかさを覚えて來た。殊に、もうすぐ競子の良人が死ぬとすれば――。

「いつたい、昨夜はどうしたんだ。」と甲谷は訊いた。

「昨夜か、昨夜は酔っぱらつて露地の中で寝てたんだ。君は？」

「僕か、——僕は山口とサラセンで逢つて、それから、芳秋蘭という女の後を追つかけた。」

市場から帰つて来た一団の黄包車が、花や野菜を満載して流れ来た。参木と甲谷の周囲には、いつの間にか、薔薇や白菜が匂いを立てて揺れていた。それらの花や野菜は、建物の影を切り抜けるたびごとに、朝日を受けてさらさらと爽やかに光つていった。参木は思つた。この葬式のような花の流れは、これは競子の良人の死んだ知らせではなかろうかと。すると、彼は、自分の不幸は他人の幸福を恨むが故だと気がついた。もし自分が競子の良人のように幸福であつたなら、誰か自分のような不幸なものから、同

様に自分の死ぬことを願われていたに相違ない。彼は、自分の周囲の人の流れを見廻した。その滔々<sup>とうとう</sup>として流れる壯快な生活の河を。どこに悲しみがあるのか。どこに幸福があるのか。墓場へ行つても、ただ悲しそうな言葉が瀟洒<sup>しようしゃ</sup>として並んでいるだけではないか。だが、次の瞬間、これは朝日に面丁<sup>めんてい</sup>を叩かれている自分の感傷にちがいないとと思うと、思わずやりとせすにはおれなくなつた。

## 七

参木が銀行の階段を登つて行くと、甲谷はそのまま村松汽船会

社へ車を走らせた。汽船会社は甲谷の会社の支配会社で、壮大な大建物の連つた商業中心地帯の真中にあつた。甲谷は車の上で、昨夜参木と食い違つて追い合つたその結果が、お杉にあられもない行為をしてしまつたことについて考えた。

——いや、しかしだ。まあまあ、五円も包んでやれば、それでおしまいさ。良心か、何にそんなことが必要なら、上海で身体をぶらぶらさせている不経済な奴があるものか。——

これで甲谷の感想はしまいであつた。その癖、彼は、参木からお杉を奪つてしまつたということによつて、自分の妹の愛人に迫つていた危難を、妹のために救つてやつたという良心の誇りを感じて勇しくなつていた。

商業中心地帯へ這入ると、並列した銀行めがけて、為替仲買人の馬車の密集団が疾走していた。馬車は無数の礫<sup>つぶて</sup>を投げつけるような蹄<sup>ひづめ</sup>の音を、かつかつと巻き上げつつ、層々と連なりながら、大路小路を駆けて來た。この馬車を動かす蒙古馬の速力は、刻々ニューヨークとロンドンの為替相場を動かしているのである。馬車は時々車輪を浮き上らせると、軽快なヨツトのように飛び上つた。その上に乗っている仲買人たちは、ほとんど欧米人が占めていた。彼らは微笑と敏<sup>びん</sup>捷<sup>しよう</sup>との武器をもつて、銀行から銀行を駆け廻るのだ。彼らの株の売買の差額は、時々刻々、東洋と西洋の活動力の源泉となつて伸縮する。——甲谷は前から、この港のほとんど誰もの理想のように、この為替仲買人になるのが理想で

あつた。

甲谷は村松汽船会社へ行く前にその附近にある金塊市場へ立ち寄つて覗いてみた。市場はおりしも立ち合いの最中で、ごうごうと渦巻く人波が、ホールの中でもみ合つていた。立ち連つた電話の壁のために、うす暗くなつた場内の人波は、油汗ににじみながら、売りと買いとの二つの中心へ胸を押しつけ合つて流れていた。その二つの中心は、絶えず傾いて叫びながら、<sup>そ</sup>反り返り、流動しつつ、円を描いては壁に突きあたり、再び押し戻しては、壁にはじかれて、ぐるぐると前後左右へ流れ続けた。しかし、周囲の壁や、連つた椅子の上に盛り上つてゐる観衆は、黙々として視線を眼下の渦の中心に投げていた。

「もう一年だ——もう一年たてば、俺は美事にここで、巨万の富を掴んでみせるぞ。」と甲谷は思った。

彼は椅子の上からホールを見降ろしながら、これが一分ごとに、ロンドンとニューヨークの金塊相場に響きを与えるものとは、どうしても思えなかつた。彼は椅子から降りて一つの電話室を覗いてみた。送話器を頭から脱した青年が、ぐつたりと腹部をへこませて、背部の電話のパイプのより塊かたまつた壁にもたれながら煙草を吸つて休んでいた。

村松汽船会社へ甲谷が着いたときは、十時であつた。彼は広壮大な事務部屋の中央を貫いて、腰から下が廊下になつてゐる通路を通りながら、万遍なく左右の知つた社員たちに会釈えしゃくを振り撒きま、

最後の部屋の木材課へ這入つていった。すると、シンガポールの本社から来ているべき旅費の代りに、彼宛に特電が這入つていた。

「市場益々險惡。——倉庫材木充満す。腐敗の恐れあれば、満身貴下の活動を切望す。——」

見ると同時に、甲谷からは嫁探しの希望が消えてしまつた。これでは旅費の請求さえ不可能にちがいない。間もなく早速帰れと命令が下るのは分つてゐる。——甲谷はイギリス政府の護謨制限撤廃の声明が、今頃自分の嫁探しにこんなに早く、影響を及ぼそうとは考えなかつた。勿論、彼には、アメリカへ返すイギリスの戦債が、前からシンガポールの錫と護謨との上で呼吸していたのは分つていた。だが、そのため、シンガポールの市場が恐慌し、

材木が停止し、嫁探しまで延引しなければならぬ結果にならうとは——。

「よしそれなら。」と甲谷は思つた。彼は階段を降りて来た。乞食の子供が彼の後から横になつて追つ駆けて來た。彼の頭には宮子もなかつた。芳秋蘭もお杉もなかつた。無論、乞食の子供にいたつては。ただ、彼にはフイリッピン材の逞<sup>たくま</sup>しい切れ目が間断なく浮んでいた。彼はその敵材を圧迫する戦法を考えた。——何故にシンガポールの材木は負け出したか。

——切れ目がいかぬ、切れ目が。——

事実、シンガポールのスマトラ材は、フイリッピン材に比べて、截断量が五寸程長かつた。この五寸という空間の占有量は、それ

が支那人に対する歓心とはならず、運送船の吃水線を深めるこ  
とに役立つただけだつた。のみならず、陸上の倉庫へ突き衝り、  
運搬の時間を食らい、腐敗する上に於ては最も都合よき実物とな  
つて横たわり出したのだ。この虚に乗じて、フイリッピンは心理  
学より物理学を中心にして進んで來た。甲谷の戦法は、ここで変  
更せられねばならなかつた。彼は先ず、材木会社を駆け廻り、そ  
の主流が支那人であるかなきかを確め、それに応じてその場で適  
宜の作戦を立てねばならぬのだ。彼はカラーレを常に眞白にし、服  
の折目を端正にして微笑を含み、本社の恐慌を歪まぬネクタイで  
縮め縛つて下へ隠し、さて、すぐには切り込まず、悠々と相手の  
御機嫌だけを伺つて引き上げねばならぬ、と考えた。すると、彼

の後から、まだ乞食の子供がしつこく追つ駆けて来ているのに気がついた。

彼は戦闘心を養うために、河を登るフイリッピン材の勢力を眺めに突堤に添つて歩いて見た。河の両側には空虚の小舟が、竿を戦のように縦横に立て連ねていた。そのどの船にも、檻樓ぼろが旗のよう下つっていた。褐色の破れた帆をあげた伝馬船てんませんが、港の方から、次ぎ次ぎに登つて來た。棉花を積んだ船、落花生を満載した荷船、コークス、米、石炭、粘土、籐、鉄材、それらの間に交つて、フイリッピン材の紅と白とのラウアンが、鴨緑江材のケードルや、暹羅材シヤムの紫檀しだんと競いながら、従容じょうようとして昇つて來た。しかし、甲谷の得意なシンガポールの材木は、花梨木もタ

ムブリアンも、ミラボーも、何に一つとして見ることが出来なかつた。

「これでは駄目だ、これでは。」

ふと見ると、上流から下つて来た大きな筏いかだが、その上に土を載のせ、野菜の畠を仕立てて流れていた。その周囲の水の上で、サンパン※が虫のように舞い歩いた。真青なバナナを盛り上げた船が檻樓ぼろと竿の中から、緑ろくしょう青きゆうのようになじみ出で来ると、橋の穹窿きゆうりゆうの中へ這入つていつた。

すると突然、その橋の上で、一発の銃が鳴つた。と、更に続いて連續した。橋の向うの赤色ロシアの領事館の窓ガラスが、輝きながら穴を開けた。見る間に、白衛兵の一隊が、橋の上から湧き

上つて抜刀した。彼らは喊声かんせいを上げつつ、領事館めがけて殺到した。窓から逆さまに人が落ちた。と、枳殻からたちの垣の中へ突き刺つて、ぶらぶらすると、一転したと思うやいなや、河の中へ転がつた。

館内ではしばらく銃声が続いていたが、間もなく、赤色の国旗が降ろされて白旗が高く昇り出した。見ていた群集の中から、歐米人の白い拍手が、波のように上つた。続いて対岸から、建物の窓々から、船の中から、起りだした。甲谷は昨夜見た芳秋蘭の澄み渡つた眼を思い描きながらも、「万歳、万歳、万歳。」と叫んで、彼らに和して手を打つた。やがて、抜刀の一隊は自動車に飛び乗ると、群集の中を逃げていつた。しかし、この出来事を見て

いた支那の群衆だけが、いつもことが、いつも起つたように起つただけだというように、騒がなかつた。甲谷が穴の開いた領事館の前まで行つたときには、印度人の巡査に担かづがれた負傷者の傍を、ロシアの春婦たちがイギリスの水兵と一緒に、煙草を吹かして通つていつた。

## 八

参木の常緑銀行では、その日の閉鎖時間が真近まぢかになると不穩な予言が蔓延した。それは、ある盜賊団の一団が常緑銀行の自動車のマークを知つていて、取引銀行への現金輸送の自動車を襲うで

あろうという隠謀が、一人の行員の口から洩れ始めたことから発生した。

参木はこの噂を耳にすると愉快になつた。やがて現金輸送に従う者はなくなるだろう。すれば、専務が困るにちがいないと。そうして、それは、事実になつた。現金輸送のときになると、突然輸送係りの者が辞職した。

銀行の内部は俄に専務を中心にして緊張し始めた。専務は一同を特別室に集めると、賞金二十円を賭けて輸送係りを募集した。だが、勿論、生命より金錢を尊重する者は誰もなかつた。何ぜなら、この支那の海港は、生命を奪うことを茶碗を破ることと等しく思つている団体が、その無数の露路の奥底に、無数に潜んでい

ると幻想し得られるが故である。専務は更に五十円の賞与を賭けた。だが、依然として行く者は誰もなかつた。五十円が百円に昇り出した。百円が百二十円に競り上つた。が、かように上り出すと、まだどこまで上るか予想を許さぬ興味のために、誰も口を開かなかつた。すると、参木は初めて口を開いて専務にいつた。

「もうこうなれば、いくら賞与をかけても行くものはないと思ひますから、こういう場合は、日頃の専務の御手腕に従つて、専務自身が行かれるべきだと思います。」

「何ぜだ。」と専務は質問した。

「それは専務が一番好く御承知のはずだと僕は思います。銀行にとって、現金輸送が不可能になつたということは、最も専務がそ

の責任を負つて活動しなければならぬ時機だと思います。」

「君の意志はよく分つた。」と専務はいうと片眼を大きく開きながら、指先きを椅子の上で敏捷に動かした。

「それで君は、僕がいなくなつたら、この銀行がどうなるかといふことも、勿論知つているのだろうね。」と専務は訊ねた。

「それや、知らないこともあります。しかし、あなたがいなくなると仰おっしゃるのは、あなたが危害を加えられた場合のことを仰有るのだろうと思いますが、あなたが危害を受けられて悪いときなら、少なくとも他の者だつて危害を受けて悪い場合にちがいありません。今の際は銀行の危急のときです。危急のときに専務が責任を他に転嫁させることは、専務の資格がどこにあるか

分らないと思います。殊にこの銀行でいつも一番利益を得られるものは、専務です。その専務が——。」

「よし、もう分った。」

専務は行員の沈黙のうちで、傲然として窓の外の風景を睨んでいた。にら参木はこの悪辣な専務が、自分を解雇することが出来ないのだとと思うと、日頃の鬱憤を晴らしたように愉快になつた。

「じゃ、参木君はもう帰ってくれ給え。」と専務はいつた。

参木は黙つて入口の方へ歩いた。が、入口のハンドルを握ると振り返つた。

「僕は明日から来なくともいいんでしょうか。」

「それは、君の意志の自由にやり給え。」

「僕の意志だと、また出て来るかも知れませんが。」

「じゃ、なるべく遠慮するようにしてくれ給え。」

「承知しました。」

参木は銀行を出ると、やつたなと思つた。が、もし復讐ふくしゆうのために専務の預金の食い込みを吹聴ふいちょうするとすると、取付けを食うのは分つていた。だが、取付とりつけを食つて困るのは、銀行よりも預金者だつた。しかし、いずれにしても、専務が自分の食い込みを、無価値な担保を有価値に見せかけて償つつぐなっている以上、その欠損は早晚表面に現れるに違ひなかつた。しかし、その現れるまでの期間内に、まだどれだけの人々が預金をするか。この預金の量が、専務の食い込みを償うものとしたならば、預金者は救われ

るのだ。参木は河の岸で良心で復讐しようとして藻搔<sup>もが</sup>いている自分自身を発見した。これは明らかに、彼の敗北を物語つているのと同様だった。明日から、いよいよ饑餓が迫つて来るだろう。

## 九

お杉は街から街を歩いて参木の方へ帰つて來た。どこか自分が使う所がないかと、貼り紙の出でいる壁を捜しながら。ふと彼女は露路の入口で売<sup>ばいほくしや</sup>ト者を見つけると、その前で立ち停つた。昨夜自分を奪つたものは、甲谷であろうか参木であろうかと、また彼女は迷い始めた。お杉の前で観て貰つていた支那人の娘は壁

にもたれて泣いていた。売ト者の横には、足のとれかかつたテーブルの屋台の上に、豚の油が淡黄く半透明に盛り上つて縮れていた。その縮れた豚の油は露路から流れ来る塵埃を吸いながら、遠くから伝わる荷車の響きや人の足音に絶えずぶるぶると慄えていた。小さな子供がその脊の高さを丁度テーブルの面まで延ばしながら、じつと慄えるうす黄色い油に鼻のさきをひつけていつまでも眺めていた。その子の頭の上からは、剥げかかつた金看板がぞろりと下り、弾丸に削られた煉瓦の柱はポスターの剥げ痕で、張子のように歪んでいた。その横は錠前屋だ。店いっぱいで拡つた錆びついた錠が、蔓のように天井まで這い上り、隣家の鳥屋に下つた家鴨の首と一緒になつて露路の入口を包んでいる。

間もなく、豚や鳥の油でぎらぎらしているその露路の入口から、阿片に青ざめた女たちが眼を鈍<sup>にぶ</sup><sub>そうろう</sub>らせて蹠踉<sup>あか</sup>と現れた。彼女たちは売ト者を見ると、お杉の肩の上から重なつて下のブリキの板を覗き込んだ。

ふとお杉は肩を叩かれて振り返った。すると、参木が彼女の後に立つて笑っていた。お杉は一寸お辞儀をしたが耳を中心に彼女の顔がだんだん赭<sup>あか</sup>くなつた。

「御飯を食べに行こう。」と参木はいつて歩き出した。

お杉は参木の後から従つて歩いた。もう一つの間にか夜になつている街角では、湯を売る店頭の黒い壺から、ほのぼのとした湯気が鮮かに流れていた。そのとき、参木は後から肩を叩かれたの

で振り向くと、ロシア人の男の乞食が彼に手を出していった。

「君一文くれ給え。どうも革命にやられてね、行く所もなければ食う所もなし、困っているんだ。これじゃ、今にのたれ死にだ。君、一文恵んでくれ給え。」

「馬車にしようか。」と参木はお杉にいつた。

お杉は小さな声で頷いた。馬車屋の前では、主婦が馬の口の傍で粥かゆの立食いをやつていた。二人は古い口ココ風の馬車に乗ると、ぼつてりと重く湿しめり出した夜の街の中を揺られていつた。

参木はお杉に自分も首になつたことを話そうかと思つた。しかし、それではお杉を抛ほうり出すのと同じであつた。お杉の失職の原因が彼にあるだけ、このことについては彼は黙つていなければな

らなかつた。参木は愉快そうに見せかけながらお杉にいつた。

「僕はあんたから何も聞かないが、多分首でも切られたんだろうね。」

「ええ。あなたがお帰りになつてから、すぐ後で。」

「そう。じゃ、心配することはない。僕の所には、あんたがいたいだけいるがいい。」

お杉は黙つて答えなかつた。参木は彼女が何をいいたそうにもじもじしているのか分らなかつた。だが、彼には、彼女が何をいい出そと、今は何の感動も受けないであろうと思つた。露路の裏の方でしきりに爆竹が鳴つた。アメリカの水兵たちがステッキを振り上げて車夫を叩きながら、ワンドボウツ黄包車に速力を与えていた。

馬車が道の四角へ来ると、しばらくそこで停つていた。一方の道からは塵埃ごみと一緒に豚の匂いが流れて來た。その反対の方からは、春婦たちがきらきらと胴を輝かせながら揺れ出て來た。またその一方の道からは、黄包車の素足の群れが乱れて來た。角の交通整理のスポットが展開すると、車輪や人波が真まつさお蒼な一直線の流れとなつて、どよめき出した。参木の馬車は動き出した。と、スポットは忽たちまち変つて赤くなつた。参木の行く手の磨かれた道路は、春婦の群れも車も家も、真赤な照明を浴びた血のような河となつて浮き上つた。

二人は馬車から降りるとまた人込の中を歩いた。立つたまま動かない人込みは、ただ睡を叶きながら饒舌しゃべつていた。二人は旗亭

の陶器の階段を昇つて一室に納つた。テーブルの上には、煙草の大きな葉が壺にささつたまま、青々と垂れていた。

「どうだ、お杉さん。あんたは日本に帰りたいと思わんか。」

「ええ。」

「もつとも今から帰つたつて、仕様がないね。」

参木は料理の来るまで、欄干にもたれて南瓜かぼちゃの種を噛んでいた。

彼は明日から、どうして生活をするのかまだ見当さえつかないのだ。だが、そうかといつて日本に帰ればなお更だつた。どの国でも同じように、この支那の植民地へ集つてゐる者は、本国へ帰れば、全く生活の方法がなくなつてしまつていた。それ故ここでは、本国から生活を奪われた各国人の集団が、寄り合いつつ、

全くここに落ち込んだが最後、性格を失つた奇怪な人物の群れとなつて、世界で類例のない独立国を造つていた。しかも、それぞれの人種は死に接した孤独に浸りながら、余りある土貨を吸い合う本国の吸盤となつて生活しなければならぬのである。このためここでは、一人の肉体はいかに無為無職のものと雖も、ただ漫然といふことでさえ、その肉体が空間を占めている以上、ロシヤ人を除いては愛国心の現れとなつて活動しているのと同様であつた。——参木はそれを思うと笑うのだ。事実、彼は、日本におれば、日本の食物をそれだけ減らすにちがいなかつた。だが、彼が上海にいる以上、彼の肉体の占めている空間は、絶えず日本の領土となつて流れているのであつた。

——俺の身体は領土なんだ。この俺の身体もお杉の身体も。——

その二人が首を切られて、さて明日からどうしたら良いのかと考えているのである。参木は自分たちの周囲に流れて来ている旧ロシアの貴族のことを考えた。彼らの女は、各国人の男性の股から股をくぐつて生活している。そうして男は、各国人の最下層の乞食となつて。——参木は思つた。

——それは彼らが悪いのだ。彼らは、自分の同胞を、股の下で生活させ、乞食をさせ続けて来たからだ。

人は、自分の股の下で生活し、自分の同胞の中で乞食をするよりも、他国人の股の下で生活し、他国人の間で乞食をする方が楽

ではないか。——それならと参木は考えた。

——あのロシア人たちに、われわれは同情する必要は少しもない。

このような非情な、明確な論理の最後で、ふと参木は、お杉と自分が誰を困らせたことがあるだろうと考えた。すると、彼は、鬱勃として揺れ出して来ている支那の思想のように、急に専務が憎むべき存在となつて映り出した。<sup>うつ</sup>だが、彼は自分の上役を憎むことが、ここでは彼自身の母国を憎んでいるのと同様な結果になるということについては忘れていた。<sup>しか</sup>然も、母国を認めずして上海でなし得る日本人の行動は、乞食と売春婦以外にはないのであつた。

## 一〇

参木に老酒<sup>ラオチュウ</sup>の廻り出した頃になると、料理は半ば以上を過ぎていた。テーブルの上には、黄魚のぶよぶよした唇や、耳のような木耳<sup>きくらげ</sup>が箸もつけられずに残っていた。臓腑を抜いた家鴨<sup>あひる</sup>、豚の腎臓、蜂蜜の中に浸つた鼠の子、林檎の揚げ物に竜顔の吸物、青蟹や帆立貝——参木は翡翠<sup>ひすい</sup>のような家鴨の卵に象牙の箸を突き刺して、小声で日本の歌を歌つてみた。

「どうだ、お杉さん、歌えよ、恥しいのかい。何に、帰りたい、馬鹿をいえ。」

参木はお杉を引き寄せると片肱を彼女の膝へつこうとした。すると、肱が脱<sup>はず</sup>れて、がくりとお杉の膝の上へ顎を落した。お杉は赤くなりながら、落ちかかろうとしている参木の顔をぶるぶる慄<sup>ふるふる</sup>える両膝で支えていた。湯気を立てて、とろりとしている鱈の鰆<sup>ふかひれ</sup>が、無表情なボーアの捧げている皿の上で跳ね上つたまま、薄暗い糞壺<sup>モード</sup>を廻つて運ばれて來た。参木は立ち上ると、欄干を掴<sup>つか</sup>んで下の通りを見降ろした。人込の中<sup>ワシタチノナカ</sup>で黄包車<sup>ワンボウツ</sup>に乗つた妓<sup>おんな</sup>が、刺繡した小さな沓<sup>くつ</sup>を青いランプの上に組み合せて揺れて來た。招<sup>しようは</sup>牌<sup>のぼり</sup>や幟<sup>のぼり</sup>を切り抜けて、彼女の首環の宝石が、どこまでも魚のように光つていつた。参木は旗亭を出るとお杉と二人でしばらく歩いた。露路の口を通りかかるたびごとに、彼は春婦に肩を叩かれ

た。

「あなた、いらっしゃいよ。」

「いや、俺のはこつちだ。」と参木は後にいるお杉を指差した。

彼はふと、お杉もしまいに、このように露路の入口へ立つのではないかと思つた。そして、自分は乞食になつて、路の真中に坐つてゐる。——しかし、彼は別に何の悲しみも感じなかつた。参木はお杉の手を曳いて歩いた。足が乱れて時々お杉の肩にもたれかかつた。

「おい、お杉さん、俺は明日から乞食になるかも知れないぜ。俺が乞食になつたら、お杉さんはどうしてくれる。」

お杉は大きな眼で参木の支えになりながら笑つていた。銃を逆さかさ

に担いだ印度人の巡査がお杉の顔を眺めていた。車座に蹲しゃがんだ裸体の車夫の群れが、天然痘の痕のあるうつとりとした顔を並べて、銅貨の面を見詰めていた。水の滴りそうな水慈姑みずぐわいが、真赤なまま、道路で油煙を立てているランプのホヤを取り巻いて積っていた。一人の支那人がふらりと参木の方へ近寄つて来ると、写真を出した。

「どうです、十枚三円。」

写真は二人の胸の間に隠されたまま、怪しい姿を跳ね始めた。

お杉は参木の肩越しに写真を見た。すると、彼女は急に顔をそむけて歩き出した。しばらくすると、参木は黙つて彼女の後からついて來た。彼は年来の潔白が、一時に泥のように崩れ出すのを感じ

じた。

「お杉さん。」と参木はいった。

お杉は赤くなつたまま振り返つた。が、またすぐ彼女は歩き出した。参木は前を行く彼女の身体に手が延びそうな危険を感じた。今夜は危い、今夜は、と彼は思つた。

「お杉さん、今夜は一寸用事があるから、あんた一人、さきへ帰つていくれないか。」

そういうと、彼は逆にくるりと廻つて、悲しげに歩いていった。そのとき、ふと彼は通りすがりの、女が女に見えぬ茶館へ上つていつた。

広い堂内は交換局のように騒いでいた。その蒸しむく空氣の中

で、笑婦の群れが、赤く割られた石榴<sup>ざくろ</sup>の実のように詰つていた。

彼はテーブルの間を黙々として歩いてみた。押し襲<sup>よ</sup>せて来た女が、彼の肩からぶら下つた。彼は群らがる女の胴と耳輪を、ぶら下つた女の肩で押し割りながら進んでいった。彼の首の上で、腕時計<sup>から</sup>が絡み合つた。擦り合う胴と胴との間で、南瓜<sup>かぼちや</sup>の皿が動いていた。

参木はこの無数の女に洗われるたびごとに、だんだん慾情が消えていった。彼は椅子へ腰を下ろすと煙草を吸つた。テーブルの上に盛り上つた女の群れが、しなしな揺れる天蓋のように、彼の顔を覗き込んだ。彼は銀貨を掌の上に乗せてみた。と、女の群れが、逆さまになつて、彼の掌の上へ落ち込んで來た。彼は重なり

合つた女の下で、漬物のように扁平になりながらげらげら笑い出した。銀貨を探す女の手が、彼の胸の上で叩き合つた。耳輪と耳輪がねじれ合つた。彼は膝で女の胴を蹴りながら、宙に浮んできらきらしている沓くつの間から首を出した。彼がようやく起き上ると、女たちは一つの穴へ首を突つ込むように、ばたばたしながら、椅子の足をひつ搔いていた。彼は銅貨を集つた女たちの首の間へ流し込んだ。蜂のような腰の波が、一層激しく揺れ出した。彼は彼に絡からまつた女たちを見捨てて、出口の方へ行こうとした。すると、また一団の新しい春婦の群れが、柱やテーブルの間から襲おそつて来た。彼は首を真直ぐに堅めながら、その尖角とがつた肩先で女たちを跳ねのけ跳ねのけ進んでいった。彼の首は前後から女の腕に絡ま

れながらも、波を押しきる海獣のように強くなつた。彼は女を引き摺る圧感で汗をかいた。彼は肩を泳ぐように乗り出しつつ、女の隙間をめがけて食い込んだ。だが、女の群れは、彼の身体から振り放されるたびごとに、新手を加えてたかつて來た。彼は肱で縦横無尽に突きまくつた。すると、突かれた女は踉<sup>よ</sup>ろけながら、また他の男の首に抱きついて運ばれていつた。

参木は茶館を出ると水を探した。もう身体がぐつたりと疲れたいた。彼は再び自分を待ち受けているお杉の身体を思い出した。

「危い、危い。」と彼はうめくように呟<sup>つぶや</sup>いた。

彼は競子の良人<sup>おつと</sup>が死んでしまつて、競子の顔を見るまでは、お杉の身体に触れてはならぬと思つていた。もし彼がお杉に触れた

ら、彼はお杉を妻にしてしまうに定つていると思うのだ。だが、それまで、いかなる整理法で身を清めて行くべきか。彼は何より古めかしい道徳を愛して來た。この支那で、性に対しても古い道徳を愛することは、太陽のように新鮮な思想だと彼には思うことが出来るのだ。――

すると、参木は不意に肩を叩かれた。振り向くと、さつきの支那人がまた写真を持つて彼の後に立っていた。

「どうです、十枚二円。」

参木はこの風のような支那人に恐怖を感じて睨んでいた。<sup>にら</sup>が、また彼はそのまま、黙つて歩き出した。いま一度写真を見たらもう駄目だ。――彼はショウウインドウの飾りつけを首を突き込むよ

うに見て歩いた。真赤な蠟燭の群れが天井から逆さに生えた歯の  
ように下つていた。鏡に取り包まれた桃色の寝台。牢獄のような  
質屋の門。うどんや餌餗屋の餌餗の中に、牛の足が蹄ひづめを上向けて刺さつて  
いた。すると、また、彼は肩を叩かれた。

「どうです、十枚一円。」

瞬間、参木は閃めいた一つの思想に捉われて興奮した。

——人間は、真に人間に對して客觀的になるためには、世人の  
繁殖運動を眼前に見詰めなければ、駄目である。——と。彼はし  
ばらくして、追い込まれるように露路の中へ這入つていつた。露  
路の奥には、阿片に慄えた女の群れがべつたり壁にひつついて並  
んでいた。

## 一一

プラターンの花からは、花が吹雪のようにこぼれていた。宮子は甲谷に腕を持たれて歩いて来た。栗に似たひしやげた安南兵が劔銃を連つらねて並んでいた。その円いヘルメットの背後では、フランスの無線電信局が、火花を散らして青々と明滅した。宮子はミシエルの高雅な秋波を回想しながら甲谷にいった。

「あたし、こここの電信局の技師さんと十三日間踊つたことがあつたのよ。フランス人でミシエルっていうの。あたし、ミシエルは好きだつたわ。どうしてかしら、あの人。」

踊り場からようやく初めて二哩<sup>マイル</sup>も踊子を連れて来て、与えた花束の大きさを較べられては、甲谷とて発奮せずにはおられないのだ。

「今夜だけは静に取扱つてもらいたいもんだね。何しろこの頃は急がしくつて、日記をつけている暇もろくろくないんだから。」

「あたしだつてこの通り急がしいわよ。あなたはあたしを見ると、好きだ好きだと仰<sup>おっしゃ</sup>言<sup>ふ</sup>るし、イタリア人はイタリア人で、あたしを放してくれないし、また、何んでもいいわ。その日その日はなるだけ愉快に暮すのが一番だわ。」

「じゃ、今の所はイタリア人と競争かい。」と甲谷はいった。

「だつて、あたしはこれでも、容子さんと競争なのよ。あのイタ

リア人はあたしと容子さんとをいらいらばかりさせてるの。だから、あたし、今度はアメリカ人とばつかり踊つてやるの。」

「道理で旗色はどうも悪いよ。」

宮子は毛皮の中で首を縮めて笑い出した。

「そうよ、だつて、外国人はお客様だわ。あなたなんか、少しはあたしたちと共に謀して、外国人からお金をとらなきあ駄目じやないの。こんなあたしや秋蘭さんなんか、いくら追い廻したって、始まりやしないわ。」

哲学は到る所から生えていく。甲谷は日本人の色素のために、ここでも悲しまねばならぬのであつた。彼は今まで、過去に堆積された女から賞讃され続けて来た理由はこうである。

——まあ、あなたは外国人のようだわね。——

だが、宮子の前で外人らしさを外人と競争することは、甲谷にとつては不利であつた。彼はもう十日間も宮子の踊場へ通つて來た。だが、宮子の眼は、

「まあ、日本人は、後にしてよ。」といつもいう。

この支那の海港の踊子の虚榮心は、いくたりの外人が切符を自分にばかり集めるかを計算し合うことである。そうして、宮子はこの計算では、常にナンバー・ワンの折紙をつけられているのであつた。

甲谷は十日間の三分の一を、その自由なフランス語とドイツ語とで外人と張り合つた。後の三分の一の力を、金と饒舌に注ぎ込

んだ。しかし、この宮子の高ぶつた誇りの穴へ落ち込んだ日本人——甲谷が、宮子の誇りを無くするためには、彼はあまりに誇りすぎていたのである。甲谷はだんだん滅ほろんで行く自信のために、今はますます宮子に手を延ばさずにはおれなかつた。

微風に吹きつけられた。プラターンの花の群れは、菩提樹の幹へ突きあたつて廻っていた。その白い花々は三方から吹き寄せられると、芝生にひつかかりながら、小径の砂の上を華きや奢しゃな小猫のように転げていった。

「まあいやね、この先は真暗だわ。」と宮子は彼に寄りそつていつた。

「大丈夫だよ、行こう。」

甲谷は公園の芝生を突き切ると光りの届かぬ繁の方へ廻つて  
いった。宮子はその繁みの向うに何があるのかまで知つていた。

彼女はミシエルとそこで、池の傍で、過ぎた日曜のある日の晩、  
どうして二人が一時間の時間を忘れたかを覚えている。まあ、何  
んと男は同じ所を好むのであろう。彼女はそこで、甲谷が何をす  
るかをまで知つてゐるのだった。——甲谷は宮子の回想を案内す  
るかのように、水草の沈んだ池の傍まで歩いて來た。  
「もうこのさきは駄目だわ。ここらあたりで帰りましょよ。」  
と宮子はいった。

宮子はひとりで甲谷から放れると、ちらりと一叢の芽を出した  
灌木を眺めながら、門の方へ歩いていった。

甲谷は宮子の後姿を見詰めていた。彼は彼女の足を牽きつけている者が、宮子を繞つている遅しい外人の足の群れだと睨んでいる。だが、どうして日本人は、このようにも軽蔑されねばならぬのであろう。——甲谷は公園の門の前まで、自分の短い足を歎きつつ歩いて来た。しかし、彼はその門から前へ、公園の中へ、どうして支那人だけが這入ることを赦されてはいないのか考えるのはうるさいのだ。

枝を截り払われた菩提樹の若葉の下で、宮子は瓦斯燈<sup>ガスとう</sup>の光りに濡れながら甲谷の近づくのを待っていた。

「瓦斯燈のある所なら、あたし、誰とでも仲良く出来るのよ。」勝ち誇った華奢な宮子の微笑が、長く続いた青葉のトンネルの

下を潜くぐっていく。坦々砥のよう光つた道。薔薇の垣根。腹を映して辻すべる自動車。イルミネーションの牙城へと迫るアルハベット。甲谷はここまで来ると、再び彼がそのようにも負かされ続けた外国人たちの礼讓れりょうを、支那人ではないということを示さんしさんがためばかりにさえも、重おもんじなければならぬのだった。彼は宮子の手をとるといつた。

「これからカルトンまで歩いていこう。」

「あたし、パレス・ホテルへ行きたいの。」

今は甲谷は、池の傍でズボンの折目を乱さなかつたという巧みさを誇るかのように快活になつて來た。

「こうして手を組み出すと、まるで生活が明るくなるね。これや

全く不思議だよ。」

「そりや、あたしたちは踊子だからよ。」「しかし、君らはダンスをするのが目的なのか、それとも君らはまア——。」

「もう沢山。あたしたちが結婚すれば、堕落するのと同じなのよ。だから、もう結婚のお話だけはまつ平びらよ。それよりあなたなんか、秋蘭さんでも見てらっしゃればそれでいいじゃないの。」

「いや、僕らは君を追つかけては振り廻され、追つかけては振り廻されているのは、これやいつたい、どうしたもんだろうって考えてるのさ。」

宮子は突然、甲谷に見られていない片頬に、鱗うろこのような鮮明な

嘲笑を搖るがせた。

「そりや、なかなかむつかしいわ。あなたは社交ダンスの踊り方を御存知ないのよ。いつでもあたしたち、女は男のするままの姿勢になつて踊るべしつていわれてるんでしよう。だから、あたしのような踊子たちは、踊らないときだけでも自由に踊らなくちゃたまんないわよ。」

甲谷は矢繼早<sup>やつぎば</sup>やに刺されながらも、なお鈍感らしい重みを鄭重に続ける必要を感じるのであつた。何故なら、彼は、宮子に愛されることがよりも、今はこの珍らしい光芒を持った女性の急所が、どこにあるのか見届けたかつたからである。彼は一昨々夜、闇の中で黙々と彼に身を委ねたお杉のことを思い出した。あのお杉と

この宮子、そうして、あのお柳とあの支那婦人の芳秋蘭、——何な  
んと女の変化の種類も色とりどりなものではないか。甲谷はまだ  
参木に紹介しないこの宮子を、是非とも参木に——あの不可解な  
ドン・キホーテに紹介してみたくてならぬのであつた。

甲谷と宮子は、河岸のパレス・ホテルへ着くと、ロビーの椅子  
に向い合つた。大伽藍のように壮麗な側壁、天空を摸した高い天  
井、輝き渡つた床と円柱、アフガンの厚ぼつたい緋の絨じゅうたん  
。——誰も人影の見えない円柱と円柱との隙間の彼方で、押し黙つ

た外人が二人、端整な姿でダイスをしていた。筒から投げられる  
骰子ころの音が、森閑とした大理石の間に木魂を響かせつつころ  
ころと聞えて来ると、宮子はコンパクトを取り出していつた。

「あなた、ここへもう直<sup>じ</sup>き、ドイツ人が逢いに来るのよ。そしたら、あなたはひとりで帰つてね。」

「なんだそれは、君の例の恋人か？」

「そう、まあ、恋人ね。御免なさい。ちよつと今夜はいたずらがしたくつて、あなたを<sup>おだ</sup>煽<sup>おと</sup>ててみたかつたの。もう直<sup>じ</sup>き来てよ。」

甲谷はひと息呼吸を吸い込んだ。すると、宮子は笑いながらまたいった。

「だつて、あたしは休日でしよう。休みの日には、せいぜい沢山、お客様を喜ばせておかないと、休日にはならないわよ。つまり、今日があたしの本当の働き日なの。世間の人とは反対よ。」

「ドイツ人つて、あのいつものファイルゼルとかいう 甲虫<sup>かぶとむし</sup>か。」

と甲谷はいった。

「ええ、そう、だけどあれでもアルゲマイネ・ゲゼルシャフトの  
錚々たる社員だわ。あの人とゼネラル・エレクトリックのクリ

ーバーって社員とは、それやいつも熱心よ。あたし、今夜はフィ  
ルゼルと逢つたら、すぐクリーバーとも逢わなくちゃならないの

。」

「じゃ、勿論もちろん、まだ帰りは分らんね。」

「それは駄目よ。まだまだそれからが大変なんだから。パーマス  
シップのルースとも一寸逢わなきアならないし、マリンのバース  
ウイックとも逢わなきあならないし。ほんとに、あたし、今夜は  
やれやれというどこなの。」

甲谷は時計を見上げると立ち上った。

「それじや、僕はこれから、サラセンへいって、のんきにひと晩踊つてやろう。さようなら。」

「さようなら。後であたしも、誰かをつれて一緒にいくわ。」

## 一一

苦力たちは寝静まつた街の鋪道で眠つていた。<sup>クリー</sup>塊<sup>かたま</sup>つた彼らの肩の隙間では、檻樓<sup>ぼろ</sup>だけが風に靡いた植物のように動いていた。扉を立てた剥げ落ちた朱色の門の下で、眼の悪い犬が眠つた乞食の袋を<sup>おさ</sup>压えていた。ときどき鬱<sup>うつぜん</sup>然と押し重なつた建物の中から、

鋭く警官の銃身だけが浮きながら光つて來た。参木はロシア人の娘を連れて山口の家まで帰らねばならなかつた。彼は三日前にお杉を街でまいてから、今まで山口の家に泊つていたのである。彼はその間、山口の幾人かの女の中のこのオルガの淋しさを慰める命令を受けたのだ。

「この女は淋しがりやで、正直で、音楽が帝政時代みたいに好きなんだ。君が遊んでいるならしばらくよろしく頼んだよ。いや、何、その間は君に自由の権利を与えるよ。」

参木は明らかに山口から嘲弄されたのを知つていた。だが、彼は山口からアジヤ主義の講義で虐められるよりはこのオルガと音楽の話をしている方が愉快であつた。

「よし、それならしばらく借りよう。その間に、君は僕の仕事を見つけておいてくれ給え。」

参木は三日間、ほとんどロシアの知事の生活と、チエホフとチャイコフスキードボルシェビーキと日本と、カスピ海の腸詰の話とで暮して來た。しかし、ふと彼は家に残して來たお杉の処置を考えると、その場所とは不似合な憂鬱に落ち込んだ。

オルガは今も参木の顔が黙々として暗くなると、せき立てるようにならぬ足を早めて英語でいった。

「駄目、駄目、あなたはどんな嬉しそうな時でも、悲しそうだわ。  
」

「いや、あなたは、日本人の表情をまだよく知つちやいないんで

す。」

「嘘よ、あたしはちゃんと知つてゐる。山口はあなたのことをいつていたわ。」

「山口なんか、何にも知りやしませんよ。」

「嘘だわ。あたし、山口からいいつかつてゐるの。あなたは死にたい死にたいといつてる人なんだそうですから、なるたけ楽しそうにするようについて。」

「馬鹿な、僕はね、オルガさん、あなたは淋しがりやだから、よろしく頼むつて山口からいわれてるんですよ。」

「まあ、そう。山口も上手いのね。でも、あたしなんか、そりや初めは淋しかつたわ。だけど、もうこうなればね。」

「それや、そうですよ。」

眠つた街の底でオルガの顔の纖細な波だけが、波紋のように鮮やかに動いていた。アカシヤの葉に包まれた瓦斯燈には守宮<sup>やもり</sup>が両手を括げて止つていた。火の消えたアーチの門。油に濡れた油屋の鉄格子。トンネルのような露路の中には、家ごとの取手の環が静かに一列に並んでいた。オルガは溜息<sup>ためいき</sup>をつくと鋪道の石線を見詰めながら寄つて來た。

「ね、参木さん、隠しちゃいやよ、あの山口ね、あの山口には五人の女があるんでしよう。」

恐らく五人どころではないだろう。だが、参木はオルガを慰めなければならぬ命令を山口から受けているのだ。

「僕は山口のことについては、実は何も知らないし、山口だつて僕のことは、何も知りやしないのです。しかし、それや何かの間違이じやありませんか。」

「あなたは、あたしのいうことがお分りにならないんだわ。山口が女を幾人持とうと、あたしには何んでもないの。ただね、あたし、あなたがもう少しあたしの傍にいて下されば、と思うのよ。」

参木はもう三日間、ブローケンな英語の整理に疲れていた。それに、このオルガの溜息に滴しだたらす会話は初めてだつた。

「オルガさんは、いつかバザロフのお話をなすつたですね。あのツルゲネーフのバザロフの。」

「ええ、ええ、あの唯物主義者はボルシェビーキの前身ですわ。」

「ところが、あれが僕の現在なのですよ。」

「まあ、あなたは、それじや、あたしたちがどんなに困られたかということも、御存知ないのね。」

「いや、それは知っていますとも。しかし、バザロフはボルシエビーキじやありませんよ。あれは唯物主義者でもない虚無主義者でもない、物理主義者なんです。これはロシア人にはよく分らないと思うんですが、一番よく知っているのは支那人です。支那人は唯物主義者の一步進んだ物理主義者の集団です。」

「わたしには、あなたの仰おつしや言ることが、分らない。」とオルガはいった。

——つまり、愛の言葉を聞きかけたら、わけの分らぬことをい

うが良いという主義なんだ、と参木は思うと淋しくなつた。オルガは一層しおれて歩き出した。街角の瓦斯燈の下では、青ざめた鼈石の水溜りに、鉄の梯子が映つっていた。複合した暗い建物の下で、一軒の豆腐屋が戸を開けて起きていた。その屋根の下では、重々しく動く石臼の間から、この夜中に眞白な粘液だけがひとりじくじくと鮮やかに流れていた。

「あーあ、あたし、モスコウへ帰りたい。」とオルガはいつた。

### 一三

参木は山口の家へ着くと、自分の部屋に当てられた一室へ這入

つた。彼はひとりになつて寝台の上へ仰向きに倒れると、急に東京の競子のことを思い出した。もし死にかかっている競子の良人おつとが死んでいる頃だとすれば、電報は彼女の兄の甲谷の所へ来ているにちがいなかつた。が、その甲谷とはもう三日も逢わぬのだ。しかし、甲谷に逢うために家へ帰れば、家にはお杉が待ち伏せているに決つていた。

——この心の中に去來する幻影は、これはいつたい何なんだろう。  
お杉、競子、お柳、オルガ。——ただ競子をひそかに秘めた愛人であつたと思つていたばかりのために、絶えず押し寄せて来る女の群れを跳ねのけて進んでいるドン・キホーテ。——然かも、競子の良人が死んだとしても、彼は競子と結婚出来るかどうかさえ

分らないのだつた。いや、それより、彼は今は自分の職業さえ失つてゐるのである。

そのとき、今別れたはずのオルガが突然這入つて来て彼にいつた。

「まあ、山口はいないのよ。あなた、捜して頂戴、あたし、これからひとり帰らなきやならないんだわ。あああ、いやだ、あたし、モスコウへ帰りたい。」

オルガはいきなり参木の寝てゐる寝台の上へ倒れると、泣き始めた。参木は、これが喜ぶべき結果になるか悲しむべき結果になるかを考えながら、オルガの背中を撫でてみた。すると、オルガは首を振り立てて怒つたように彼にいつた。

「あなた、そこを降りて頂戴、あたし、今夜はひとりで寝るんです。」

参木は黙つて寝台から降りると靴を履いた。

「じゃ、お休みなさい。さようなら。」

彼が会釈をして部屋から出ようとすると、オルガは不意に彼の胸に飛びついて来た。

「いや、いや、出ちゃ——。」

「だつて、ここにこうして一晩立つてるのは、困りますよ。」

「ボルシェビーキ、悪魔、あなたたちはあたしをこんなにしたんですね。」

参木は弓なりに反りながら、オルガの膨れた乳房を支えていつ

た。

「僕はボルシェビーキじやありませんよ。」

「そうよ。あなたはボルシェビーキです。そうでなくちや、あなたのように冷淡な人なんか、いやしません。」

「だいたい、僕がここにこうして寝ているとき、僕を叩き起して、代りに自分がベッドを奪う<sup>と</sup>いうのは、ボルシェビーキだつてしませんよ。」

オルガは唇を噛み絞めると、黙つて泣きながら、参木の腕をぐいぐい引いた。参木はオルガの力に抵抗しながらも、足が辺つて寝台の方へ引き摺<sup>ず</sup>られた。彼は片手を寝台につきながら、海老<sup>えび</sup>のようく曲つた。

「オルガさん、そんなことをしちゃ、この服が破れるじゃないですか。」

「悪魔。」

「僕は失職してるんです。服が破れたら、明日から、——」

いいつつ参木はおかしくなつて、げらげらと笑い出した。オルガはうむうむ<sup>うな</sup>唸りながら、参木の首を片腕で締めつけつつ、彼を引き倒そうとして赤くなつた。参木は首がだんだんと痛くなつた。彼はオルガの咽喉<sup>のど</sup>を押しつけた。

「オルガさん、放しなさい。殴りますよ。」

しかし、オルガはなおも歯を食い縛つたまま彼の首を締めつけた。彼は呼吸が苦しくなると、咳が出た。

「オルガ、オルガ、——」

参木はオルガを<sup>かつ</sup>担いでベッドの上へ投げつけた。オルガの足は空を廻つて一転すると、慄えた寝台の上で弾動した。が、すぐ彼女は起き上ると、枕を参木に投げつけた。

「馬鹿、馬鹿。」

彼女は真青になつたまま、再び猛然と彼の頭の上へ飛びかかつた。彼は風の中でオルガの身体を受けとめると、背後へよろめいて、壁の鏡面へ手をついた。オルガは彼の肩口へ食いつくと、首を振つた。参木は押しつける筋肉のうねりと、鏡面にしぼり出されて長くなつた。やがて、彼と彼女との肉体は、狂氣と生との一直線の上で、うなりながら混雜した。と、二人は、今は誰が誰だか

分らぬ棒のよう放心したままばつたりと横に倒れた。

## 一四

参木はしばらくオルガのなすがままにまかせていた。オルガは彼の額の前で澆<sup>はづらつ</sup>刺<sup>ささや</sup>と伸縮しながら囁いた。

「まあ、あなたは可愛らしい。参木、お休みなさいな。ここは、

ほら、こんな床の上じやないの。風邪をひいてよ、さアさア。」

オルガは参木の頭を持ち上げようとした。が、彼女はまたそのまま坐り込むといった。

「参木、あなたはあたしを忘れちやいやよ。あなたはあたしを、

日本へ連れてつて下さるでしょう。あたし、日本が見たいの。ね、参木、何んとか仰有しやいよ。」

オルガの唇が参木の顔の全面を、刷毛はけのように這い廻つた。すると、彼女は立ち上つてベッドの皺をぽんぽんと叩いた。

「まあ参木は強いわね。あたしをここへ投げつけたのよ。あたしあのとき、眼が廻つてくるくるしたわよ。だけど、あたし、もういいの。」

オルガはベッドの中へ飛び込むと、ひとり毛布を冠つたまま膝でダンスをし始めた。しかし、参木は横たわつたまま起きて来なかつた。オルガは毛布の中から頭を上げると覗いてみた。

「参木、どうしたの。」

参木はようやく起き上ると、オルガから顔をそむけて部屋を出ようとした。

「参木、どこ行くの。」

彼は黙つてどしんと肩でドアを開けかけた。すると、オルガは毛布を引き摺つたまま彼の傍へ駆けて来た。

「いやだわ。参木、出るならあたしも連れてつて。」

参木はオルガの顔を、まるで投げ出された足でも見るよう眺めていた。が、彼はまたそのまま出ようとした。

「いやよ、いやよ。あたし、ひとりなら死んでしまう。」

「うるさい。」

参木はオルガを突き飛ばした。オルガはぶるぶる慄えると、わ

ツと声を上げて泣き出した。参木は素早くドアを開けて部屋の外へ飛び出した。オルガは屏風のように傾いて彼の後から駆けて来た。彼女は階段の降り口の上で参木の片腕をつかまえた。

「参木、あなたはあたしから逃げるんだわ。いやだ、いやだ。」

ばたばた足を踏みながら、彼女は彼の手を濡れた顔へ押しつけた。参木はしばらく黙つて立つていた。が、彼は握られた手を振り切ると、また階段を降り始めた。オルガは彼のシャツをひとつ掴んだ。彼女の身体は撓みながら逆さまになつた。参木は欄干を掴んだまままた降りた。

「参木、待つて、待つて。」

引き摺られるオルガのそ<sup>そ</sup>り返つた足先は、階段を一つずつ叩い

ていつた。シャツを剥がれた参木の腹の中へ、臍へそが苦しげに動搖した。すると、参木は一気に階段を駆け下つた。彼は惰力で前面の壁へ突きあたつた。オルガは階段の下で廻転すると、参木の足元へぶつ倒れた。参木はオルガを起そうとして身をかがめた。が、ふと急に、彼は空を見上げたときのような淋しさを感じて來た。彼は呻いているオルガを跨またいで突き立つたまま、何んの表情も動かさずに彼女の頭髪を眺めていた。

## 一五

夜のその通りの先端には河があつた。波立たぬ水は朦もうろく朧ろうとし

て霞んでいた。支那船ジャヤンクの真黒な帆が、建物の壁の間を、忍び寄る賊のようにじっくりと流れていった。お杉は時々耳もとで蝙蝠こうもりの羽音を感じた。仰げば高層な建物の冷たさが襲つて來た。—— 彼女は三日間参木の帰るのを待つていた。が、帰らないのは参木だけではなかつた。甲谷も一夜も帰らなかつた。ただその間、彼女は湯を沸かしては水にし、部屋を掃除し続けては泥溝どろどぶを眺めて、ようやく二人から嫌われたのだと氣付いたときには、腹立たしさよりも、ぼんやりした。お杉は再びもう参木には逢うまいと決心して、この河の岸まで来たのである。

泥の中から起重機の群れが、鋸びついた歯をむき出したまま休んでいた。積み上げられた木材。泥の中へ崩れ込んだ石垣。揚げ

荷からこぼれた菜つ葉の山。舷側の爆けた腐つた小舟には、白い菌が皮膚のように生えていた。その竜骨に溜つた動かぬ泡の中から、赤子の死体が片足を上げて浮いていた。そうして、月はまるで塵埃ごみの中で育つた月のように、生色を無くしながらいたる所に転げていた。

### Pouco tempo somente

### De Pressa de cima abaixo

ポルトガルの水兵が歪んだ帽子の下で、古里の歌を唄つて通つて行く。お杉は月を見ると、月のようになつた。泥溝を見ると、泥溝のようになつた。——彼女は、今も朝からの続きを、まだ茫然と過ごしているのだ。が、ふと、お杉は友人の辰江のことを思

い出した。

——あの辰江のように、部屋を持つて、客さえ取れば。——  
 そうだ。辰江のよう客さえ取れば、と彼女は思うと、急に橋の上で、生き生きと空腹を感じて来た。彼女は朝から食べた食物を数えてみた。

——家鴨の足と、蓮の実と、豚の油と、筍と。——

だが、お杉の頭には、辰江の絹の靴下が、珍稀な歓楽を詰めた袋のようにならなかった。唇の紅の色が、特別な男の舌のように、秘密を持つて膨れて見えた。と、彼女は、またいつものように、自分を奪つたものは参木であろうか、甲谷であろうかと迷い出した。彼女は、あの夜の出来事が——自分を奪つたあの男は、二人

の中のどちらであろうかと思い煩う念力のために、きりきり廻つた無謀な風のように中心を無くし出した。そうしてお杉は、今は一切のことが分らぬままに、女の中の最後の生活へと早道をとり始めたのだ。

胡弓の音が遠く泥の中から聞えて來た。お杉は橋を渡ると、見覚えた春婦のよう通る男の顔を眺めてみた。彼女の前の店屋では、べたべた濡れた臓物の中で、口を開いた支那人が眠つていた。起重機の切れた鎖の下で、花を刺した前髪の少女が、ランプのホヤを売つていた。河岸に積み上つた車の腐つた輪の中から、弁べんぱ<sup>クリー</sup>の苦力が現われると、お杉の傍へ寄つて来て笑い出した。お杉は背を縮めて歩いていった。すると、男は彼女の後からついて

来た。お杉は慄えながら後ろを振り返つて男にいった。

「ちがう、ちがう。」

彼女は周章あわてて露路の中へ駆け込むと、せかせかと、幾つもの角を曲つていった。その露路の奥では、鋭く割れたガラスの穴の中で、裸体の背中が膨れていた。お杉は立ち停ると、どちらへ出るのか迷い出した。彼女の頭の上には、鰐えらのように下つた洗濯物とがが、まだべとべと壁を濡らして並んでいた。柱にもたれた女が、突角しやがつた肩をぴくつかせて咳きをしていた。その後の床の上では、眼病の裸体の男女が、一本の赤い蠟燭を取り巻いたまま蹲しゃがんでいた。ふとお杉は上を向くと、四方から迫つている壁の窓々から、黙々とした顔が、一つずつ覗き出した。お杉は慄えた棒のようにな、

敷石に躡きながら、壁の中から壁の中へ迷い込んだ。灯がだんだんとなくなり出した。と、闇の中で、今まで積つた塵埃だと思つていた檻樓の山が、急に壁の隅々から、無数にもぞもぞと動き出した。お杉は壁にぴつたりひつつくと、足が動かなかつた。と、たちまち、その黒い檻樓の群れは、狭い壁と壁との間いつぱいに詰まりながら、鈍重な波のように襲つて來た。お杉は一瞬、眼前に並んで点々としている人間の鼻の穴を見た。と、彼女はその場へ昏倒すると、塊つた檻樓の背中の波の中に吸い込まれて見えなくなつた。

塵埃じんあいを浴びて露店の群れは賑つていた。笊ざるに盛り上つた茹ゆでたま卵ご。屋台に崩れている鳥の首、腐つた豆腐や唐辛子の間の猿廻し。豚の油は絶えず人の足音に慄えていた。口を開けた古靴の群れの中に転げたマンゴ、光つた石炭、潰れた卵、膨れた魚の気胞の中を、纏足てんそくの婦人がうろうろと廻つていた。

この雑然とした街角の奥に婆羅門ばらもんの寺院が聳えている。しかし、祭尊降誕祭のこの日の道路は、支那兵の劔銃に遮断されて印度人インドは通れなかつた。それが明らかに英國官憲の差金であらうことを見察している印度人たちは、街の一角を埋めたまま、輝やく劔銃を越して寺院の尖塔にらを睨んで立つていた。

間もなくこの露骨に印度人の集会を嫌う英國風の街の中を、草色の英國の駐屯兵が隊部にロシアの白衛兵を加えながら、樂隊を先驅にして進んで来た。その後から、真赤な装甲自動車が機関銃の銃口を触角のように廻しながら、黒々と押し黙つた印度人の団塊の前を通つていつた。

山口は印度の志士のアムリから電話を受けて、参木と一緒に來たのである。だが、来て見れば機関銃の暗い筒口の前で、印度人たちには眼を光らせたまま沈黙しているだけだった。しかし、それでも、アジヤ主義者の山口は、英國の官憲と同様に印度人を遮断している支那の軍隊に腹立しさを感じて來た。が、ふと、彼はアムリが彼を呼び出した原因を、同時に感じて笑い出した。

——この腹立たしさを俺に呼び起すためだとすると、成る程、アムリの奴め——

しかし、瞬間、彼は支那の軍隊の遮断している道路が、その街角から彼らの方向へ向つては、支那の管轄区域だということに気がついた。

——これじや、アムリの奴、日本人に考えろといいやがつんだ。馬鹿にするな。馬鹿に。——

しかし、次の瞬間、彼は支那兵と対峙している印度人の集団を、英國の官憲として使われている印度人の警官が圧迫しているのを発見した。

こうなると、山口はアムリの意志がどこにあつたのか分らなく

なつて來た。——この馬鹿な印度人の醜態を見るが良いといったのか、支那の国内で暴れている英國兵を、支持している支那の兵士のその顔を見よといつたのか。——

しかし、山口はアムリと同様、このアジヤを聯結させて白禍に備える活動分子の一人として、眼前の支那と印度の無力な友の顔を見てはいるが、笑うことは出来なかつた。彼は街路で、この民族の衝突し合つてゐる事件とは無関心に、笊に盛り上つてゐる茹卵を見つけると、支那人の顔を思い出した。足元の屋台の上に、斬きられた鳥の首ばかりが黒々と積つて眼を閉じてゐるのを見ると、印度人を思い出した。彼は彼の横に、アムリがいるかのように呟いた。

「数の多いということは、ただ弾丸除けになるだけだ。」

「そうだ。」と参木は、不意に、自分にいわれたように返事をした。

事実、山口はアムリに逢うと、アムリの誇る「印度人の数の多數」を、いつもこの言葉で粉碎するのが癖であつた。すると、アムリは山口の誇る日本の軍国主義を皮肉つた。

——しかし日本の軍国主義こそ、東洋の白禍を救い上げている唯一の武器ではないか。その他に何がある。支那を見よ、印度を見よ、シャムを見よ、ペルシヤを見よ。日本の軍国主義を認めるということは、これは東洋の公理である。——

山口は鋪道の上を歩きながら、ひとり過ぎた日のアジヤ主義者

の会合を思い出して興奮した。その日は支那の李英朴りえいほくが日支協約の「二十一ヶ条」を楯にとつて悪罵した。山口はそれに答えて直ちにいった。

「支那も印度も日本の軍国主義を認めてこそ、アジアの聯結が可能になる。しかし然も僅かに日本の南満租借権が九十九年に延長されたということを不平として、われわれは東洋を滅ぼさねばならぬのか。われわれの東洋は、日本が南満を九十九年間租借したという事実のために、九十九年間の生命を保証されたということに気付かねばならぬのだ。」

すると、アムリは皮肉にいった。

「日本が南満を九十九年間租借したということによつて、われわ

れの同志、山口と李英朴がかくのごとく相い争うという事実は、日本が少くとも、九十九年間東洋の同志をかく論議せしめるであろうということを、予想せしめて充分である。しかし、印度はこの日支の係争如何に係らず独立する。もしその独立の日が来たならば、印度は支那から、いかなる海外の勢力をも駆逐せずにはおかぬであろう。印度のために、東洋の平和のために。」

だが、印度の独立の日までに、支那を滅ぼすものは何んであるかと山口は考えた。

——それは明らかに日本の軍国主義でもない。英國の資本主義でもない。それはロシアのマルキシズムか支那自身の軍国か、いや寧ろ印度の阿片かペルシャの阿片か、そのどちらかにちがいな

いのだ。

この東洋を憂いつつ緊張している山口の傍では、参木は前からどういえば昨夜のオルガとの交渉を、彼に理解さすことが出来るだらうかと考えていたのである。彼は午後の二時から甲谷と逢わねばならぬ約束を、電話でしたのだ。甲谷と逢えば、競子のこととお杉のこととを聞かねばならぬ。だが、それより前に、いつたいオルガをどう処置したら良いであろう。――

彼は自分がどれほどオルガに抵抗したかを考えた。彼はオルガがどれほど自分に肉迫したかを考えた。しかし、その結果が、このようにオルガの処置について苦しまねばならぬとは。――

「君、もう今日から、僕は君の所へは帰らないよ。」と参木はい

つた。

「何ぜだ、オルガが恐くなつたのか。」

不意に急所へ殺到して来た山口の質問を、参木は受けとめることが出来なかつた。

「うむ、あれは恐い。」

「ところが、僕はあれから君を逃がさないようにつていいつかつてあるんだぜ。逃げちや困るよ、逃げちや。」

「いや、もう御免こうむるよ。」

「困つたね、そりや印度のことよりこつちの方が難かしくなるんじやないか。」

参木は突然げらげら笑い出した山口の顔を見ていると、彼は腹

の中に隠れていた伏線を感じて恐くなつた。

「今日はこれから僕を逃がしてくれ。二時に甲谷と逢わねばならんのだ。」

「君は馬鹿だよ。あの面白い女から逃げ出すなんて、何んて阿呆だ。」

参木は山口の嘲笑を受けながら、パーテル・カフェーの方へ急いでいった。ただ競子の良人が死んだかどうかを知りたいためにである。

甲谷はその日の中に三つの材木会社と契約を結んで來た。彼は軽快な祝報を先ずシンガポールの本社へ打つた。

「余の活躍かくのことし。フイリッピン材をして蒼白ならしめること、期して待て。」

彼は参木から支配会社へかかつていた電話を思い出すと、速力の早そうな黄包車ワングオウツ<sup>たちま</sup>を選んでパテルへ走らせた。彼は車の上で快活であつた。この順調さで押していくと、この地の支店長になれるることは忽ちだつた。すれば最も安全な方法で金塊相場に手を出そう。次には綿糸へ、次には外国為替の仲買へ、次にはボンベイサッタの綿花市場へ、次にはリバプールの大市場へ、そうして最後に——彼はとにかく何よりも、今は宮子を外国人たちに奪わ

れて いる と い う こ と が、 鬱 憤 の 種 で あつた。彼の空想の 中 で 暴れ る 勇 ま し い 野 心 は、 宮 子 を 奪 つ て いる 外 人 た ち の 生 活 力 の 中 心 を、 突 撃 し て か か る こ と に 集 中 さ れ た。

彼は、外人たちの経済力の源泉となりつつある支那の土貨こうらんに対 し て、彼らの向ける鋭い垂直トラスト尖鋒を、あくまで攪乱し な く あ ま ぬ と 考 え た。

——そ に は、先 ず、フ ィ リ ツ ピン材の馬を 射 よ、馬を。——

この燃え上つて来た彼の妄想の横では、桟橋が 黒い歯のよ う に 並んでいた。のろく揚げ荷の移動して いる 彼方では、金具を光ら せたモーターボートが縦横に馳けていた。波と湯気とを嫌らつて 逃げる「サンパン※」。繁殖したマスト。城壁のよ う に 続いた船舶。河水

の色の変り目の上で舞うぼろ帆。甲谷の車の速力へ、今は一切の風物が生彩を放つて迫つて来た。

フイリッピン材何物ぞ。おうりりょくこう鴨緑江材何者ぞ。ウラジオ浦塩であろうと吉林であろうと、何するものぞ。——

こう思つてパーテルへ這入ると、休んだ煽風器の羽根の下で、これはまたあまりに長閑のどかに、参木はミルクに溶ける砂糖の音を聞いていた。甲谷は入口から手を上げて進んでいった。

「どうも一度も家へ帰らないから、少々きまりが悪くなつてね。」「それや、僕もだ。まだあれから一度も家へは帰らないよ。」

「それじや、君もか。」

二人は同時に、残されたお杉のことを考えた。が、甲谷は浮き

上つて来る喜びに落ちつくことが出来なかつた。

「おい君、今日はこれで三つの会社を落して来たんだ。まあ、ざつとこれで三万円。」

「もう喜ばすような話はやめてくれ。僕は君と別れた日から首になつた。」

「首か。」

「うむ、少々、痛い所を突いてみた。」

「だから、君は馬鹿だというんだ。馬鹿な——。」

重い時計の振り子の下で、帝政ロシアの幹部派たちがいつもの憂鬱な顔を並べて密談に耽つっていた。巻かれたナフキンの静かな群れ。暖炉の沈んだ大理石。厚いテーブルの彫刻に散らかつた干

菓子の粉。秘密な波を垂れ下げたカーテンの暗緑色。——ふと甲谷はこの重厚なロシアの帝政派の巣窟、パテルは、今は自分の快活さに不似合なことに気がついた。眼につく一切のものが、過ぎた口ココの優雅さのように低声で、放埒<sup>ほうらつ</sup>に巻き上った絨氈の端にまで、不幸な氣品がこぼれている。

「おい君、ここは出たつていいんだろう。」

「うむ、しかし、僕は今日はここは落ちついて好きなんだ。首を切られたときはこういう所が一番だよ。」

「まるでここは君みたいな所だね。首を切られたものの寄り合いでさ。」

「そう急に馬鹿扱いにするなよ。僕はこれでも貴様の懐を狙つて

いるんだぞ。」

「いや、これはこれは。これじゃ、どつちが帝政派か分らんが。  
ひとつ、あそこのロシア人に聞いてやろう。」

ひどく愉快そうに笑っている甲谷の大口を見ていると、参木は  
もうこの日の甲谷を信用することが出来なくなつた。甲谷はいつ  
た。

「さて、ひとつ、という所だが、どうだい、今日は僕のいうま  
になつてくれるのか。」

「君のお附きは愉快じやないね。君の金を皆渡せよ。」

「ところが、そこに僕の頼みがあるのさ。この眼の色を見てくれ  
たつて分るだろう。」

「そんなら、こつちの眼の色だつて分るだろう。首を切られてお附きになるなら、首なんか切られなくたつてすんだんだ。」

「頑固な奴だね。支那の美德は金に服従する所にあるんじやないか。まだ君は精魂が抜けぬから馬鹿なんだ。さて、馬鹿な奴は馬鹿にして、と、ボーアイ。」

ボーアイが来ると、甲谷は立ち上つてまたいつた。

「ね、参木、今日はひとつ、二人で馬鹿の限りを尽そうじやないか。まだまだ人生には、面白いことがいくらだつてあるんだぜ。それに、何んだい君は、顔をしか聾めて、首を切られて、今頃からドン・キホーテの真似をしてさ。阿呆だよ。」

「いや、僕は今日は、君の兄貴の家へ行くんだよ。僕はいくら君

から馬鹿にされたつて、君の兄貴に仕事を探して貰わなくちゃならんのだからね。」

参木は外へ出ると、甲谷には介意<sup>かまわ</sup>ず、彼の兄の高重の方へ歩き出した。甲谷は彼の後からいい続けた。

「おい、そつちへ行かずにこつちへ来いよ。今夜はそつと芳秋蘭を見せてやろう。芳秋蘭を——。」

## 一八

「競子もどうやら、いよいよ亭主が危くなつて來たらしい。亭主が死ねば帰るといつて來ているが、あいつも日本よりは支那の方

が好きだと見えるよ。しかし、この俺だつてこの頃は危いからね。今所、競子の亭主が先きか、俺が先きかという所さ。おつと、細君が聞いてやしないかい。こいつに聞かれちゃ、こりや一番危いぞ。」と高重は甲谷と参木を見ていった。

「どうしてだ。」甲谷は意外な顔つきで兄を見た。

「いや、職工の中へ、ロシアの手が這入り出したんだ。俺は職工係りだから、一番危い所にいるわけだ。いつ何時なんどき機械の間から、ぽんとやられるかもしれないさ。もうそろそろ、冗談事じやないんだよ。」高重は唇の片端を舐ななめながら弟の甲谷の服装をじろじろ眺めた。

「じゃ、もう争議が始つたのか。」

「いや、争議の前だ。だから今がなかなか危いのさ。あの浜中總工ひとご会が曲者だよ。」

「それや危いね、他人事ながら。」

「他人事ながら？」と高重はいつて弟の方に眼を据えた。

「うむ、俺は今日は、三万円の契約をすまして來たんだ。この調子だと、ここ半年の間に支店長は受け合いだぞ。」

「それや、他人事ながら羨しいが、兄貴は職工係りで苦い汁ばかりを吸つてるし、弟は美味うまい汁ばかり吸つてるなんて、どつかの教科書にあつたじやないか。もし俺が支那人だつたら、やるね、この職工係りに突きかかつて、それから、お前のような奴を吹き飛ばして。」高重は声高く笑つた。

「あ、そうそう、二、三日前に芳秋蘭という女をサラセンで見かけたが、何んでも山口は兄貴がその女を知つてるといつてたよ、知つてゐるのかい。芳秋蘭？ 全く素晴らしい美人だが。」と甲谷はいった。

「うむ、それは知つてる。俺の下で使つてゐるそりや女工だ。」「女工だつて？」

と甲谷は驚いたように訊き返した。

「まさか女工じやないだらう。それや、何かの間違いだよ。」「ところが、芳秋蘭は変名でこつそり俺の下で働いてゐるんだ。来ればいつだつて見せてやろう。俺はいい出すとうるさいから、黙つて知らない顔をしてやつているんだが、あれは共産党でもな

かなか勢力のある女だ、あれは恐いよ。争議が起ればだい一番に、あの女が俺を殺すかも知れたもんじやないから、俺もなかなか骨が折れるさ。」と高重はいつて顎を撫でた。

「殺されちや、そりや兄弟争議にもならないね。」

甲谷の混ぜかえすのに、高重は落ちつき払つて微笑した。

「全くだ。職工の顔は立ててやらねばならぬし、重役の顔も立てねばならぬし、それに日本人の顔も立てていなけれやならず、お負けに兄貴としての顔も立てねばならぬとしたら、どうもこれじや、ぽんとやられる方が良いかもしけぬ。どうです。参木先生。」「いや、僕もそう思つてる所です。」と参木はいつた。

「そうそう、参木は首を切られてね、僕の財布を狙つてるところ

なんだ。」と甲谷はいつた。

「首か。」

「だから、さつきから、首を切られる奴は、昔から馬鹿な奴だと  
いつてた所さ。」

「首じや、それや、参木君ならずともやられたくなるはずだよ。」

「どうです、そのやられるような職はないもんでしょうか。どこ  
だつていいんですよ。さつきから、それをお願いしたくて來た  
んですが。」参木は頼み難いことも容易に掴んだ機会を喜ぶよう  
に、顔を赧あからめて高重を見た。

「それやある。いくらだつてあるにはあるが、今もいつた通り、  
その、危い所だぜ。そこでも良いのならいつでも来給え。一ぺん

は国家のために死ぬのも死甲斐もあるうさ。」

「もうこうなつちや、なるたけやられる所の方がいいんですよ。  
さばさばしますからな。」

全く話題に落ちがついたというように、声を合せて三人は笑い  
出した。

声が沈まると、参木は部屋の中を見廻した。——この部屋の中  
で、競子は育つた。この部屋の中で、彼女を愛した。そうして、  
自分はこの部屋の中で、幾たび彼女の結婚のために死を決したこ  
とだろう。それに、今はこの部屋の中で、競子の兄から自分が生  
き続けるための生活を与えられようとしているのだ。何んのため  
に？　ただ彼女の良人の死ぬことを待つために。——

参木はこの地上でこれほども自分に悲劇を与えた一点が、ただ索寞としたこの八畳の平凡な風景だと思うと、俄に平凡ということが、何よりも奇怪な風貌を持つた形のように思われ出した。しかも、まだこの上に、もし競子が帰つて来たとしたら、再びこの部屋はその奇怪な活動を黙々と続け出すのだ。

参木は窓から下を眺めてみた。駐屯している英國兵の天幕が、群がつた海月のくらげように、紐を垂らして並んでいた。組み合された銃器。積つた石炭。質素な寝台。天幕の波打つ峯と峯との間から突如として飛び上るフットボール。——参木はふとこの駐屯兵の生活が、本国へ帰れば失われてしまつていることを慨嘆したタイムスの記事を思い出した。そうして、この地の日本人は？ 彼ら

は医者と料理店とを除いては、ほとんどことごとく借財のために首を締められて動きのとれぬ群れだつた。参木はいった。

「もうこの支那で、何か希望らしい希望か理想らしい理想を持つとしたら、それは何も持たないということが、一番いいんじやないかとこの頃は思うんですが、あなたなんか、どういう御意見なんですか。」

「それやそうだ。ここじや理想とか希望とか、そんなものは持ちようが全くない。第一ここじや、そんなものは通用しない。通用するのは金と死ぬことだけだ。それもその金が**賄金**<sup>にせがね</sup>かどうかと、いぢいち人の面前で検べてからでなけれや、通用しないよ。」

「ところが、参木はその賄金をも試べないんだからね、全くこい

つ、使い道のない奴だよ。」と甲谷はいった。

「いや、それや参木君も僕と同様で、その賄金を使うのが好きなんだ。だいたい支那で金を溜める奴というものは、どつか片輪でなきあ溜たまらんね。そこは支那人の賢い所で、この地でとつた金は、残らずこの地へ落して行くような仕掛けがしてある。まだわれわれを、人間だと思つていてくれる所が、支那人の優しい所さ。」

「じゃ、支那人は人間じやない神様か。」と甲谷はいって仰山に笑い出した。

すると、高重は急に真面目な顔に立ち返つて甲谷を見た。

「うむ、もうあれは人間じやない人間の先生だ。支那人ほど嘘つきの名人も世界のどこにだつてなかろうが、しかし、嘘は支那人

にとつちや、嘘じやないんだ。あれは支那人の正義だよ。この正義の観念の転倒の仕方を知らなきあ、支那も分らなきあ、勿論人間の行く末だつて分りやしないよ。お前なんか、まだまだ子供さ。」

参木は高重の長い顔から溢れて来る思いがけない逆説に、久しく欠乏していた哲学の朗らかさを感じて來た。参木はいつた。

「それであなたなんか、職工係りをやつてらしつて、例えば職工たちの持ち出して来る要求を、これは正しいと思うような場合、困るようなことはありませんか。」

「いや、それもある。しかし、そこは僕らの階級の習慣から、自然に巧い笑顔が出て来るんだ。僕はにやにやつとしてやるんだが、

このにやにやが、支那人を征服する第一の武器なんだよ。これは虚無にまで通じていて、何んのことだか分らんからね。うつかりしている隙に、後ろから金を握らしてまたにやにやだ。それで落ちる。外交官なんて皆駄目さ。ところが、こんどの奴だけは、いくらにやにやしたつて落ちないんだ。こうなると、こつちが正義に打たれて、もう一度にやにやとは出来ないからね。どうも日本人という奴は、正義に脆くて軽佻もろだよ。君、支那人のように嘘つくことが正義になれば、もう此奴はいつまでたつたつて、滅びやしないよ。あらゆるものを正義の廻転椅子に乗せて廻すことが出来るんだ。いつたい、世界にこんな怪奇な国つてどこにある。」

高重は年長者の自由性のために、二人の前でだんだん興奮し始

めた。参木は高重の話そのものよりも、今は自分の年齢の若さが、これほども年長者を興奮させ得る材料になりつつあるという現象に、物珍らしい物理を感じて来た。

## 一九

海港からは銅貨が地方へ流出した。海港の銀貨が下り出した。ブローカーの馬車の群団は日英の銀行間を馳け廻った。金の相場が銅と銀との上で飛び上つた。と、参木のペンはポンドの換算に疲れ始めた。——彼は高重の紹介でこの東洋綿糸会社の取引部に坐ることが出来たのだ。彼の横ではポルトギーズのタイピストが、

マンチエスター市場からの報告文を打つてある。掲示板では、強風のために米棉相場が上り出した。リヴァプールの棉花市場が、ボンベイサツタ市場に支えられた。そして、カツチャーカンデーとテジーマンデーの小市場がサツタ市場を支えている。——参考木の取引部では、この印度の二個の棉花小市場の強弱を見詰めることは最大の任務であった。どこから綿の花を買うべきか。この原料の問題の解決は、その会社の最も生産量に影響を及ぼすのだ。そうして、誰もその存在を認めぬカツチャーカンデーとテジーマンデーの小市場は、突如として、ひそかな旋風のように市場の棉花相場を狂わすことが度々あつた。

参考木は、前からこの印度棉が支那の棉花を圧倒しつつある現象

を知つていた。だが、印度棉の勢力の擡頭は、東洋に於ける英國の擡頭と同様だつた。やがて、東洋の通貨の支配力は、完全に英國銀行の手に落ちるであろう。そうして、支那は、支那の中に於て富む者が何者であろうとも、彼らの貯蓄が守護されることによつて、その貯蓄を守護するものを守護しなければならぬのだ。そうして、彼らから絶えずもつとも強力に守護されつつあるものは、同様に英國の銀行だつた。

参木はこの綿の花の中から咲き出した巨大な英國の勢力を考へるたびごとに、母国の現状を心配した。彼の眼に映る母国は――母国は絶えず人口が激増した。生産力は、その原料の生産地が、各国同様、もはやほとんど支那以外にはないのであつた。そうし

て、経済力は？ その貧しい経済力は、支那へ流れ込んだまま、  
行衛不明になつていた。思想は？ 小舟の中で沸騰しながら、そ  
の小舟を顛覆てんぱくさせよ、と叫んでいる。

原料のない国が、いかに顛覆しようとも同じことだ、と参木は  
思つた。だが、いざれことごとくの国は次第に形を変えるであろ  
う。だが、英國の顛覆しない限り、顛覆したことごとくの国は不  
幸である。先ず何事も、印度が独立したその後だ。正義は印度よ  
り来るであろう。それまで、母国はあらゆる艱難を切り抜けて動  
搖を防がねばならぬ、と参木は思つた。

参木はそれまで、机の上で元貨を英貨のポンドに換算し続けな  
ければならぬのだ。

彼は正午になると煙草を吸いに広場へ出た。女工たちは工場の門から溢れて来た。彼女たちは円光のように身体の周囲に棉の粉を漂わせながら、屋台の前に重なり合つて餌飪うどんを食べた。こまか忽ち、細な綿の粉は動搖する小女たちの一群の上で、蚊柱のよう舞い上つた。肺尖力タルの咳が、湯気を立てた餌飪の鉢にかんかんと響いていた。急がしそうに彼女らは足踏みをしたり、舞い歩いたりしながら餌飪を吹いた。みみわ耳環の群れが、揺れつつ積つた塵埃ごみの中で伸縮した。

遠く続いた石炭の土手の中から、発電所のガラスが光っていた。その奥で廻転している機械の中では、支那人の團結の思想が、今や反抗を呼びながら、濛々と高重たちに迫つてゐるのだ。そこで

は高重たちは、その精悍な職工団の一団の前で、一枚の皮膚をもつて、なおにやにやと笑い続けて防がねばならぬのであろう。

参木は河の方を見た。河には、各国の軍艦が本国の意志を持つて、砲列を敷きながら、城砦のように連つて停っていた。

参木は思った。自分は何を為すべきか、と。やがて、競子は一疋の鱈ますのように、産卵のためにこの河を登つて来るにちがいない。だが、それがいつたい何んであろう。自分は日本を愛さねばならぬ。だが、それはいつたい、どうすれば良いのであろう。しかし、——先ず、何者よりも東洋の支配者を！ と参木は思った。

彼はだんだん、日光の中で、競子の良人の死ぬことを望んでいた自分自身が馬鹿馬鹿しくなつて來た。

## 一一〇

ホールの桜が最後のジャズで慄え出した。<sup>ふる</sup>振り廻されるトロンボーンとコルネット。楽器の中のマニラ人の黒い皮膚からむき出る歯。ホールを包んだグラスの中の酒の波。盆栽の森に降る塵埃。<sup>ほこり</sup>投げられるテープの暴風を身に巻いて踊る踊り子。腰と腰とが突き衝るたびごとに、甲谷は酔いが廻つていい始めた。

「いや、これは失礼、いや、これは失礼。」

階段の暗い口から、一団のアメリカの水兵が現れると、踊りながら踊りの中へ流れ込んだ。海の匂いを波立たせた踊場は、一層

激しく揺れ出した。叫び出したピッコロに合せて踏み鳴る足音。歓喜の歌。きりきり廻るスカートの鋭い端に斬られた疲れ腰。足と足と、肩と腰との旋律の上で、三色のスポットが明滅した。輝やく首環、仰向く唇、足の中へ辶る足。

宮子はテープの波を首と胴とで押し分けながら、ひとり部屋の隅で動かぬ参木の顔へ眼を流した。ドイツ人を抱くアメリカ人、ロシア人を抱くスペイン人、混血児と突き衝るあたポルトギーズ。椅子の足を蹴飛ばしているノルエー人。接吻の雨を降らして騒ぐイギリス人。シャムとフランスとイタリアとブルガリアとの酔つぱらい。そうして、ただ参木だけは、椅子の頭に肱をついたまま、このテープの網に伏せられた各国人の肉感を、ひきがえる蠶のように見詰め

ていた。

踊りがすむと人々はもたれ合つて場外へ雪崩れ出た。廻転ドアは踊子の消えるたびごとに廻つていつた。火は一つ一つ消え始めた。逆さまに片附けられる椅子の足が、テーブルの上で、俄に生き生きと並び始めた。そして、金庫の鍵が静に廻り終ると、いつの間にか影をひそめた楽器の後で、羽根を閉ざしたピアノが一台、黒々と沈んでいた。甲谷はようやくひとつ取り残された燈火の下で、尻もちをついたまま自分の影にいつていた。

「いや、これは失礼、いや、これはこれは。」

参木はこの急激に静つたホールの疲労に鋭い快感を感じて來た。彼は身動きも現さず、甲谷の鈍い醉体を眺めたまま、時計の音を

聞いていた。天井の隅で塵埃ほこりと煙の一群が、軽々と戯れては消えていった。甲谷は散らかつたテープの塊を抱きながら、首を振り振り、咳くように唄い出した。

Casi me he caído,

Traigame algo mas,

No es nada no toque,

歌にまだ飲みたいと、日頃自慢のスペニッシュ・ソングを歌う甲谷を見ていると、参木は立ち上らずにはいられなかつた。

彼は甲谷を肩にかかると、森閑としたホールの白いテープの波の中を、よろけながら歩き出した。と、ふとどこかのカーテンが揺らめくと、鏡の中から青い微光さやかなみが漣のように流れて來た。

「まあ、甲谷さん、駄目だわね。秋蘭さんが来たんじゃないの。  
しつかりなさいよ。」

帰り支度になつた宮子がドアーから二人の傍へよつて來た。彼女はぶらぶらしている甲谷の片腕を支えながら参木にいつた。

「これからあなた、どこまでお帰りになるつもり。」

「さア、まだどこにしようかと思つてるところなんです。」と参

木はいつた。

「じゃ、あたしん所へいらつしやいな。もうすぐ夜が明けるから、  
しばらくの辛棒しんぼうよ。」

「いいんですか、二人づれでいつたつて？」

「あたしはいいの。だけど、あなた、それじやあんまり重いわね

。」

「此奴このやつはいつでもこうですよ。」

宮子は頭を垂れた甲谷の首の上から、片眉を吊り上げた。

「介抱させられる番ばかりは、いやだわね。」

階段を降りると三人は外へ出た。墊石しきいしの上で銅貨を投げ合つていた車夫たちが参木の前へ馳けて來た。三つの黄包車ワンドボウツが走り出した。

## 一一

「なんだかあなた、遠慮深そうな恰好でいらっしゃるのね、ここ

はいいのよ。もつとのびのびとして頂戴。あたし、あなたの御不  
幸はもう何もかも知つてますのよ。」

甲谷を寝かせた隣室で、宮子は長椅子ジョーパンに疲れた身体を延ばしな  
がら参木にいった。

参木は樺色のスタンドの影を鼻の先に受けながら、何を彼女が  
ほのめかすのか、煙草の煙の中で眼を細めて聞いていた。

「ね、あなたはあたしがあなたのことを、何も知らないとでも思  
つてらつしたんでしょう。あたし、あなたがどんな方だかそれや  
長い間見たかったのよ。でも今夜初めてお逢いして、多分こんな  
方だろうと思つていたあたしの想像が、あたつたの。」

参木はこの女の頭の中で、前から幾分間か生活していたらしい

自分の姿を考えた。それは恐らく、どこかの多くの男たちの姿の中から、つぎはぎに引き摺り出された襆樓ぼろのようなものだつたにちがいない。――

「じゃ、甲谷は僕の悪口をよほどいつたと見えますね。」

「ええ、ええ、それや、毎日あなたのことを伺つたわ。それであたし、実は少々あなたのことを見下してたのよ。だつて、あなたは、あたしのような女を軽蔑ばかりしてらつしやる方でしよう。」

「いや、そう人は思うだけですよ。」と参木は疲れたように低くいった。

「そんなことは、何んのいいわけにもならないわ。あたしは男の方を一目見れば、その方がどんなことを考えたかつてすぐ分るの。

これだけはいつもあたしの自慢だから、もう駄目よ。あなたがどれほどの方を愛してらつしやるかつてことだつて、ちゃんとあたしには分つているんだから。」

「何をあなたはいい出すんです。」と参木はいつて宮子を見た。  
 「いえね、これは別のことなの。どうしてあたしこんなことをいつたんでしょう。さア、召上れ、これはサルサパリラつておかしなものよ。踊つた後はこれでなくちゃさつぱり駄目だわ。」

「甲谷はそんなことまでいつたんですか。」

「甲谷さんが何を仰おっしゃ言ろうといいじゃないの。あなたはあなたで、ここにこうしていて下されば、あたしそれで嬉しいのよ。あたし今夜は眠らないわよ。」

「あなたはよつほど疲れていらつしやるんでしょう。もう眠んで下さい。」

「あたし、もういつもならぐたぐたなの。だけど、こうしていると、今夜はあなたといいくらでもお話が出来そうなの。あたし今夜は饒舌しゃべつてよ、あなた眠くなつたら、甲谷さんの所で寝て頂戴。あたしここでこうして寝てしまうかも知れないから。」

「じゃ、僕はここにこうしてたつてちつとも疲れてやしませんからもうどうぞ。」と参木はいった。

「いいのよ。あたし、あなたを眠らせるくらいなら、この長椅子だつてお貸しするわ。まあそんなに汚なそうにひと様の部屋をじろじろ見なくつたつて、踊子の生活なんて、分つてるじやあります

せんか。いざれお察しの通り、ろくなことなんかしてないわよ。」

刺戟の強い白蘭花<sup>パーレーホー</sup>が宮子の指先きで廻されると、曙色<sup>あけぼの</sup>の花弁が酒の中に散らかつた。彼女は紫檀の円卓の上から花瓶を取ると、花の名前を読み上げながら朝ごとの花壳の真似<sup>まね</sup>をし始めた。

「ちーつーほう、でーでーほう、めいくいほう、ぱーれいほツほ、めーりいほーーまあ、今夜は暑いわね。あたし、こういう夜は、きつと白菓<sup>バッコ</sup>の夢を見るに定<sup>きま</sup>っているの。」

彼女は花弁で埋つたコップを参木に上げて飲みほすと、身体をそ反らして後の煙草を捜した。めくれ上つたローブの下で動く膝。空間を造つてうねうねうねる疲れた胴。怠惰な片手に引摺られて張つた乳。——参木はいつの間にかむしり取られた白蘭花<sup>パーレーホー</sup>の萼<sup>がく</sup>

だけを、酒の中で廻しているのだつた。

「あ、そうそう、あたしあなたにお見せしたいものがあつたんだわ。あたしには今五人の恋人が揃つてているのよ。フランス人と、ドイツ人と、イギリス人と、支那人と、アメリカ人の。まだその他にもないことはないんだけど、今は儉約して腕を持たせてやるだけにしてあるの。」

彼女は吸いかけた煙草を膝で挟むと、<sup>ひきだし</sup> 抽斗の中からアルバムを取り出した。

「ね、このフランス人はミシェルつていうのよ。それからこれは、アメリカ人なの。その他のも見て頂戴な。どれもこれも立派な男で蓮の実みたいに甘いのが特長よ。まあその日本の女を好きなこ

とつて、お話にならないわ。あれはきつと奥さんに虐められて來たからね。だからあたし、出来るだけそういう人には猫を冠つて大切にしてやつてますの。」

参木は宮子の恋人の顔を見ることよりも、今は彼女に近づく好奇のために、だんだん椅子を動かした。彼女は足を縮めると参木にいった。

「さア、もつとこちらへ来て頂戴。そこじや、あたしの恋人の顔が真黒に見えるじやないの。」

「いや、あんまりはつきり見え出しちや困るでしよう。」

「いいわよ、たまにはそういう立派な顔も見とくもんだわ。さア、こちらへいらっしゃって、あなたには、叱らなきあ駄目なのね

。」

参木は甲谷がこの手で首を絞められているのかと思うと、しばらく黙つて宮子の顔を眺めていた。

「あたし、あなたが、何を恐がつてびくびくしてらつしやるのか、分つてているのよ。だけど、安心して頂戴、あたしの恋人は、ちゃんとここに五人も並んでいるんですからね。あなたのようには他人に恋人を盗られて青ざめている人なんか、あたしは相手にしない性分なの。」

参木は上眼で宮子の顔を見た。どこか身体の中の片端で猛然と飛び上る感情を制しながら、彼はにやにやと笑つた。宮子は参木の方へ向つたテーブルの一角へ足を上げるとまたいった。

「ね、あたしにはあなたの恋人が御主人とどんなことをしてらつしやるか、それやよく分つてゐるのよ。だから、あたしはあなたがお気の毒なの。あたしの恋人なんか、競争であたしの身の廻りのことをしてくれるわ。この下の毛氈もうせんだつて、これはミシエルがコオラツサンだつて持つて来てくれたものなんだし、このクションの天鷲絨びろうどだつて、イギリス人がスキュタリだからどうだとか、ビザンチンがどうだとかいつて、かつぎ込んで来てくれたものばかりなのよ。勿論もちろん、そればかりじゃないわ。昨日も昨日で、ゴルフであたしの取り合いを始めたの。こんなことは、あなたも一寸見ておきなさいよ。」

「それはとにかく、その足だけは上げないように出来ませんか。」

と参木はいつた。

「あら、まあ、あたし、いつの間に足なんか上げたんでしょう。踊子は足が大切なもんだけど、こんなに大切なもんじやないわ。御免なさい。あたし疲れると、何をし出すかしれないのよ。これであたし、やっぱり踊子なんかになつたんだわ。」

「あなたは恋人が来たときでも、そんなことをするんですか。」「まあ、そろそろ、馬鹿にし始めたのね。あたしの恋人なんか、あたしにこんなことをさせたりするもんですか。」

参木は宮子が両手を拡げたように思われた。彼はオルガの跳ね上った足と宮子の足とを較べながら、宮子の傍へどつかと坐つてまたアルバムを取つた。すると宮子は参木の手からアルバムを取

り上げた。参木は彼女の唇の端に流れた嘲弄を感じると、突然、  
 圧しきれぬ若々しさが芽を吹いた。彼は苦渋な表情のままじつと  
 煙草を吸っていたが、いきなり宮子の首を締めつけた。宮子のマ  
 ルセル式の頭髪が長椅子の背中を転々と転がった。宮子は胸に笑  
 いを波立たせながら参木の顔を叩いていった。

「まあ、あなたでも、そんなことを知つてらつしやつたのね。あ  
 たし、油断をしちやつて、失敗しまつたわ。」

パーレーホー  
 白蘭花の花弁が宮子の口に含まれると、次ぎ次ぎに参木の顔  
 へ吹きつけられた。クションが長椅子の逆毛を光らせつつ辺り出  
 した。と、やがて、声をひそめて浮き上つた彼女の典雅な支那沓ぐつ  
 が、指先に銀色の栗鼠りすの刺繡を曲げながら慄えて來た。ふと、参

木は思わぬ危険区劃に侵入している自分に気がついた。彼は飛び上ると鏡を見た——何んと下品な顔ではないか。彼女は自分の中からこの汚さを嗅ぎつけたにちがいない、と思うと彼は、再び突つ立つたまま宮子の顔を睨んでいた。宮子は片脇にクションを抱き込むと、突然大きな声で笑い出した。

「まあ、あなたは、心配ばかりしてらつしやるのね。あなたのなさるようなことなんか、なんでもないわよ。あたしがあなたなんかに悲しまされると思つてらしちや間違いだわ。さアここへいらつしやいよ。そんな恐ろしい顔はなるだけ鏡の中でしてちようだい。」

参木は手丸てだまにとられてやり場のなくなつた自分の顔を感じると、

この思いがけない悲惨な醜さが、どこから襲つて来たのであろうかと考えた。彼は再び静に宮子の傍へ坐ると云つた。

「もう、そろそろ夜が明け出して来ましたね。」

「あなたは私を御覧になつたときから、ぎくしゃくして、あたしに負けまいとばかり思つてらつしたのね。だけど、いくらそんなこといつて誤魔化したって、もう駄目よ。あなたとあたしはこれから喧嘩ばかりしてなきあならないわよ。」

踏みとまろうとする参木の心は、またもずるずる辺つていつた。彼は肉体よりも先立つ自分の心の危険さを考えた。彼はまた立ち上ると宮子にいった。

「じゃ、もう僕はこれで失礼しましよう。さようなら。」

宮子は不意を打たれて黙っていた。参木はそのまま部屋の外へ出ようとした。

「夜が明けるのにこれからあたしひとりでなんかいられないわ。あなたは礼儀つていうものを御存知ないの。」

参木は振り返ると、絨じゆう 艹たん の上に転げていたアルバムを足で踏みつけた。

「じゃ、今夜はもうこれだけで、赦してくれ給え。いずれまた、そのうちに。」

彼は明け初め<sup>そ</sup>た緑色の戸外へ、何事でも困るとその場を捨てる彼の持病を出して、さっさとひとりで出ていった。

## 一一一

霖雨の底で夜のレールが朧ろげに曲っていた。壊れかかつた幌馬車が影のように、煉瓦の谷間の中を潜つていった。混血児の春婦がひとり、弓門の壁に身をよせて雨の街角を見詰めていた。彼女の前の瓦斯燈の傘の上には、アカシヤの花が積つたまま、じくじくと腐つていた。狭い建物の間から、霧を吹いたヘッドライトが現れると、口を開けた醉漢を乗せたまま通り過ぎた。

参木は春婦の前を横切ると露路の中へ這入つていった。その露路の奥の煤けた酒場では、彼の好む臓物が、鍋の中で泡を上げながら煮えていた。客のない酒場の主婦は豆ランプの傍で、硼酸

に浸したガーゼで眼を洗いながら雨の音を聞いていた。参木は高重の来るまでここで、老酒ラオチユウを命じて飲み始めた。二人はこれから工場の夜業を見に廻らねばならぬのだ。

臓物のぐつぐつ煮えた鍋の奥では、瘤こぶまで剃つた支那人の坊主頭が、瀬戸物のようなうす鈍い光りを放つたまま動かなかつた。

主婦の眼にあてたガーゼから流れる水音が、酒と一緒に参木の脊骨を慄わせた。彼の前では、煉瓦の柱にもたれた支那人が、眼を瞑つぶつたまま煙管きせるを啜すつていた。煙管の針の先きで、餡あめのような阿片たまの丸が慄えながらじいじいと音を立てた。豚の足は所々に乱毛をつけたまま乾いた蹄ひづめを鍋の中から出していた。

「おい。」と不意に高重はいつて参木の後へ現れた。

参木は振り返った。高重は呼吸を切迫させて立て続けにいつた。

「君、僕の後から従つて来ている奴があるからね、よろしく頼むよ、どうも、明日が危い。明日、奴らは始めるらしいぞ。今夜はこれから警官の所へ廻つて、御機嫌をとつとかなくちやならんのだ。<sup>は</sup>いや早やどうも、眼が廻るよ。」

いよいよ 罷業ひぎょうが始まるのだ。

「じゃ、これからすぐあなたはいらつしやるんですか。」

「うむ、行こう。」と高重はいいながら参木の盃をとつて傾けた。

「しかし、いよいよ始まつたとした所で、始まつたら始まつたでどうにかなるさ。そこは支那魂という奴で、ね、君、不思議なもので、僕はこれでも、会社がひつくり返ろうとしているのに、昨

夜現像した水牛の写真の方が気になるんだ。」

「それほどの程度で済ませるなら、ここで酒でも飲んでる方がいいでしよう。」

「いや、まあそういういつてしまつちやおしまいさ。僕の会社に罷業が起れば、後の会社は将棋倒しだ。僕のこの腕一本は、今の所、支那と日本の実権を握っているのと同じだからね。僕を煽おだてて酒を飲ましちゃ、国賊だよ。」

「じゃ、もう一杯。」

二人は首を寄せて飲み始めた。高重は片腕を捲まくし上げると、盃を舐なめながら、ぶるぶる慄えて落ちそうな阿片の丸を睨んでいた。

虫の食つた肝臓が皿の上に盛り上つて並べられた。阿片の匂いが酒の中へ混つて來た。うす鈍い光りを放つて寝ていた坊主頭が、煉瓦の柱の角から脱はずれると、瘤にひつかかつて眼をさま醒した。豆ランプが煤けたホヤの中で鳴り始めた。

「あ、そうだ、君にいうのを忘れていた。」と高重はいうと、突然眉を顰ひそめて黙つてしまつた。

参木はしばらく高重の盃に当てた唇を眺めていた。

「競子の婿むこが死んだんだ。」

参木は急に廻転を停めた心を感じた。と、輝き出した巨大な勢力が、彼の胸の中を駆け廻つた。彼は喜びの感動とは反対に、頭を垂れた。だが、次の瞬間、彼はじりじり沈んで行く板のような

自分を感じた。

——俺が競子の良人に変るとしても、金がない。地位がない。  
能力がない。ただ有るものは、何の形もない愛だけだ。——

ふと、彼は高重の沈黙の原因を、自分に向けた高重の憐愍だ  
と解釈した。

すると、俄に、怒りが腹の中で突つ立ち上った。彼は競子を——  
高重の妹を、押し除ける作用で充血した。すると、今まで彼女  
のために跳ね続けて来た女の動作が、浮き上つて来て、乱れ始め  
た。お柳、オルガ、お杉、宮子、と泡立ちながら——。

「さて、いよいよこれから夜業の番か、おい君、今夜は危いから、  
僕から放れてひとり行つちや、おしまいだよ。」

高重はポケットのピストルに触りながら立ち上つた。参木も彼の後から出ていった。彼は嫁いだ競子をひそかに愛していた空虚な時間に、今こそ決然と別れを告げねばならぬと決心した。

——まあ、いくらでも、お目出度くめそめそしたけりや、するがいいよ。——

雨の中を一組の日本の巡羅兵じゅんらへいが、喇叭らっぱを小脇にかかえて通つていつた。高重は参木の方へ傾くと小声でいつた。

「君、今度の罷業は大きくなるよ。」

「大きけりや、大きいだけ、面白いぢやないですか。」

「それも、そうだ。」

二人は黄包車ワングボウツに乗ると飛ばしていった。

## 二三

円筒から墜落する滝の棉。<sup>わた。</sup>廻るローラー。奔流する棉の流れの中で工人たちの夜業は始まつていた。岩窟のような機械の櫓<sup>やぐら</sup>が、風を跳ね上げながら振動した。舞い上る棉の粉が、羽搏<sup>はばたか</sup>れた羽毛のように飛び廻つた。噴霧器から噴き出す霧の中でベルトの線が霞み出した。噛み合う歯車の面前を、隊伍を組んだ糸の大群が疾走した。

参木は高重につれられて梳棉部<sup>カーボード</sup>から練条部<sup>ドローリング</sup>へ廻つて來た。繁つた鉄管の密林には霧が枝々にからまりながら流れっていた。雑然

と積み重つたローラーの山がその体積のままに廻転した。

参木は突撃して来る音響に耳を塞いだ。すると、捻じれた寒い氣流が無数の層を造つて鉄の中から迫つて來た。高重は棉の粉を顔面に降らせながら、傍の女工を指差していつた。

「どうだ、これで一日、四十五錢だ。」

棉を冠つて群れ動く工女の肩が、魚のようにベルトの瀑布の中で交錯した。揺れる耳環が機械の隙間を貫いて光つて來た。

「君、あそこの隅にスラッピングがあるだろう。その横で、ほら、こちらを向いた。」と高重はいうと、急に黙つて横を見た。

絡つたパイプの蔓の間から、凄艶な工女がひとり参木の方を睨んでいた。参木は彼女の眼から狙われたピストルの銳さを感じる

と高重に耳打ちした。

「あの女は、何者です。」

「あれは、君、こないだいつてた共産党の芳秋蘭さ。あの女が右手を上げれば、この工場の機械はいっぺんに停るんだ。ところが近頃、あの秋蘭はお柳の亭主一派と握手し出して来てね。なかなかしたたかものでたいへんだ。」

「それが分つてゐる癖に、なぜそのままにしつくんなです。」

「ところが、それを知つてるのは、僕だけなんだよ。実は、僕はあの女と競争するのが、少々楽しみなんだ。いずれあの女もやられるに定つてゐるから、見ておき給え。」

参木はしばらく芳秋蘭の美しさと鬪いながら彼女の悠々たる動

作を見詰めていた。汗と棉とが彼の首筋から流れて來た。廻るシヤフトの下から、油のにじんだ手袋が伸びて來ると、参木の靴の間でばたばたした。高重は参木の肩を叩いて支那語でいった。

「君、これでこの工場の賃銀は、外国会社のどこよりも高いんだ。それにも拘らず、また一割増の要求さ。僕の困るのも分るだろう。」

実は周囲の工女に聞かすがために、参木にいつた高重の苦しさを、参木は感じて頷いた。すると、高重は再び日本語で彼に向つて力をつけた。

「君、この工場を廻るには、銳さと明快さとは禁物だよ。ただ朦朧とした豪快なニヒリズムだけが機関車なんだ。いいか、ぐつと

押すんだ。考え方や駄目だぞ。」

二人は練条部<sup>ドローアイング</sup>から打棉部<sup>スカチャヤ</sup>の方へ廻つて來た。廊下に積み上つた棉の間には、印度人の警官がターバンを並べて隠れていた。

「参木君、この打棉部<sup>スカチャヤ</sup>には危険人物が多いから、ピストルに手をかけていてくれ給え。」

円弧を連ねたハンドルの群れの中で、男工たちの動かぬ顔が流れていた。怒濤のような棉の高まりが機械を噛んで慄えていた。

参木はその逆巻<sup>さかまき</sup>く棉にとり巻かれると、いつものように思うのだ。……生産のための工業か、消費のための工業かと。そうして、参木の思想はその二つの廻転する動力の間で、へたばつた蛾のようになにた打つのであつた。彼は支那の工人には同情を持つていた。

だが、支那に埋蔵された原料は同情の故をもつて埋蔵を赦すなら、どこに生産の進歩があるか、どこに消費の可能があるか。資本は進歩のために、あらゆる手段を用いて、埋蔵された原料を発掘するのだ。工人たちの労働がもしその資本の増大を憎んで首を縛りたいなら、反抗せよ、反抗を。

参木はピストルの把手を握つて工人たちを見廻した。しかし、ふと、また彼は考えた。

——もし母国が、この支那の工人を使わなければ、——彼に代つて使うものは、英國と米国にちがいない。もし英國と米国が支那の工人を使うなら、日本はやがて彼らのために使用されねばならぬであろう。それなら、東洋はもう終いだ。

参木は取引部へ到着した今日のランカシア一からの電文を思い出した。ランカシア一では、英國棉の振興策を講じるため、工業家の大会が開催された。その結果、マンチエスターの工業家の集団は、ランカシア一と共同して、印度への外国棉布の輸入に対し関税の引き上げを政府へ向つて要求した。

参木はこの英國に於けるマーカンチリズムの活動が、何を意味するかを知つてゐる。それは、明らかに日本紡績への圧迫にちがいない。彼らは支那への日本資本の発展が、着々として印度に於ける英國品——ランカシア一の製品のその随一の市場を襲つていることに、恐慌を來<sup>きた</sup>している。しかし、支那では、日本の紡績内にこの支那工人たちのマルキシズムの波が立ち上つているのであ

る。母国の資本は今は挾み撃ちに逢い出したのだ。参木には、ひとり喜ぶ米国人の顔が浮んで来た。そうして、より以上にますます喜ぶロシアの顔が。——レセ・フェールの顛落てんらくとマルキシズムの擡頭たいとう。その二つの風の中で、飛び上っている日本の廐たご——参木は今はただピストルを握つたまま、ぶらりぶらりとするより仕方がないのだ。思考のままなら、彼の狙つて撃ち得るものは、頭の上の空だけだ。しかし、危険は、この工場内にいる限り、刻々彼自身に迫つている。何故にこの無益な冒険をしなければならぬのか。——ただ自分の愛人の兄を守るためのみに。——彼は高度重视の肩を見るたびに、彼から圧迫される不快さに揺すられて歩を進めた。

そのとき、河に向つた南の廊下が、真赤になつた。高重は振り返つた。その途端、窓硝子<sup>ガラス</sup>が連續して穴を開けた。

「暴徒だ。」と高重は叫ぶと、梳棉部<sup>カバード</sup>の方へ疾走した。

参木は高重の後から馳け出した。梳棉部では工女の悲鳴の中で、電球が破裂した。棍棒形のラップボートが飛び廻つた。狂乱する工女の群<sup>むれ</sup>は、機械に挟まれたまま渦を巻いた。警笛が悲鳴を裂いて鳴り続けた。

参木は揺れる工女の中で暴れている壯漢を見た。彼は白い三角旗を振りながら機械の中へトツプローラを投げ込んだ。印度人の警官は、背後からその壯漢に飛びつくと、ターバンを摺らして横に倒れた。雪崩<sup>なだ</sup>に出した工女の群は、出口を目がけて押しよせた。

二方の狭い出口では、犇めき合つた工女たちがひつ搔き合つた。  
 電球は破裂しながら、一つ一つと消えていった。廊下で燃え上つた落棉の明りが破れた窓から電燈に代つて射し込んで来た。ローラの櫓は、格闘する人の群に包まれたまま、輝きながら明滅した。参木は廊下の窓から高重の姿を見廻した。巨大な影の交錯する縞の中で、人々の口が爆けていた。棉の塊りは動乱する頭の上を躍り廻つた。つぶて メートル礫が長測器にあたつて、ガラスを吐いた。カーデングマシンの針布が破れると、振り廻される袋の中から、針が降つた。工女たちの悲鳴は、墜落するように高まつた。逃げ迷う頭と頭が、針の中で衝突した。噴霧器から流れる霧は、どよめく人の流れのままにぼうぼうと流れていた。

廊下へ逃げ出した工女らは、前面に燃え上った落棉の焰を見る  
 と、逆に、参木の方に雪崩なだれて來た。押し出す群れと、引き返す  
 群れとが打ち合つた。と、その混乱する工女の渦の中から、彼は、  
 閃めいた芳秋蘭の顔を見た。もしこの暴徒が工人たちのなかから  
 発したものなら、どうしてそれほど彼女は困憊こんぱいするだろう。参  
 木は思つた。……これは不意の、外からの暴徒の闘ちんにゅう入にちが  
 いない、と。

参木は近づいて來た芳秋蘭を見詰めながら、廊下の壁に沿つて  
 立つていた。すると、工女の群は参木を取り包んだまま、新しく  
 一方の入口から雪崩れて來た一団と衝突した。参木は打ち合う工  
 女の髪の匂いの中で、揉まれ出した。彼は揺れながら芳秋蘭の行ゆ

衛くえを見た。彼女は悲鳴のために吊り上つた周囲の顔の中で、浮き上り、沈みながら叫んでいた。彼は彼を取り巻く渦の中心を彼女の方へ近づけようと焦り始めた。火は落棉から廊下の屋根に燃え拡がつた。吐け口を失つた工女の群は非常口の鉄の扉へ突きあつた。が、扉は一団の塊りを跳ね返すと、更に焰の屋根の方へ搖れ返した。参木はもはや自分自身の危険を感じた。彼はこの渦の中から逃れて場内の暴徒の中へ飛び込もうとした。しかし、彼の両手は押し詰めた肩の隙からも抜けなかつた。背後から呻き声の上るたびごとに、彼の頭はひつ搔かれた。汗を含んだ薄い着物が、べとべとしたまま吸いつき合つた。彼は再び芳秋蘭を搜して見た。振り廻される劉りゆう 髮はつ の波の上で刺さつた花が狂うように逆卷い

ていた。焰を受けて煌めく耳環の群団が、腹を返して沸き上る魚のように沸騰した。と、再び振り返しが、彼の周囲へ襲つて來た。彼は突然、急激な振幅を身に感じた。面前の渦の一<sup>へ</sup>角が陥没した。人波がその凹んだ空間へ、将棋倒しに倒れ込んだ。新しい渦巻の暴風が暴れ始めた。飛び上つた身体が、背中へ辻り込んだ。起き上つた背中の上へ、背中が落ちた。すると、参木の前の陥没帶の波の端から芳秋蘭の顔が浮き上つた。参木は弛んだ背中の間にじりながら、彼女の方へ延び出した。彼は彼女の肩へ頸をつけた。しかし、彼の無理な動搖は、彼の身体を舟のように傾かせた。彼は背後からの圧力を受け留めることができなかつた。彼は斜めに肩と肩との間へ辻り込んだ。続いて芳秋蘭の身体が崩れて來た。

彼は彼女を抱いて起き上ろうとした。すると、上から人が倒れて来た。彼は頭を蹴りつけられた。身体が振動する人の隙間を狙つて沈んでいった。彼は秋蘭を抱きすくめた。腕が足にひつかかつた。<sup>くつ</sup>脊が脇の下へ刺さり込んだ。しかし、参木には、もはや背中の上の動乱は過去であつた。二人は海底に沈んだ貝のように、人の底から浮き上る時間を待たねばならなかつた。彼は苦痛に抵抗しながら身を竦めた。秋蘭の頭は彼の腹の底で藻<sup>も</sup><sub>が</sub>搔き出した。彼の意識は停止した音響の世界の中で、針のようになに秋蘭に向つて進行した。

非常口が開けられると、渦巻いた工女は広場の方へ殺到した。

倒れた頭が一つずつ起き上つた。参木は起き上ろうとして膝を立

てた。秋蘭は彼の上衣に掴まつたまま叫んだ。

「足が、足が。」

彼は秋蘭を抱きかかえると広場の方へ馳けていった。

## 二四

参木は秋蘭の隣室で眼を醒した。<sup>さま</sup>彼は煙草を吸いながら窓から下を見降した。朝日を受けた街角では、小鳥を入れた象牙の鳥籠が両側の屋根の上まで積つていた。その鳥籠の街は深く鳥のトンネルを造つて曲つていた。街角から右へ売ト者<sup>ばいほくしゃ</sup>の街が並んでいた。春服<sup>しゅんぶく</sup>を着た支那人の群れは、道いつぱいに流れながら、

花を持つて象牙の鳥籠の中を潜くぐつていった。彼らのその笛の音を聞くような長閑のどかな流れに従い、街は廻りながら池の中へ中心を集めていた。

参木は昨夜以来の彼自身の成行なりゆきを忘れてしまった。彼は雨の中を秋蘭のままにただ馳けたのであつた。彼は医院へ馳け込んだ。彼は秋蘭の足がただ所々擦りむけて筋よじが捻ねじれただけにも拘らず、彼女を乗せて自動車を走らせた。彼はいつた。

「どうぞ、お宅まで、御遠慮なく。」

彼は彼女を鄭重にすることが、頭の中から競子を吐き出す何よりの機会だと観測した。思慮は一切過去の総すべてを悲劇に導いて来ただけではないか。彼は自身を煽動しながら、秋蘭の部屋まで

這入つていつた。しかし、彼の喜びはまたその壁の中でも進行した。

秋蘭は彼に隣室の客間を指して巧みな英語でいつた。

「どうぞ、あちらが空いていますから。」

彼が彼女を礼節よりも愛した原因はその秋蘭の眼であつた。秋蘭は彼にいい続けた。

「どうぞ、あちらへ、ここはあまりお見せしたくはございませんの。」

「じゃ、もうこのままこれで失礼しましよう。」と参木も英語で  
いつた。

「いえ、あたくし、もうしばらくいらっしゃっていただきたいんでご

ざいます。それに、ここは支那街でござりますわ。今頃からお帰りになりますては、またあたくしがお送りしなきあならないんですもの。」

彼は彼自身の欲するものを退けて来たのは、過去であつた。帆は上げられて立っている。彼は自身の胸に勇敢な響きを感じながら、隣室に下つた幕を上げた。そこで、彼はいつになれば秋蘭が全く敵対心も無くしてしまうのであろうかを待ちながらも、いつの間にか眠つてしまつた。

しかし、今は、朝だ。――

池の中で旗亭の風雅な姿は積み重なつた洋傘のように歪んでいた。その一段ごとに、鏡を嵌めた陶器の階段は、水の上を光つては

来た。人で埋つた華奢な橋の欄干は、ぎつしりと鯉で詰つた水面で曲つていた。人の流れは祭りのように駄蕩として、金色の招牌の下から流れて來た。

参木はその人の流の上に棚曳いたうす霧の晴れていくのを見ていると、秋蘭と別れる時の近づいたのを感じた。彼は秋蘭の部屋の綵帳を揺すつた。秋蘭は古風な水色の皮襖を着て、紫檀の椅子に凭りながら手紙の封を切つていた。彼女は朝の挨拶を済すと足の痛みの柔ぎを告げて礼を述べた。

「もし昨夜あなたが、あたしの傍にいて下さらなければ、——  
と、秋蘭はいった。そうして、彼女は参木に異国の方を一人持  
ち得た喜びを述べると、食事を取りに附近の旗亭へ案内したいと

いい出した。

「しかし、あなたのそのお傷じや、——」と参木はいった。

「いえ、あたしたちはもう日本の方に、そんなに弱い所ばかりお見せしたくはございませんの。」

秋蘭は参木を促すと先に立つた。二人は街へ降りた。石畳の狭い道路は迷宮のように廻っていた。頭の上から垂れ下つた招牌や幟のぼりが、日光を遮りさえぎ、その下の家々の店頭には、反そりを打つた象牙とが林のよう並んでいた。参木はこの異国人の混らぬ街を歩くのが好きであつた。象牙の白い磨ぎ汁とが石畳の間を流れていた。その石畳の街角を折れると、招牌の下に翡翠ひすいの満ちた街並が潜んでいた。眼病の男は皿に盛り上つた翡翠の中に埋もれたまま、朝か

らぼんやりと眼をしほめて、明りの方を向いていた。

参木は象牙の挽粉ひきこで手を洗う工人の指先を眺めながら、彼女にいった。

「あなたはこれからどつかへお急ぎになる所じやありませんか。」

秋蘭は彼の言葉が、何を意味するかを見詰めるように、彼を見た。

「いえ、あたくし、今日はこの足でございましょう?」

「しかし、ここまでいらつしやれるなら、もうどこへだつて大丈夫だと思いますが。どうぞ僕のために御無理をなさいませんように。」

参木は秋蘭が何者であるかを気付かぬらしく装いながら、のど

かに風鈴の鳴る店頭へ眼を移した。秋蘭はしばらく彼の横顔を眺めていたが、間もなく、急所を見抜かれた女のように優しげに顔を赭あからめて参木にいった。

「あなたはもうあたくしがどんな女だか、すっかり御存知でいらっしゃりますのね。」

「知っています。」と彼は答えた。

しかし、秋蘭はただ落ちついて笑っているだけだった。参木はいつた。

「僕は昨夜の騒動は、あれは外からの暴徒だと思うんですが、もしあなたがあの出来事を予想してらしたのなら、あんな騒ぎにはならなかつたと思うんです。何かあれば、あなたがたの妨害たくらを謀

んだものの仕事のように思うんです。」

「ええ、そうでござりますとも。あれは全く不意の出来事でした。の。あたくしたちは、お國の方かたの工場にあんなことの起るのを願うこともございましたけれども、それはあたくしたちの手で起さなければ、お國の方に御迷惑をおかけするような結果になるだけだと思いますの。」

参木は笑いながら秋蘭にいった。

「では、どうぞ。」

秋蘭は朗かな歯並を見せて動搖した。しかし、参木は不意に憂鬱になつて來た。——何を自分は狙つていたのかと考えたのだ。

自分が彼女を追い馳けた苦心の総ては火事場の泥棒と同様ではな

かつたか。自分が彼女を送つたのは、自分の卑屈を示しただけで  
はなかつたか。——しかし、彼はすでになされた反省の決算を思  
い出した。今は、彼はただこの支那街の風景の中を、支那婦人と  
共に漫歩する楽しさに放心すればそれで良いのだ。それ以外は、  
いや、考えちゃ、もう駄目だ。

翡翠に飾られた店頭の留木とまりぎには、首を寄せ集めた小鳥のよう  
に銀色の支那沓がとまつっていた。象牙の櫛くしが煙管や阿片壺と一緒に  
に、軒を並べて溢れていた。壁に詰つた印肉の山の下で、墨くすのきが石  
垣のように並んでいた。仏像を刻む店々の中から楠くすのきの割れる音が  
響いて來た。人波の肩の間で、首環売りがざくざくと玉を叩いた。  
参木は秋蘭の方を見た。すると、彼女の水色の皮襖ピーオは、羽根を拡

げたように連つた店頭の支那扇の中で、しなしなと揺れていた。

二人は旗亭の辻る陶器の階段に足をかけた。参木は秋蘭の腕を支えた。彼女は彼によろめきかかると笑つていつた。

「まあ、あたくし、まだあなたに御迷惑をおかけしなければなりませんのね。」

「どうぞ。」

「あたくし、こんな身体で、よく労働が勤まるとお笑いになるでしょう。」

「いや、たいへん感服させられております。」

「でも、あたくしたちは、ほんとうはまだまだ駄目なんござりますの。あたくしなんか、こんなに威張つたりしておりましても、

もうすぐこうして美しい着物やなんか、着てみたくてなりませんのよ。」

参木は階段の中途で、この支那婦人の纖細な苦悶に触れるのが喜ばしく感じられた。階段の立面に嵌はまつた鏡の上では、一段ごとに浮き上がる秋蘭の笑顔が、フィルムのように彼を見詰めて変つていった。すると、ふと参木は、高重のいつた言葉を思い出した。

「この女も、いずれ誰かにやられるから、見て置き給え。」

ばつたりフィルムが切れて、凄艶な秋蘭の笑顔が無くなると、白蘭の繁つた階上から緑色の陶器の欄干が現れた。

「僕があなたとお近づきになつたことで、もしあなたに御迷惑を

おかげするような結果にでもなりますなら、どうぞ、御遠慮なく  
おかけする」

おっしゃ  
仰言つて下さい。」

「いえ、あなたこそ御遠慮なく。あたくしにはあなたが他国の方  
とは思えませんの。無論あたくしたちは、あなたがたの工場と争  
わなければなりませんわ。でも、そんなことは、何んといつたら  
いいんでしょう。あなたと争い事のようになるものとは思えない  
んでございますの。」

参木は黒檀の椅子に腰を降ろすと、いつの間にか豊かな愛情の  
中で漂い出した日本人に気がついた。彼は再び憂鬱に落ち込んだ。  
彼が競子を蹴つたのは、彼が競子のために乱されたからではなか  
つたか。彼が秋蘭に溺れたのは、競子を蹴つて逃げ出すためでは

なかつたか。しかし、今まで彼は、駆け込んだ秋蘭のために乱されて來たのであつた。彼は、今は自身がどこをうろついているのか分らなくなつて來た。——彼は引き下つたように身構えると、突然秋蘭にごつごつした英語でいい始めた。

「僕はあなたが、僕を日本人じゃないと思つて下さるお心持ちにはお礼を申しますが、しかし、僕は日本人だということを、別に悲しむべきことなどは少しも思つちやおりませんですよ。ただ僕はマルキストのように、自分を世界の一員だと思うようなことが出来ないだけの日本人です。誰でもマルキストは、西洋と東洋との文化の速度を、同じだと思つてるように見受けるんですけれども、僕はその誤りからは、ただ秀れた犠牲者を出すだけが唯一の

生産のように思われるんです。どうでしょう。」

すると、秋蘭は彼と太刀たちを合すように、急に笑顔を消して彼に向つた。

「それはあたくしたちにも、今の所いろいろな誤謬のあることは、認めなければなりませんわ。でも、その国にはその国の原料と文化とに従つたマルキシズムの運用法があると思います。譬えば、あたくしたちが中国人の經營する工場へ闘争力を注ぐよりも、先ず外人の工場へというように、自然に強力な方向に動いて参りますのは、これは仕方がないんじやないでしようか。」

「けれども、それはあなたがたが、中国に新しい資本主義をますます強く、お建てになるのと同様じやないでしようか。僕は外国

会社の生産能力を圧迫すれば、それだけ中国の資本主義が発展するにちがいないと思うんですが。」

「でも、そういうことは、今はあたくしたちは出来得る限り黙認しなければならないと思いますの。あたくしたちにとって、中国の資本主義より、外国の資本主義を恐れなければならぬことの方が、たしかに当然なことじやございませんでしようかしら。」

参木はもはや秋蘭との愛の最後を感じると、ますます頭を振つて斬り込んでいきたくなつた。

「勿論もちろん、僕はあなたがたが、われわれの工場をお選びになつたということには、不幸を感じております。僕は日本を愛しています。しかし、それがすぐに中国との鬭争になることだとは、僕は

あなたがたのようには思えないですね。」

「それはあなたが東洋主義者でいらっしゃるからだと思しますわ。  
もうあたくしたちは、東洋主義がどんなにお国のブルジョアジー  
に尽力したかということを、清算しなければならないときです。  
あたくしたちは、どなたでも、貧しい人々の外は、もうちつとも  
信頼することが出来なくなつておるんでござりますの。」

「あなたが僕をあなたのお思いになるような東洋主義者になつたのは残念ですが、僕が日本を愛したいと思うのは、あなたが中國をお愛しになると何んの変りもないのです。僕は自分の母国を愛する感情が、それがすぐにあなたの仰おつしゃ言るブルジョアジーを愛するのと同じ結果になるという状態には、幾分迷惑を感じて

いるものなんですけれども、しかし、だからといって母国を愛せずに、中国を愛しなければならぬという理由も、今の所、どこにもないと思うんです。」

「でもそれは、あたくしには、あなたがただお国の味方をなすつていらつしやるだけだと思われます。もしあなたがほんとうにお国をお愛しなすつていらつしやいますなら、中国のプロレタリアもお愛しになるに違いないと思います。あたくしたちがお国に反抗するのは、お国のプロレタリアにではありませんわ。だから、あたくしあなたに、こんなことをお話ししたりすることは——。」

「しかし、僕は中国の人々が日本のブルジョアジーを攻撃するのは、結果に於て日本のプロレタリアを*いじ*めているのと同様だと思

うんですよ。」

秋蘭は咳<sup>せ</sup>き上げて来た理論に詰つたように眼を光らせた。

「どうしてでございましょう。あたくしたちはお国のプロレタリアのためには、中国を解放しなくちやならないと思つてゐるんでございますけど。」

「しかし、それは日本にプロレタリアの時代が来なければ、——」

「そうです、あたくしたちはお国にプロレタリアの時代の来るためにお国のブルジョアジーに反抗してゐるんでございますわ。」

「しかし、それには中国にも同時にプロレタリアの時代が来なければ、——」

「それは勿論、あたくしたちはそのために、絶えず活動してゐる

んじやございませんか。その第一に、今もあたくしたちはあなた方の工場に、不平を起そうと企んでいるんでござりますわ。多分もう今頃は何んとかされている頃かと思われますが、どうぞしばらく、御辛抱をお願いします。」

秋蘭はまだこのときも参木への感謝を失わずに頭を下げた。しかし、参木には新しい疑問が雲のように起つて來た。彼はいつた。「僕はさきにも申し上げた通り、あなた方がわれわれの工場の機械をおとめになるということには、今何んと申上げていいか分らないんです。けれども、中国がいま外国資本を排斥することから生じる得は、中国の文化がそれだけ各国から遅れていくということだけにあるんじやないかと思うんです。これは勿論重々失礼な

いい草だと思いますが、しかし、優れたコンミニストとしてのあなたのこの客観的な確実な問題に対しての御感想は、最も資本の輸入の必要に迫られている中国であるだけに、一応承わつておきたいと思うんです。」

秋蘭は頭脳の廻転力を示す機会を持ち得たことを誇るかのように、軽やかに支那扇を拡げてにつこりと笑つた。

「ええ、それは、あたくしたちの絶えず考えねばならぬ中国問題の一つでございますの。でも、それと同時にそんな問題は、列国ブルジョアジーの掃<sup>はきだめ</sup>溜<sup>溜</sup>である共同租界の人々からは、考えて頂かない方が結構な問題でもございますわ。これは勿論失礼ないい方ですけれども、あたくしたち中国人にとつて、殺到して来る各

国の武力から逃れるための方法としてでも、あたくしたち以外の考えがあるとお思いになりまして。」

しかし、彼の頭の中では彼女のいう「掃溜に関する疑問」は、依然として首を振つた。——問題はそれではないのだ。掃溜の倫理が問題なのだ。——と。

事実、各国が腐り出し、蘇生するかの問題の鍵は、この植民地の集合である共同租界の、まだ誰も知らぬ掃溜の底に落ちているにちがいないので。ここには、もはや理論を絶した、手をつけることの不可能な、混濁したものが横つていてるのである。参木は運び出されたステップの湯気の上へ延びながら、笑つていった。

「どうも、僕は昔から相手の人を敬愛すると不思議に頭が廻転し

なくなる癖があるんです。どうぞ、お怒りにならないように。」

すると、秋蘭の皮襖<sup>ピーオ</sup>の襟からは、初めて、典型的な支那婦人の都雅<sup>とが</sup>な美しさが匂いのように流れて来るのであつた。

「あたくし、今日はあなたとこんな嶮しいお話をしたいとは思いませんの。もつと、あなたのお喜びになるような、御歓待をしなければと思うんですけど、——」

「いや、もう僕はあなたから、東洋主義者にしていただいたことだけで結構です。」

「あら。」と秋蘭は美しい眼を上げて扇をとめた。

「しかし、もともと僕はあなたをお助けしようと殊勝な心掛けで御介抱したのではありません。もしそうなら、あのときあな

た以外の沢山な人にも、僕は同様に心を働かせていたはずだつた  
と思います。それに、特にあなたを見詰めて動き出したという僕  
の行動は、マルキシズムなんかとは凡そ反対の行動およでしたのです。  
しかし、とにかくもうこれだけの僕の気持ちをお話しければ、も  
う一度お目にかかりたいとは思わないでしようから、では、今日  
はこれで、さようなら。」

参木は辺る陶器の階段を降りていった。すると、秋蘭の扇はぱ  
つたり黒檀の円卓のおもて面へ投げ出された。

河へ向つて貧民窟の出口が崩れていた。その出口の周囲には、堆積された汚物が波のように続いていた。参木の家へ出かけたお杉は彼の帰りを見計らつて歩いて來た。影の消えた夕闇の中で、お杉の化粧は青ざめていた。霧が泥の上を流れて來た。真黒な長い棺が汚物の窪みの間を縫つて動いていつた。河岸の地べたに敷かれた古靴の店の傍で、売られる赤児が暗い靴の底を覗いていた。揚荷を渡す苦力たちの油ぎつた塊りかたま<sup>クリ</sup>の中から、お杉は参木の姿を見つけ出した。

彼女はくるりと向き返えると、逆に狼狽うろたえて歩き出した。が、何も狼狽えることはない。彼女は彼の家を出てから十日の間に、早くも男の秘密を読み破る鑑識を拾つて來たはずだ。それに、一

——彼女は夕闇の中で呼吸が俄に激しくなつた。この次逢えば、冷  
 い参木の胸を叩き得る手段を感じて、昂然として来たはずだのに  
 ——お杉の背中は乳房の後ろで張り始めた。彼女は数々の男の群  
 れを今は忘れて逆上した。舞い疲れた猿廻しの猿は泥溝の上のバ  
 ナナの皮を眺めていた。虫歯抜きの老婆は貧民窟から虫歯を抜い  
 て出て来ると、舟端に腰を降ろして銅貨の面おもてを舐め始めた。

参木は河岸に添つてお杉の後まで近づいた。しかし、彼は前へ  
 行くお杉には気付かなかつた。二人は平行した。お杉は意志とは  
 反対の霧の降りた河を見た。河にはいっぱいに満ちた舟の中で、  
 整えられた排泄物が露出したまま静に水平を保つていた。参木は  
 お杉の前になつた。彼女は彼の後から彼の家まで歩こうと思つた。

すると、十日間の過去が、参木の知らない彼女の淫らな過去が、お杉の優しさをうち叩いた。

お杉は彼との肉体の間に、威厳を感じた。化粧した顔が、重くぐつたりと下つて來た。希望が歩く時間に擦りへらされた。愛情はまだ参木の後姿に絡つたまま、沈み出した。すると、お杉は通りかかった黄包車（ワンドボウツ）を呼びとめて、参木の面前を馳け抜いた。

参木は車体の上で黙礼しながら揺れて行くお杉を見た。瞬間、彼は新鮮な空気の断面を感じて直立した。彼は黄包車を呼んだ。彼は彼女の後を馳けさせた。しかし、彼は逃げるお杉を追わねばならぬ原因がどこにあるのか分らなかつた。ただ夕暮れの疲労の上に、不意に輝いた郷愁に打たれた自分を感じると、彼は再び凋（しお）

れて來た。泥溝の岸辺で、黒い朽ちかけた杭が、ぼんやりと黒い泡の中から立つていた。古い街角で壁が二人の車を遮ぎつた。二人の車は右と左に分れていつた。

お杉は雑ざつ鬧とうした街の中で車を降りた。彼女は露路の入口へ立つと、通りかかった支那人の肩を叩いていつた。

「あなた、いらつしやいな、ね、ね。」

湯を売る店頭の壺の口から、湯氣が馬車屋の馬の鬱たてがみへまつわりついて流れていた。吊り下つた薪まきのような堅い乾物の谷底で、滴りを垂らした水々しい白魚の一群が、盛り上つて光つていた。

参木は割れた鏡の前で食事を取つた。壁には人声の長らく響かぬ電話がかかり剥ぎ忘れたカレンダーが遠い日数を曝していた。

参木は花瓶にへし折れたまま枯れている菖蒲の花の下で、芳秋蘭の記憶を忘れようとして努力した。彼はだらりと椅子の両側へ腕を垂れ、眼を瞑り、ただ階段の口から揺れて来る食物の匂いに騒ぐ生活を感じていた。希望は——彼が芳秋蘭を見て以来、再び、彼の一切の希望は消えてしまつた。彼は水を見詰めるように、彼の周囲の静けさの中から自分の死顔を探り出した。

日本人の給仕女が退屈まぎれに、しなしなと貴婦人の真似をしながら、昇つて來た。窓から見える鋪道の上で、豚の骨を舐めた

少女の口の周囲に青蠅が一面毬のようにたかつたまま動かなかつた。トラックに乗つた一団の英國軍樂隊が、屋根の高さのままで疾走した。<sup>ワシントン</sup>黄包車の素足の群れが、タールを焼きつける火に照らされながら、煙の中を破つて來た。ふと参木は、薄暗い面前の円卓の隅で、瓶の中の水面を狙つてひそかにさきから馳け昇つているサイダーの泡に気がついた。

——これは、と彼は思つた。それと同時に、彼は再び芳秋蘭と一緒に揺れ上つて來た彼の会社の罷業の状態を思い出した。それは單なる罷業ではなかつた。それは芳秋蘭の言葉のように、ますます確に前進するにちがいない。それは民族と民族との戦いにまで馳け上る危機を孕んで廻転する。——彼は瓶を掴んで振つてみ

た。泡は、泡とは、圧迫する水の圧力を突き破つて昇騰する気力である。参木は芳秋蘭らの率いる支那人の団結力が、彼の会社の末端から発生し、高重の占める組長会議を突破し、主任会議を突き抜け、部長会議を粉碎して重役会議にまで駆け上った縦断面を、頭に描いた。工人たちの要求は、その重役会議で否決された。外部の総工会が活動した。その指令のままに動く工人たちの操業は、停止された。そうして、いよいよ大罷業が始つたのだ。この海港にある邦人紡績会社のほとんど全部の工場は、今は飛び火のために苦しみ出した。やがて、日貨の排斥が行われるであろう。

英米会社は自国の販売市場の拡張のため、その網目のように張られた無数の教会と合体して、支那人の団結力を煽動するにちがい

ない。

——しかし、ロシアは、と彼は考えた。

ロシアは英米の後から、彼らの獲得したその販売市場に火を放つていくにちがいない。参木はやがてこの海港の租界を中心に、巻き起こされるであろう未曾有の大混乱を想像した。もし芳秋蘭が殺されるなら、そのときだ。×英米三国の資本の糸で躍る支那軍閥の手のために、彼女は生命を落すであろう。——

しかし参木にはこの**膨**ぼう**大**だいな東亜の渦巻が、膨大な姿には見えなかつた。それは彼には、頭の中に畳み込まれた地図に等しい。彼は指に挟んだ葉巻の葉っぱが、指の間で枯れた環わをごそりと弛めているのを眺めながら、現実とは自分にとつてこの枯れた葉巻

の葉っぱであろうか、頭の中の地図であろうか、と考え出した。

## 二七

甲谷が来ると参木は昨夜から襲われ続けた芳秋蘭の幻想から、ようやく逃れたように自由になつた。参木はいつた。

「君の顔は明るい、まるで、けもの、獸だ。」

甲谷はステッキを振り上げた。しかし、たちまち彼は笑い出すと参木を打つた。

「これでも、獸か、獸か。——ところが、僕は昨夜からまだ人間にはなれないんだぜ。あらゆる悪事をやつてのけようと企らんで

いるのだが、悪事をやるには、何より先ず立派な人間にならんと  
駄目だ。」

甲谷は溜息をつきながら、参木の身体に凭りかかった。

「どうした、参木、俺の敵は馬鹿にしお萎れているじゃないか。」

「萎れた、参木も駄目だよ。マルキシズムの虫がついた。」

甲谷は参木から飛びのくと、大げさに眉立てた。

「虫か。」

「虫だよ。」

「君も憐れな奴だね、君は人間の不幸ばかり狙つて生きてるんだ。  
人間が不幸になつて、どうしようてんだ。」

「君に不幸が分ればマルキシズムなんて存在しないよ。」

「馬鹿をいえ。人間の幸福というものは、不幸な奴がいるからこそ、幸福なんだ。われわれは不幸な奴まで幸福にしてやる資格なんて、どこにあるんだ。人間は人を苦しめておれば、それで良ろし。俺が俺のことを考えずに、誰が俺のことを考えてくれるのだ。行こう。今夜は神さまのいる所へ行くんだぞ。しつかり頼むよ。」

二人は階段を降りた。狭い壁と壁との間の敷石に血痕が落ちていた。と、人気のない庭の出口の土間の上に、支那人が殺されたまま倒れていた。二人は立ち停つた。転げた西班牙ナイフの青い彫刻の周囲で血がまだ静かな活動を続けていた。甲谷は死体を跨またいで外へ出ると、参木にいった。

「どうも、飛んだ邪魔物だね。問題はどこだつたのかな。」

参木は今は甲谷の虚榮心の強さに快感を感じて來た。

「君はその手でマルキシズムをやつつけようというんだな。」

「そうだ。あんな死人を問題にしていや、マルキシズムに食われるだけさ。われわれは資本の利潤が購買力を減少させるなんて考える単純な頭の者とは、少々人種が違うんだ。マルクス主義者は、いつでも機械が機械を造つていくという弁証法だけは忘れているんだ。そんな原始的な機械じや、折<sup>せつ</sup>角<sup>かく</sup>ですが、資本主義は滅びませんわ。ところで、おい、あの殺しの犯人は、俺たちだと思われやしないかい。逃げよう。」

甲谷は黄包車<sup>ワンドボウツ</sup>を呼びとめると、参木を残してひとり勝手に馳け出した。

「君、トルコ風呂だよ。失敬。」

参木はひとりになると、死人を跨いだ股の下から、不意に人影が立ち上つて来そうな幻覚に襲われた。彼は砂糖黍さとうきびが藪やぶのよう

に積み上つた街角から露路へ折れた。ロシア人の裸身踊りの見世物が暗い建物の隙間で揺れていた。彼は死人の血色の記憶から逃れるために、切符を買うと部屋の隅うずくまへ踞つた。彼の眼前で落ち込んだ旧ロシアの貴族の裸形の団塊が、豪華な幕のように伸縮した。

三方に嵌はまつた鏡面の彼方では、無数の皮膚の工場が、茫々として展けていた。踊子の口に銜くわえたゲラニヤの花が、皮膚の中から咲き出しながら、踊る襞ひだの間を真紅になつて流れていった。

——参木は今は薄暗いこの街底の一隅で没落の新しい展開面を

見たのである。彼らはもはや、色情を感じない。彼らは、やがて後から陸續として墜落して来るであろう人間の、新鮮な生活の訓練のために、意氣揚々として踊つていた。皮膚の建築、ニヒリズムの舞踏、われらの先達<sup>せんだつ</sup>、おお、今こそ彼らは真に明るく生き生きと輝き渡つてゐるではないか。万歳——参木は思わず乾杯しようとしてグラスを持った。と、皮膚の工場は急激に屈伸するし、突然、アーチのトンネルに変化した。油を塗つた丸坊主の支那人が、舌を出しながら、そのトンネルの中を駱駝<sup>らくだ</sup>のように這い始めた。油のために輝いた青い頭の皮膚の上に、無花果<sup>いぢじゅく</sup>の満ちた花園が傾きながら映つていった。世界は今や何事も、下から上を仰がねばフィルムの美觀が失われ出したのだ。——再び、トン

ネルが崩れ出すと、参木は後を振り返つた。すると、塊かたまつた観客の一群の顔の上に、べつたり吸いついた吸盤のような動物を、彼は見た。彼は、その巨大な動物を浮き上らせた衣服の波の中から逆に野蛮な文明の建築を感じて來た。

## 二八

トルコ風呂の蒸氣の中で、甲谷の身体は膨れ始めた。客のマツサージをすませたお柳の身体から、石鹼の泡が滴ると、虎斑とらふに染つた蜘蛛くもの刺青いれずみが、じくじく色を淡赤く変えつつ浮き出て來た。甲谷は片手で蜘蛛の足に磨きを入れながら彼女にいつた。

「奥さん、あなたはお杉をどうして首にしたんです。」

「ああ、あの娘こ、あの娘は駄目なの。あなたはまだあの娘の出でいる所も御存知ないの。四川路しせんろの十三番八号の皆川よ。」

「出でると仰言ると、つまり、出るべき所へですか。」

「ええ、そうよ。」とお柳は冷淡に澄していつた。

「じゃ、あなたにも、責任があるわけですね。」

「そりや、一人前にしてやつたんだから、お礼ぐらいはされてもいいわ。」

この毒婦、と甲谷は思うと、俄にわかに泡の中で、お柳の刺青が毒々しい生彩を放つて來た。と、ふと、彼は彼女と、どちらが誰の洗濯機であろうかと考えた。

「奥さん、あなたは僕の身体を洗うんですか、あなたの蜘蛛を洗うんですか。」と彼はいった。

甲谷は頬を平手でいきなり叩かれた。彼は飛び退くとお柳を蹴つた。蒸気が音を立てて吹き出す中で、二人のいつもの争いが始り出した。すると、甲谷は急にサラセンで見た芳秋蘭の顔が浮んで来た。

「マダム、マダムの所へは芳秋蘭という支那の婦人は来ませんか。  
先日僕は山口から聞いたんだが。」

「芳秋蘭？　ああ、あの女はあたしの主人に逢いに来るの。主人はあの女のいうことなら、いくらだつて聞いてやるのよ。」

「それなら、マダムの敵か。」

「敵は敵かも知らないけど、あれはお金の方の敵だから。」

「それなら一層大敵だね。ところが、僕はある婦人にだけはこの間見惚れたね。みとマダムの主人に頼んでひとつ、紹介して貰いたいと思っているんだが、駄目かなそれは。」

「それや駄目だわ。あの人だけは秘密でそつとくるんだから。」「それなら秘密でそつとという手もあるからな。どうも、あの婦人にだけはもう一度ぜひ逢いたい。」

お柳は黙つてぴしりと甲谷をつねるといつた。

「じゃ、今度来たとき、二階へそつと来てらっしゃいよ。あたし電話をかけてあげるから。」

「奥さま、旦那さまでございます。」

ドアの外で、湯女の周章てる声がした。お柳はシャワーを捻ひねると、甲谷の頭の上から雨が降つた。

「奥さま、旦那さまが——。」

「分つてるわよ。」

「いいんですか。」と甲谷はシャワーの中から顔だけ出してお柳を見た。

「えええ、あの人はこういう所が見たくつてそれであたしにこんなことをさせてるのよ。ここは万事があたしに持つて來いという所。あなたのことだつて、ちゃんとあたしは主人に話してあるの。ああ、そうそう、あのね、主人が一度あなたに逢いたいっていつてたわ。ね、今夜これから逢つてやつて下さらない。シンガポー

ルの話が聞きたいつていつてるの。」

お柳が出て行つて暫くすると、甲谷は間もなく主人の部屋の樓口ろうこう上じょうへ呼び出された。彼は階段を昇つていつた。彼を包む廊下の壁には、乾けんりゆう 隆りゆう の 献けんじゆ 寿模様せんせきざん が象眼ぞうがん 中から浮き出ていた。甲谷は豪商のお柳の主人の錢石山せんせきざんに、材木を売りつける方法を考えながら、女中の指差した奥を見た。

「月明の良夜、懇いんぎん 懇トイズ に接す。」

ふと房前の柱にかかつた対子トイズを読むと、甲谷はお柳の背中の蜘蛛の色を思い出した。部屋へ這入ると、お柳は正面の八仙卓の彫刻の上に肱をついて、西瓜すいかの種を割りながら、樞僕の男と顔を合せて笑つていた。壁側に沿つて並んだ重厚な紫檀の十景椅子の上

では、重そうな大輪の牡丹の花が、匂いを失つたままいくつもぐつたりと崩れていた。

「さア、どうぞ、あなたはシンガポールのお方だそうで。わたしはこの通りお国の方が何より好きなもんですから、この年になつても損ばかりしております。」

銭石山の偽僕の背中が、牡丹の花に挟まつて揺れながら笑つた。

甲谷はいった。

「どうも奥さまは僕を馬鹿になさる癖がお有りですので、つい敷居が高くなつてしましますよ。」

すると、いきなり、お柳は彼に西瓜の種を投げつけて、主人の顔を覗き込んだ。

「あなた、聞いて、この人は、こういう人なんだからね、用心なさるといいわよ。あたしなんか、いつでもこの手でやられちやうのよ。」

「いや、なかなか若いときは面白い。シンガポールはお暑いことでございましょうな。あちらのお国の方の御繁昌なことは、かねがねから承わっておりますが、この頃は？」

「いや、もう何んといつても欧人の資本には敵かないません。それに、あちらは中国商人の張りつめた土地ですから、僅かな資本では割り込む隙がございません。」と甲谷はいった。

「いや、なかなかこの頃はお國の方の御活動は生きております。あなたの方はゴム園で？」

「いえ、僕の方は材木です。しかし、ゴム園にしましても、例え  
ば欧人園は資本を社債か株式か、とにかく低利で運用しておりま  
すが、日本の方は原価も高く、それに流通資金まで高利です。殊  
に配当保留の運用法にいたっては、全く欧人園とは比較にはなり  
ませんよ。あれでは今に、開墾費用の充当さえおかしくなつてしま  
いやしないかと思われますね。」

「ふむ、ふむ、しかしお国も中国の日貨排斥でお困りのようです  
から、南洋へでも喰い込まねば、猫の眼みたいに内閣が變るだけ  
でござりますな。ああ、そうそう、今日はまた日本紡が四つほど  
罷業<sup>ひぎょう</sup>で沈没しましたな。」

錢石山の視線が日本の急所を見透したかのように尊大になつて

笑い始めると、甲谷は急に、今まで彼に売りつけようとしていた材木の話のことよりも、支那人の弱味について考え出した。

「もつとも、この頃の日本も日本でございますが、しかし、馬来<sup>マレイ</sup>や暹羅<sup>シャム</sup>の方では中国人も此の頃ではなかなか困難になつて来ております。中国の共産党员がシンガポールの中国人の中へ潜入して来てまして、ロシアの排英運動に加入しているのですから、英国もだんだん中国人保護の方法を変化させて来ております。」

「それはだんだん変ることでございましような。しかし、中国人の保護法が変つたところで、あそこは中国人を度外視しては政策の行わぬところだから、英國もどうしようもございませんわ。

わたしの知り合いにも一人あそこにいるものもおりますが、シン

ガポールの英人の豪さ<sup>えら</sup>には、なかなか感心しておりました。あそこの英国人がどこの国の英人よりも成功しているのは、中国民族の言葉や習慣や能力を、英國青年に充分に研究させて、それからその青年を使用したからだそうですが、なかなかそれは他人の出来ぬことです。」

「あれは英人の豪さ<sup>えら</sup>ですね。僕もその点では英國に感心させられておりますが、しかし英國と中國とが馬來半島で仲良く合体していすることは、東洋の平和や秩序を、ヨーロッパのために捧げてやつているようなもので、ヨーロッパにとつては、これほど喜ばしいことはないと思います。ところが、近頃、排英運動が、中國人の間に盛んになつて来たのは、これは排英運動ではなくつて、

実は排支運動をしているのと同様だつたということについては、中国人の誰もが気がつかなかつたことなんですが、錢さんこれをどんな風にお考えになりますか。馬来や暹羅や、印度支那では、昔から今にいたるまで、中国人が經濟的実權を握つているところですから、共産黨の運動が中国人を通じて馬来や暹羅やビルマへ侵入して来つつあるということは、取りもなおさずその土民に対して、その土地の經濟的実權を握つてゐる中国人に反抗せよといつてゐるので、どこも違ひはしないんです。」

「そうそう、それはわたくしたちも考えぬではありません。」と  
錢石山はいうと俄に虚を突かれたかのように狼狽えながら、唇に  
ひつかかつた茶かすをペッと吐き出した。「しかしですな。わた

くしたち中国人は、先ず何より中国の産業を、中国人の手で盛んにしなければなりませんわ。そうでなければお国でも中国でも、銀行は英國の支配からいつまでたつても脱けられませんからな。ところが、そうするためには、どうしたつて今のところ、もう少しはロシア人の手を借りなければ、印度からこちらの東洋の海岸は、ヨーロッパの海岸になつてしまふに定きまっていますよ。」

甲谷は自分のいうべきことを、早や錢に代つていわれたのに気がつくと、一足乗り出すように机の角を撫でていった。

「いや、それは仰おっしゃる通りですが、馬来マレイにいる中国人が、本国の反帝国主義運動に大賛成を現して、資金を盛んに共産運動へ注ぎ込んでいますのは、結果としては、逆に中国人が足もとの土民

に、排支運動の資金を注ぎ込んでいるのと同様だと思うと、まことに私たちは馬来の中国人の度胸に感心させられるんです。馬来やシャムやビルマでは共産運動が盛んになるに従つて、その運動そのものは彼らにとつては国粹運動なんですから、これは衰弱していくためしはありません。けれどもそれとは反対に、この運動が盛んになるに従つて、中国人は馬来や印度支那では生活が衰弱していくより仕方がないのですから、これをふせぐためには、どうしたつて英國やフランス政府と結束していくより仕様があります。ところで、中国人と英國とが馬来で結束していくということは、ヨーロッパ人をして、ますます中国本国や、印度で、彼らの主権を振わすに都合よくなつていくばかりでありますから、馬

来の中国人の性格というものは、これは東洋の安全弁です。」

錢石山はようやく、支那人たちの政略がひそかに攻撃されつづあるのを感じて来たらしく、急がしそうにまた茶を飲みながらいつた。

「しかし、中国人が馬来や印度支那やフイリッピンで経済的実権を握っているということは、何もそれは不都合極ることじやありませんからな。これは歴史的なこととして、フイリッピンも馬来もビルマも、もとはといえ巴中国への貢国です。そのつまり属国で中国人が生活的に向上したつて、ヨーロッパ人のように無理をしているんじやありませんよ。」

甲谷はようやく錢石山が支那人の誇りを感じる 定 石 へ落ち

じょうせき

込んだのを知ると、よしツと思つて、静にメスを取り上げた。

「いや、それは無理どころじやありませんよ。中国人がいなければ南洋群島一帯は勿論もちろん、フィリッピンにしたつてアメリカにしたつて、シベリアにしたつて、アフリカにしたつて濠洲にしたつて、文化の進歩がよほど今より遅れていたに定きまっています。それらの土地の鉄道敷設や採鉱や農業に、中国人が他の人種に先だつて、どれほど活動したかというようなことは、今は誰も忘れてしまつて恩恵を感じなくなつておりますが、世の中の識者は、世界はたしかに中国人を中心にして廻転しているということぐらいは知っていますよ。しかし、それだからこそ、また世界は共同に中國人を敵に廻して争つていかなければならぬのだと思ひますね。

何しろ、中国人は世界で一番人数が多いのですから。人数が多いということは、食物と衣服がそれだけ地上で一番沢山そのもののために費されるということです。食物と衣服を一番費消する人種といいうものは、どうしたつて世界の中心にならねばならぬのは必  
条 つじょう です。したがつて、銀行を支配しているイギリスやアメリカが、世界の者からいくらか公敵のように思われているのと同様に、頭数を支配している中国も各国の公敵だと思われたつて、それは昂然として受け入れねばならぬ中国人の債務です。」

錢石山は甲谷の雄弁が、中国に対する新しい解釈に向つて鋭くなると、脊中の瘤に押されるかのように身を乗り出して、甲谷の顔に見入つていた。

甲谷は錢石山の視線が、自身の話にようやく流れ込んで来たのを感じると、ますます乗り気になつて、八仙卓の彫刻の唐獅子の頭髪に、指頭の脂肪を擦り込みながら、ふと傍のお柳の顔を見た。すると、お柳は、西瓜の種子たねの皮を床の上へ吐き出しながら、

「何を馬鹿なことを饒舌しゃべ<sup>ふる</sup>つっているの。」というように、厚い鼻翼をぴこぴこ慄わせて嘲弄した。甲谷は、はツと冷たくなると、お柳を蹴飛ばすように、逆にお柳に向つていった。

「僕は奥さん、あなたの御主人に材木を買つていただきたくつてやつて來たのですが、もうそんなどころじやありませんよ。あなたの御主人ほど僕の研究の趣意をよく汲んで下すつた中国の人はまだありませんね。實際、馬来にいる中国人と英人と日本人との

三つの混合は、これから起つて来るこの上海の騒動と一番関係が深いですからな。僕たちはもうこれからは、今までみたいに安閑としていられないに定きまつていますが、錢さんは一番それをよく御存知です。」

「だつて、あたしにはそんなこと、どうだつてかまやしないわ。だつて、そんなことなんか考えたつて、どうしようもないんですもの。」

甲谷はお柳から鈍重に蹴けか返えされると、ふとまた浴場の場合と同様に、芳秋蘭の姿が浮んで来た。彼は錢石山に視線を移すとまたいった。

「錢さん。僕は先日、芳秋蘭という婦人を舞踏場でちらりと見ま

したが、あの婦人は僕の友人のアジヤ主義者の話によりますと、共産党の女闘士だそうじやありませんか。」

「そうそう、そういう女もおりました。わたしも一、二度ちよつと逢つたことがありましたが。随分あれは変つてゐる女ですな。」

「僕はあの婦人をもう一度見たいと思つていますが、シンガポールの林推遷りんすいせんにしましても、黄仲涵こうちゅうかんにしましても、きっとこの頃の騒ぎには資金をあの婦人連中に送つてゐるにちがいないと思ひますね。何しろ、南洋中国人から毎年本国への送金は、一億万元を欠かさないというのですから、そのうちの十分の一は、少くとも共産党の運動資金に使われてゐると、英國銀行が睨むのだから当然前です。錢さんなども、やはり芳秋蘭一派には、幾らか

は御賛成の方じやないんですか。」

「いや、わたくしはもうどちらへも賛成しないことにしとるので。  
ただわたくしはもう親日が何よりだと主張しているものだから、  
この頃はうかうかしてると危うございましてな。しかし、シンガ  
ポールの方も、送金機関を外人に握らしていたりしては、馬来の  
中国人も本国政府を励ましてやりたくなるのは、これやもつとも  
なことですよ。」

意外なときに意外なところで逃げ口を見つけ出した錢石山の巧  
妙さには、このとき甲谷もぼんやりせずにはおれぬのであつた。  
しかし、甲谷はすぐまたいった。

「そうです。しかし、中国政府の実力を奪回しようとして、近頃

のよう白人に反抗する中国人の反帝国主義運動が盛んになればなるほど、一方また中国人に経済的実権を握られている殖民地でも、土民が下から中国人に反抗しつつ頭を上げてしているのですから、結局は同じことになるのでしよう。ただ一番問題なのは、各国にもつとも豊富な生活の原料を与えねばならぬ南洋やその他の熱帯国では、白人が生活するに適當でなくて、中国人が適しているという生理的条件です。これは白人種の一番恐るべき条件ですが、しかし、それもこの頃では、文化的な設備如何によつて身体には何らの危険もないということが証明せられて来つつあるそうですから、これも問題となるのはここしばらくのことでしょう。そうしますと、後には混血の問題だけが残つて来ます。しかしこの難

問だけは、いかにヨーロッパ人といえども、どうすることも出来ないでしよう。」

甲谷はいつの間にか自身が中国人と同じ黄色人であるという意識のために、共同の標的をヨーロッパ人に廻して快活になろうとしている自分を感じた。するとお柳は唇のまわりを唾でぎらぎら光らして、ますます強く西瓜の種子を噛み砕きながら、

「まあ、いつまできざつたらしいことをいうんだろう。」と/or ように、にがにがしく横を向いた。

甲谷は明らかにお柳の馬鹿にし出した態度を見ると、一層彼女を腹立たせてやることが愉快になつた。彼は先ず悠々と構え直すと、「この毒婦め。もつと聞け。」というように、につこり微笑

を浮べて錢石山にいつた。

「南洋やその他の一般の土地では、白色人と黒色人との混血が、白色人にはならず黒色人を生んで、黄色人と黒色人との混血が、黒色人にはならずに黄色人になるというので、黒色の土人は白人よりも黄人と好んで結婚する風がだんだん増えて来ましたが、この現象はつまりこれからますます増加していく人種は白色人でもなく、黒色人でもなく、われわれ黄色人だということを証明しているわけで、したがつて、世界の実行力の中心点は黄色人種にあるということになるのですが、こういう現象が今日のようにならまではつきりとして来ますと、白人と黄人との対立が観念の上で、一層濃厚になつて来ますから、世界の次の大戦争はもう経済戦争

ではなくなります。人種戦争です。そうしますと、支那と日本が、今日のようにがみがみやつていたりしましては、ますます良い汁ばかりを吸つていくのは白人で、印度はその間に挟まつて、いつまで立つても起き上れないにちがいありません。その何より印度を苦しめている安全弁は、事実上、シンガポールを中心として生

活している馬来半島の中国人です。」  
マレイ

錢石山はお柳が二人の話にだんだん興味を無くし始めたのを感じたのであろう。甲谷の話を振払うように、左右を見たり、空虚のお茶をすすつたりしながら早口にいつた。

「あなたのお説はなかなか進歩したお考えだとわたくしは思いますが、しかし中国はやはり大国であります、日清戦争のあつた

ということなどは知らないものの方が多いのですから、こういう大国というものは、中心がどこにあるか分りませんが、周囲の国を鎮静させるだけでもまあ立派なものでございましょう。それにまあ、当分はあちらやこちらにお愛想をいつたり、気持ちを柔らげるために笑つてみたりしていなければ、こせこせして血眼になつている世界というものは、物静に廻つていくものではございませんわ。つまり、中国人の一番好きなことはまあまあ、どなたもお静になすつては、というような妥協が何より好きなのですから、事は何事でもいつでも穩便に納まってしまいます。妥協が好きだということは、歴史が古うて文明が非常に進歩してしまった国でなければ、尊敬せられませんが、中国人は妥協の美德を一番

どこの国の人間よりも心得ておりますからな。この点だけは、中国人は大いに威張れるわけでござりますよ。」

甲谷も錢石山のこの虚無にも等しい寛仁大度な狡猾さには、もう今は手の出しようもないのであった。彼はにやにや無意味に笑いながら、

「いや、それは優れたお話だと思います。そういわれれば、中国で一番深い思想の老子も、あれはつまり自然に対する妥協の哲理を説いたものだと思いますが、あらゆる美德の源は妥協に始まって妥協に終るなどという秀抜な考え方などは、法則ばかりにかじりついているヨーロッパ人には、とても分りっこないと思いますね。ことに何んでも白色文明ばかり憧れているこの頃の日本人や

中国人には、なかなか難解な思想だと思いますよ。」

すると、甲谷がそこまで話したとき、突然錢石山は八仙卓の片端を握つたままぶるぶると慄え出した。お柳は主人の後から立ち上ると、傴僂を抱いて寝台の上へ連れていった。

「一寸しばらく、御免なされ。時間がやつて来ましてな。」

主人は甲谷に会釈しながら横になると、お柳の与えた煙管きせるくわを喰くわえて眼を細めた。彼の唇が魚のように動き出すと、阿片がじーじー鳴り始めた。お柳は甲谷の方を振り返つていった。

「あなたはいかが。」

「いや、僕は駄目です。どうぞ奥さんは御遠慮なく。」

お柳は主人の傍で煙管の口から焼き始めた。甲谷はふと彼ら二

人は自分の視線を楽しむために、この楼上へ呼び出したにちがいないと判断した。すると、俄に腹<sup>にわか</sup>が立ち始めた。——彼は今まで真面目に饒舌<sup>しゃべ</sup>つていた自分の顔に、急に哀れを感じずにはいられなかつた。間もなく、二人は甲谷の前で、恍惚とした虫のように眼を細めた。お柳の豊かな髪が青貝をちり嵌めた螺鈿<sup>らでん</sup>の阿片盆へ、崩れ返つた。樞僕の鼻が並んだ琥珀<sup>こはく</sup>や漢玉<sup>かんぎょく</sup>の隙間で、ゆるやかに呼吸をしながら拡がつた。

「月明の良夜、懃懃に接す。」

甲谷の頭の中で、対子<sup>トイズ</sup>の詩文が生き生きとして来るにしたがつて、二人の身体はだんだん礼節を失つた。やがて、甲谷は、お柳との無錢の逸楽に耽<sup>ふけ</sup>つた代償を完全に支払わ正在する自身に気

付かねばならなかつた。

## 二九

お杉は朝起きると、二階の欄干に肱ひじをついて、下の裏通りののどかな賑わいをぼんやりと眺めていた。堀割の橋の上では、花のついた菜つ葉をさげた支那娘が、これもお杉のように、じつと橋の欄干から水の上を眺めていた。その娘の裾の傍でいつもの靴直しが、もう地べたに坐つたまま、靴の裏に歯をあてて食いつくようになぎゅうぎゅう抜いていた。その前を、脊中こいいっぱいに胡こ弓きゆうを脊負つて売り歩く男や、朝帰りの水兵や、車に揺られて行

く妊婦や、よちよち赤子のように歩く纏足の婦人などが往つたり来たりした。しかし、橋の下の水面では、橋の上を通る人々が逆さまに映つて動いていくだけで、凹んだ罐や、虫けらや、ぶくぶく浮き上の真黒なあぶくや、果実の皮などに取り巻かれたまま、蘇州からでも昨夜下つて来たのであろう、割木を積んだ小舟が一艘、べつたり泥水の上にへばりついて停つてゐるだけであつた。

お杉はその小舟の中で老婆がひとり縫物をしてゐるのを見ると、急に日本にいた自分の母親のことを思い出した。お杉の母親は、まだお杉が幼い日のころ、彼女ひとりを残しておいて首を縊つて死んだのだ。お杉はそれからの自分が、どうしてこの上海まで流れて來たか、今は彼女の記憶も曖昧おぼろであつた。だが、親戚の者の

いつたところを考え合せると、父は陸軍大佐で、演習中に突然亡くなり、母一人の手でお杉が養われていたところ、或る日、恩給局からお杉の母へ下つていた今までの恩給は、不正当であつたら、その日まで下つた全部の恩給額を返却すべしという命令を受けとつたのだ。勿論、お杉の母にとつてその長い年月の間貰つていた恩給を返すことは、不可能なばかりではなかつた。これからだつて、恩給なくして生活することは出来ないのは分つていた。そのため、彼女の母は悲しみのあまり、自分の手で生命を絶つてしまつたのにちがいなかつた。

「何も知らないものにお金をくれて、それをまた返せなんて、ああ、口惜しい。」

お杉は母の不幸の日のことが、つい前日のことのように思われると、のどかな朝の空気が、一瞬の間、ぴたりと音響をとめて冷たく身に迫つた。

お杉は自然に涙の流れて来るのを感じると、自分がこんなになつたのも、誰のためだと問いつめぬばかりに、さもふてぶてしそうに懐ふところで手をしたまま、じつと小舟の中の老婆の姿を眺め続けた。

しかし、間もなく、老婆の背後の草の生えた煉瓦塀の上から、泥溝どろどぶの中へ塵埃ごみがぱッと投げ込まれると、もうお杉の頭からは、たちまち忽ち母親の姿は消えてしまつて夜ごとに変る客たちの顔が、次から次へと浮んで來た。すると、お杉は、泥溝の水面で静かにきり

きりといつまでも廻つてゐる一本の藁屑わらくずを眺めながら、誰か親切な客でも選んで、一度日本へ帰つてみようかとふと思つた。もう彼女には日本の様子が、今はほとんど何も分らなかつた。記憶に浮かんでは来るものは、長々と立派な線を引いた城の石垣や、松の枝に鳴つてゐる風や、時雨しぐれの寒そうに降る村々の屋根の厚みや、山茶花さざんかの下で、咽喉のどを心細げに鳴らしてゐる鶏や、それから、人の顔のように、いつもぽつりと町角に立つていた黒いポストやが、ちらちらとそれもどこで見たとも分らぬ風景ばかりが浮かんできつた。

しかし、今自分のこうして眺めている支那の街の風景は、日本とは違つて、何んとのんびりしたものであらう。朝から人は働き

もせず、自分と同様、欄干からぼんやり泥溝の水の上を見ているのだ。水の上では、朝日がちらちら水影を橋の脚にもつらせていた。縮れた竿の影や、崩れかけた煉瓦のさかさまに映つて泡の中<sup>あくた</sup>で、芥や藁屑<sup>かい</sup>が船の櫂<sup>かい</sup>にひつかつたまま、じつと腐るようにとまつていた。誰が捨てたとも分らぬ菖蒲の花が、黄色い雛鳥の死骸や、布切れなどの中から、まだ生き生きと紫の花弁を開いていた。

お杉はそうしてしばらく、あれやこれやと物思いにふけつているうちに、今日は少し早い目から、客を捜しに街へ出ようと思つた。それに、一度何より日本の鰯<sup>ぶり</sup>が食べてみたい。

——そうだ、今日はこれから市<sup>マーケット</sup>場へ行こう。——

そう思うと、急にお杉は元気が出た。彼女は顔を洗つてから化粧をし、どこかの良家の女中のような風をして、籠を下げて買物に市場へいった。

市場はもう午前十時に近づいていたが、数町四方に拡がつてゐる三階建の大コンクリートの中は、まだまだひつくり返るような賑いであつた。花を売る一角は満開の花で溢れた庭園のようであつた。魚を売る一角は、水をかい出した池の底のようなものであつた。お杉は鰐たらや鱈ますの乾物で詰つた壁の中を通りぬけ、卵ばかり積み上つた山の間を通り、ひきち切つて來たばかりの野菜が、まだ匂いを立てて連つている下をくぐりぬけると、思わずはツとしてそこに立ち停つた。

彼女は前方に群がつてゐるスツポンの大槽の傍で、甲谷とお柳の姿を見たのである。お杉は二人から見つけられない前に、こそと人の背後へ隠れた。それからのお杉はもう買物どころではなくなつた。お杉は下つてゐる蓮根や、砂糖黍の間をすり抜けて、甲谷とお柳の眼から逃げながらも、しかし、どうして自分はこんなに二人から逃げねばならぬのかと考えた。悪いのは向う二人ではないか。自分は今こそ街の慰み物になつてゐる女だとはいえ、こんなにしたのは、そんなら誰だ。誰だ。――

お杉は雑踏した人の中で、口惜しさがぎりぎり湧き上つて来る

と、思いきつて二人の前へ、こちらからぬつと逆に現わされてやろうかと思つた。そうしたなら、どんなに向うの二人は狼狽うろたえるこ

とだろう。その二人の顔を見てやりたい。いつそ、それならそうしよう。――

お杉はまた勇気を出して、人波のなかを二人の方へ進んでいた。しかし、お杉の来ているのを知らない二人も、お杉につれて、たこ章魚や、ひじい緋鯉や、あんこう鮟鱇や、ぼら鰈の満ちている槽を覗き覗き、だんだん花屋の方へ廻つていった。お杉は二人を見失うまいと骨折つて、人々の肩に突きあたつたり、つまづ躊躇いたりしながら、ようやく甲谷の後まで追つて来た。

しかし、さて二人と顔を合せてどうするつもりであろうとお杉は思つた。何も今さらいうこともなければ、腹立しさをぶちまけて二人を思う存分殴りつけてやるわけにもいかぬのであつた。

殊に、二人が自分を見て、ひやりとでもしてくれたら、まだ幾分腹立たしさも納まるにちがいない。しかし、もしかしたら、二人がかりで、今度は逆にひやかして来ないとも限らぬと思うと、何よりお杉は、そのときの二人のにやにやしながら自分の胸を見る顔が、気味悪くなつて来た。

それでも、お杉はしばらく、二人の後をつけ狙うように歩きながら、甲谷の肩の肉つきや、ズボンの延びを眺めていた。

すると、ふと、彼女は参木の家で、夜中、不意に貞操を奪われたあの夜の夢を思い出した。あのときは、頭を上げて迫つて来る白い波や、子供の群れや、魚の群が、入れ変り立ち変り彼女を追つて来て眼を醒さました。だが、あの夜の男は、あれは参木であろう

か、甲谷だろうか。もしあの男が甲谷なら、——ああ、あの肩だ、あの胴だ。それに今はお柳と一緒に並びながら、自分の前でこうして肩を押しつけ合っているではないか。

お杉は袖口で口を<sup>おさ</sup>えて、じつと甲谷を睨みながら、しばらく二人の後を追つていった。しかし、いつまで自分はこうして二人の後を追つていくつもりであろう。いつまで追つたって同じではないか。いずれ追うなら甲谷のように。——そうだ。甲谷もこれからお柳にうまく食い入つて、自分が客から金を取るように、定めてお柳から巧みに金を捲き上げているのである。それなら、自分も甲谷のように、今から客でも狙う方が、どんなに稼ぎになるだろう。

——お杉はやがてそうしてだんだんと里心が起つて来ると、また二人から放れて市場の外へ出ていった。彼女は黄包車（ワングボウツ）に乗つて大通りまで来ると、車を降りてなるたけ外人の通りそうなペーヴメントの上を、ゆるりゆるりと腰を動かしながら、ときどき、視線を擦違う男の面に投げかけ投げかけ、橋の袂（たもと）の公園の方へ歩いていった。

しかし、行きすぎるもののうちで、昼間からお杉に視線をくれるようなものは誰もなかつた。ときたまあれば、肉屋の大きな俎の向うの、庖丁を手にした番頭の光つた眼か、足を道の上へ投げ出したまま、恐そうに阿片をひねつてゐる小僧か、お辞儀ばかりしている乞食ぐらいの眼であつた。

お杉は橋の袂まで来た。そこの公園の中では、いつものように各国人の売春婦たちが、甲羅を乾しに巣の中から出て来ていて、じつと静かにものもいわず、塊かたまつたまま陽を浴びて沈んでいた。お杉もその塊りの中へ交ると、ベンチに腰かけて、霧雨のように絶えず降つて来るプラターンの花を肩の上にとまらせつつ、ちよろちよろ昇つては裂けて散る噴水の丸を、みなと一緒にぼんやりと眺めていた。すると、女たちの黙つた顔の前で、微風が方向を変えるたびに、噴水から虹がひとり立ち昇つては消え、立ち昇つては消えて、勝手に華やかな騒ぎをいつまでも繰り返していくのだった。

## 三〇

宮子の踊る踊場では、宮子を囲む外人たちが邦人紡績会社の罷業について語っていた。宮子はひと踊りして来ると、早や酔いの廻り始めた彼らのテーブルに寄りながら、独逸人のファイルゼルという男の話に耳を傾けた。彼は不手際な英語でつかえながらいつた。

「今度の罷業はたしかに工場の方がいけませんよ。彼らは支那工人を軽蔑するからです。いつたい軽蔑されて腹の立たんのは、昔から軽蔑する方だけなんですからね。第一日本人にとつても、外人を尊敬しないような人物を海外に送り出して、それでわれわれ

の販売力を独占しようとすることからして、損失の第一歩だ。これでは日本本国からの輸出品と、こちらの日本会社の製品とが衝突するだけじやすみやしません。支那の工業界を刺戟しげきして、日本製品を追放する能力だけ培養していくにちがいないんですからね。お蔭で幸福を感じるのは僕たちですが、いやわれわれはミス・宮子のために、諸君と共に悲しみます。」

「どうして、あなたたちが幸福ですの。」と宮子は顎をあげていつた。

「君は僕の独逸人だということをまだ知らんのかな。僕らは戦前まで東洋に大きな販売市場を持つていたのですぞ。ところが、そいつをふんだくつたのは各国だ。われわれは各国の貨物が支那

から排斥せられるということに有頂天になるのは、これや当り前さ。」

「だつて、それは日本だけが悪いんじやないわ。お国だつて悪いのよ。」

「そう、それは独逸だつて充分に後悔しなきやいけませんよ。僕はアメリカだが独逸の超人的な勢力は、もうわれわれの会社まで圧迫しつつあるんですからな。」と三人へだてた遠くから、美男のアメリカ人のクリーバーが顔を上げた。

ファイルゼルの眼鏡は、急にクリーバーの方へ向つて光り出した。「失礼ですが、あなたたちはどちらの会社に御関係でいらっしゃいます。」とファイルゼルは訊ねた。

「僕はゼネラル・エレクトリック・コンパニーのハロルド・クリーバーという社員ですが、あなたの方は?」

「いや、これはこれは。僕はアルゲマイネ・エレクトリチテート・ゲゼルシャフトの支店詰のヘルマン・ファイルゼルというものです。どうもこれは、はなはまだ心外な所で乗り合せたものですね。宮子嬢、これはわれわれの強敵のジー・イーだ。何あんだ、左様か。」

……

ファイルゼルは手を出しながら立ち上つたが、ひよろひよろするとまた坐つた。すると、クリーバーが向うから立つて来て、二人は握手をした。ファイルゼルはボーキにいつた。

「おい、シャンパン。シャンパン。」

「なんだかややこしくなつたわね、あなた方が敵同士の会社なら、あたしこれからどちらへ味方したらいいのかしら。」と宮子はいった。

「それや勿論、あなたは、ジー・イーさ。」

クリーバーの言葉をおさえるように、ファイルゼルは反対した。

「いや、それや、是非とも僕の方でなくちやいけないよ。僕たち独逸人にあなたが反対すれば、第一、賠償金が返りませんぜ。勿論、アメリカへだつて返しやしませんよ。今の所、われわれだけは何をしたつてよろしい。大戦に負けた慈善が、こういう所で実るのでさ。」

すると、クリーバーは飲みかけたカクテルを下に置いて、フィ

ルゼルにもたれかかりながら、

「僕はあなたの仰おつしや言るように、充分独逸へは同情を感じますさ。しかしだね、だからといって、あなたの会社のアー・エー・ゲーには同情しやしませんよ。あなたの会社のこの頃のシンジケートの発展は、寧ろ憎むべき存在だよ。」

「いや、それはなかなかもつて恐縮ですな。だけども、実はそれやわれわれの方の苦情ですぜ。あなたの方のジー・イーこそ何んだ。マルコニー無電を買収してロツキー・ポイントを占領しただけで納まらずに、フェデラル無電会社を支配して、支那全土への放送権まで握ろうとしてるじゃないですか、え？」

すると、クリーバーは苦笑しながらウイスキイをぐつといつぱ

い飲み込んだ。

「いや、なかなか、あなたの方の精細な御調査には満足を感じますよ。が、しかしだ。それは何かの間違いだと一層結構だと思いますね。よろしいか、われわれのフェデラル無電は、今は日本の三井に支那放送権を奪われているのですぜ。もつとも、こう申し上げるのは、何もあなたがアー・エー・ゲー・シンジケートの強力なことを羨望するわけじやないですが、とにかく、近來のアー・エー・ゲーの進出振りのお盛んなことは、敵ながら天晴れだと思いますよ。リンク・ホフマン工場とは株式を交換し、ラウンハンマー会社との合同出資は勿論、ライン・メタル工場を併合した上、アー・エー・ゲー・リンク・ホフマン・コンチエルンを造つ

たのは、流石<sup>さすが</sup>独逸人だと感動させられているんですね、しかし、われわれはお互に、もうどちらも第二の世界大戦だけは、僨約しようじやありませんか、僨約を。僨約はこれや何といつても、君、美德だからね。しかと分つたか。」

宮子はもたれかかつて来る二人の大きな脇の下から擦り抜けると、立ち上つて髪を搔き上げた。

「もう沢山。シャンパンが来ましてよ。この上あたしたち、ドイツとアメリカのシンジケートで攻められちや、踊ることも出来やしないわ。」

「そう、そう、われわれは、闘いよりも踊るべしだよ。」

クリーバーは抜かれたシャンパンを高く上げるといった。

「われらの敵、アルゲマイネ・エレクトリチテート・ゲゼルシャフトの隆盛のために。」

ファイルゼルはふらふらして立ち上つた。

「われわれの尊敬の的、ゼネラル・エレクトリック・コンパニー万歳。」

しかし、ふとその拍子に、彼は頭の上の電球を仰ぐと、しばらくぼんやりしていてから、突然眼をむいて大きな声で叫び出した。

「これは、俺の会社の電球だ。万歳、万歳、ばんざあい。」

クリーバーは彼と同様に天井を仰いでみた。が、忽ち、上げているファイルゼルの手を引き降ろした。

「へへえ、これはすまぬが、ジー・イーだよ。おれんところの会

社の電球だ。ゼネラル・エレクトリック・コンパニー、万歳、万歳、万歳。」

「いや、これはアー・エー・geeだ。見ろ、エミール・ラテナウの白熱球だ、万歳。」

「いや違うよ、これやの——」

「まあ、馬鹿馬鹿しい。これは、日本のマツダ・ランプよ。」と

宮子はいった。

二人は上げかけた両手をそのままに、ぽかんとして天井を見つめたまま黙つてしまつた。すると、クリーバーは急に子供のように叫び出した。

「そうだ。こりや三井のマツダだ。われわれゼネラル・エレクト

リツク・コンパニー、マツダ・ランプ、万歳。」

彼は宮子の胴を渾<sup>さらわ</sup>うようにひつかかると、折から廻り出した踊りの環の中へ「失敬、失敬。」と片手を軽く上げながら流れていった。傾くファイルゼルの手からシャンパンが滴<sup>しだた</sup>つた。彼は遠ざかっていく宮子の方へ延び出しながら、ぶつぶつといった。

「ふむ、日本の代理店ならアー・エー・ゲーだつてあらア。大倉コンパニーを知らねえか。大倉コンパニーは、ロンドンで、ondonでちゃんと調印したんだぞ。」

しかし、そのとき宮子の視線はさきから棕櫚<sup>しゆろ</sup>の陰で沈んでいた参木の顔を見つけると、俄にクリーバーの肩の上で動搖した。

踊りがすむと、宮子は参木の傍へ近よつて来て腰を降ろした。

「あなた、どうしてこんな所へいらしつたの。お帰りなさいな。  
ここはあなたなんかのいらつしやる所じやなくつてよ。」

「そこを、どきなさい。」と参木はいった。

「だつて、ここをどいたら、あたしの恋人の顔が見られるわよ。」

「僕はさきからあの女を見てたんだが、あの人は何んていう。」

「誰れ、ああ、容子さん。刺されてよ。危いからこっちを向いて  
らつしやいな。あの人はあたしのように、開けてやしないわよ。」

「もう黙つて向うへいってくれよ。今夜は考えごとをしてるんだ  
から。」

宮子は椅子から足をぶらぶらさせながら煙草をとった。

「だつて、あたしだつて、ここにいたいんだわ。もうしばらくこ

こにこうしていさせてちようだい。」

「もうすぐここへ甲谷がやつて来るんだが、そしたらまたここへ  
おいでなさい。あの男と君が結婚するまでは、君とは、話したく  
ないよ。」

宮子は火のついた煙草の先で、花瓶の花を焼きながら、微笑し  
た。

「まあ、御苦労なことね。あたしはあなたと結婚するまでは、甲  
谷さんは話さないことにしているんだから、どうぞ、甲谷さん  
には、あなたからよろしく仰おっしゃ言つといて。」

「僕は冗談を聞きに来たんじゃないですよ。僕は今夜は、もう良  
い加減に一つ良いことをしどこうと思つて來たんだから、僕のい

うことも聞いといてくれ給え。その方が君だつて、いいに定つて  
るじやないか。」

「あたしは甲谷さんとは、死んだつていやなんですからね、あなたにくれぐれもお願ひするわよ。あたし、の方と結婚して、シンガポールなんかへいつたつて、色が真黒になるだけだわ。」

「それじや、甲谷と君とはもう駄目なんですか。」参木の眼からもう笑いが消えてうす冷い光りが流れた。

「ええ、もうそれは初めつからだわ。あたし、甲谷さんの好きな所は、御自分の英語の間違いも御存知にならない所だけよ。あれならきつと奥さんにおなりになる方だつて、お幸にちがいないわ

。」

参木は宮子の皮肉が不快になると横を見た。並んだ踊子たちの膝の上を、一握りのチョコレートが華やかな騒ぎを立てて辻つていつた。

「あなた、今夜はあたしと踊つてちようだい。あたし、つくづくこの頃、生きてるのがいやになつたの、あたし、どうして踊子なんかになつたのでしょうか。あたし、死ぬ前にあなたと一度、日本の花嫁さんの姿をして結婚がしてみたいわ。それも一度よ。ね、そうしてよ。」

「君ももうすることがなくなつたと見えるね。僕を掴まえてそんなことをいうようじや、それや危いぞ。」

「そう、危いのよ。あたしは自分と同じような顔を見つけると、

恐ろしくて寒けがするの。あなたももうお気をつけてらっしゃらないと、危くてよ。顔に出てるわ。」

参木は急所を刺されたようにますます不快になると眉を顰めた。  
 「もう、向うへいってくれよ。同じ人間が二人もいちや、辻るだけだよ。」

「だつて、もうこうなれば同じことだわ。あなた、おかしくなつたらあたしにいつてね、あたし、いつでもあなたの相手してよ。嘘じやないわ。あたしひとりなら、まだまだぶらぶらしてゐに定まつてゐるわ。だけど、もう、ぶらぶらしたつて、ソセージみたいで、ただ長くなつてゐるだけよ。つまんないつたらありやしない……。」

参木は滲み込んで来る危険な境界線を見るように、宮子の眼を眺めてみた。すると、ふと、彼は競子の顔を思い出した。だが、もう彼女は体の崩れた未亡人だ。彼は秋蘭の顔を思い出した。だが、彼女を見ることは死ぬことと同様だ。いやそれより俺には何の希望の芽があるか。――

「あたし、何んだか、だんだん氷と氷の間へ辺り込んでいくような気がするのよ。これはきっと、あんまり人の身体の間へ挟まつてばかりいるからね。恋愛なんてまるで泥みたいに見えるのよ。」

参木は舐められるように溶けていく自分のうす寒い骨を感じた。  
彼はいった。

「君、もう踊つて来なさい。僕はここで君の踊るのを見てるよ。」

「あなた一度、あたしと踊らない。」

「駄目だ、踊りは。」と参木はぶつきら棒にいった。

「だつて、ただぶらぶら足踏みさえしておればいいんじゃないの。こんな所で上手に踊つたりするのは、きつとどつか馬鹿な人よ。」

「とにかく、何んだつていいよ。ここにいたつてつまらないじやないか。あつちの方が君の嵌り場はまだよ。」

宮子は参木の指差した外人たちの塊かたまりを振り向くと、笑いながら彼の指さきに手を乗せた。

「何アんだ。さきからふんふんしてたの、それか、あたし、そういうのは好きじゃないね。じゃ、さようなら、あちらへ行くわ。ああ、そうそう、あそこに塊かたまつてる外人たちね。あれはあなたが、

こないだ踏んだアルバムの中にいた人たちよ。覚えといて。一番右のがマイスター染料会社のブレーマン、それから、ほら、こちらを向いたでしよう、あれはパーマース・シップのルースさん、その次のはマークアンティル・マリンのバースウイツク、その前のは——なんだか忘れた。その向うのがなかなか資格のある人よ。』

「それより、もうすぐ甲谷が来るよ。』

『だつて、あたし、ほんとに甲谷さんとは、初めから何んでもないのよ。それだけは覚えといて、ね、ね。』と宮子はいうと、英語のバスの渦巻いた会話の中へ、しなしな背中に笑いを波立てながら歩いていった。

## 三一

高重の工場では、暴徒の襲つた夜以来、ほとんど操業は停つてしまつた。しかし、反共産派の工人たちは機械を守護して動かなかつた。彼らは共産派の指令が来ると袋叩きにして河へ投げた。工場の内外では、共産派の宣伝ビラと反共派の宣伝ビラとが、風の中でも闘つっていた。

高重は暴徒の夜から参木の顔を見なかつた。もし参木が無事なら顔だけは見せるにちがいないと思つていた。だが、それも見せぬ。――

高重は工場の中を廻つて見た。運転を休止した機械は昨夜一夜

の南風のために鑄<sup>さ</sup>びついていた。工人たちは黙々とした機械の間で、やがて襲つて来るであろう暴徒の噂のために蒼ざめていた。

彼らは列を作つた機械の間へ虱<sup>しらみ</sup>のように挟まつたまま鑄びを落した。機械を磨く金剛砂が湿気のために、ぼろぼろと紙から落ちた。すると、工人たちは口々にその日本製のやくざなペーパーを罵りながら、静つたベルトの掛けかえを練習した。綿は彼らの周囲で、今は始末のつかぬ吐瀉物<sup>としゃぶつ</sup>のようにながめながら、いたる所に塊つていた。

高重は屋上から工場の周囲を見廻した。駆逐艦から閃めく探海燈が層雲を浮き出しながら廻っていた。黒く続いた炭層の切れ目には、重なつた起重機の群れが刺さつていた。密輸入船の破れた

帆が、真黒な翼のように傾いて登つていった。そのとき、炭層の表面で、檻樓ぼろの群れが這いながら、滲み出るようく黒々と拡がり出した。探海燈がそれらの脊中の上を疾走すると、檻樓の波は扁平に、べたりと炭層へへばりついた。

来たぞ、と高重は思った。彼は脊を低めて階下へ降りようとした。すると、倉庫の間から、声を潜めて馳けている黒い一団が、発電所のガラスの中へ這つていった。それは逞しい兇器のように急所を狙つて進行している恐るべき一団にちがいないのだ。高重はそれらの一団の背後に、芳秋蘭の潜んでいることを頭に描いた。彼はそれらの計画の裏へ廻つて出没したい慾望を感じて來た。彼らは何を欲しているのか。ただ今は、工場を占領したいだけなの

だ。——

高重は電鈴のボタンを押した。すると、見渡す全工場は真黒になつた。喚声が内外二ヶ所の門の傍から湧き起つた。石炭が工場を狙つて飛び始めた。探海燈の光<sup>こうぼう</sup>鉈<sup>ばつ</sup><sub>だ</sub>が廻つて来ると、柵<sup>さ</sup>を攀<sup>よ</sup>じ登つている群衆の背中が、蟻<sup>あり</sup>のように浮き上つた。

高重は彼らを工場内に引入れることの寧ろ得策であることを考えた。這入れば袋の鼠と同様である。外から逆に彼らを閉塞すればそれで良いのだ。もし彼らが機械を破壊するなら、損失はやがて彼らの上にも廻るだろう。——彼は階段を降りていった。すると、早や場内へ雪崩<sup>なだ</sup>れて来た一団の先頭は、機械を守る一団と衝突を始めていた。彼らは叫びながら、胸を垣のようにつなげて機械

の間を押して來た。場内の工人たちは押し出された。印度人の警官隊は、銃の台尻だいじりを振り上げて押し返した。格闘の群れが連つた機械を浸食しながら、奥へ奥へと進んでいった。すると、予備室の錠前が引きち切られた。場内の一団はその中へ殺到すると、棍棒形のピツキングステッキを奪い取つた。彼らは再びその中から溢れ出すと、手に手に、その鉄の棍棒を振り上げて新しく襲つて來た。

彼らは精紡機の上から、格闘する人の頭の上へ飛び降りた。木管が、投げつけられる人の中を、飛び廻つた。ハンク・メーターガラスの破片が、飛散しながら裸体の肉塊へ突き刺さつた。打ち合うラップボートの音響と叫喚に攻め寄せられて、次第に反共

産派の工人たちは崩れて來た。

高重は電話室へ馳け込むと、工部局の警察隊へ今一隊の増員を要求した。彼は引き返すと、急に消えていた工場内の電燈が明るくなつた。瞬間、はたと混乱した群集は停止した。と、再び、怒濤のような喚声が、湧き上つた。高重はまだ侵入されぬローラ櫓を楯にとつて、頭の上で唸る礫<sup>つぶて</sup>を防ぎながら、警官隊の來たことを報らすために叫んだ。

しかし、それと同時に、周囲の窓ガラスが爆音を立てて崩壊した。すると、その黒々とした巨大な穴の中から、一団の新しい群衆が泡のように噴き上つた。彼らは見る間に機械の上へ飛び上ると、礫や石炭を機械の間へ投げ込んだ。それに続いて、彼らの後

から陸續として飛び上る群衆は、間もなく機械の上で盛り上つた。彼らは破壊する目的物がなくなると、社員目がけて雪崩なだれて來た。反共派の工人たちは、この団々と膨脹して来る群衆の勢力に巻き込まれた。彼らは群衆と一つになると、新しく群衆の勢力に変りながら、逆に社員を襲い出した。社員は今はいかなる抵抗も無駄であつた。彼らは印度人の警官隊と一団になりながら、群衆に追いつめられて庭へ出た。すると、行手の西方の門から、また一団の工人の群れが襲つて來た。彼らの押し詰つた団塊の肩は、見る間に屏を突き崩した。と、その倒れた屏の背後から、兇器を振り上げた新しい群衆が、忽然として現れた。彼らの怒つた口は鬨ときの声を張り上げながら、社員に向つて肉迫した。腹背に敵を受け

た社員たちはもはや動くことが出来なかつた。今は最後だ、と思つた高重は、仲間と共に拳銃を群衆に差し向けた。彼の引金にかかつた理性の際限が、群集と一緒に、バネのように伸縮した。と、その先端へ、乱れた蓬髪ほうはつの海が、速力を加えて殺到した。同時に、印度人の警官隊から銃が鳴つた。続いて高重たちの一団から、——群集の先端の一角から、叫びが上つた。すると、その一部は翼を折られたようへたばつた。彼らは引き返そうとした。すると後方の押し出す群れと衝突した。彼らは円弧を描いた二つの黒い潮流となつて、高重の眼前で乱動した。方向を失つた脊中の波と顔の波とが、廻り始めた。逃げる頭が塊つた胴の中へ、潜り込んだ。倒れた塀に躡つまづいて人が倒れると、その上に盛り上つて倒れ

た人垣が、しばらく流動する群衆の中で、黒々と停つて動かなかつた。

反共産派の工人たちは、この敗北しかけた共産系の団流を見ると、再び爪牙そうがを現わして彼らの背後から飛びかかつた。転がる人の上を越す足と、起き上る頭とが、同時に再び絡からまつて倒れると這い廻つた。踏まれた蓬髪に傾いた頭が、疾風のように駆ける足先に蹴りつけられた。ラップボートが、投槍のように飛び廻つた。石炭が逃げる群集の背後から投げつけられた。拡大して散る群集の影が倉庫の角度に従つて変りながら、急速に庭の中から消えていった。

工部局の機関銃隊が工場の門前に到着した時は、早や彼らの姿

は一人として見えなかつた。ただ探海燈の光鉈こうぱうが空で廻るたびごとに、血潮が土の上から、薄黒く痣あざのように浮き上つて来るだけだつた。

### 三二一

顔をほつてり熱ほてらせながら山口はトルコ風呂から外へ出た。

彼はこれからお杉の所へいって、夜の十二時までを過して来ようと考えたのだ。しかし、彼は歩いているうちに、長く東京にいたアジヤ主義者の同志、印度人のアムリのいる宝石商の前へ来てしまつた。彼はアムリがいるかどうかと覗いてみた。すると、アム

リは客を送り出して商品台へ戻つたところで、背中を表へ見せたまま支那人の小僧に何事か大声で怒鳴つていた。怒鳴るたびに、アムリの黒い首の皮膚が、真白な堅いカラーに食い込まれて弛みながら揺れ動いた。

山口はここでアムリと話したら、今夜は、お杉に逢うことの出来なくなるのを感じた。しかし、そのときは、早や、彼はアムリに声をかけてすでに近よつてしまつている後であつた。

「おう。」アムリは堂々とした身体を振り向けると、宝石台の厚ガラスに片手をついて、山口と握手をしつつ明瞭な日本語でいつた。

「しばらく。」

「しばらく。」

「ときに、どうも飛んだことになつたじやないか。」と山口はいつて手を放した。

「左様、なかなか込み入つて来ましたね。今度は支那もよほど拡げる見込みらしい。」

「あなたは李英朴に逢いましたか。」

「いや、まだだ。李君に逢おうと思つても行衛ゆくえが不明でね。」ア

ムリは山口に椅子をすすめて対座すると、白い歯並の中から、金歯を一枚強くきらきらと光らせながらいった。「今度の事件はなかなか厄介で困ったね。東洋紡の日本社員は、最初発砲して支那人を殺したのは印度人だと頑強にいつてるが、ああいうことを頑

強にいわれては、われわれもいつまでも黙つちゃいられなくなるからね。」

「しかし、あれはまあ、発砲したのが日本人であろうと印度人であろうと、押しよせて来たのは支那人なんだから、誰だつて発砲しようじやないかね。文句はなかろう。」

「それはそうだが、そうだとしたつて、罪を印度人に負わせる必要はどこにもないさ。」

「しかし、あれは君、検視してみたら弾丸が印度人のと日本人のとが這入つていたというので、何んでも今日あたりから今までの排日が、排英に変つていくそうだ。それなら、君だつて賛成だらう。」

アムリは入口の闇に漂つてゐる淡靄うすもやの中で、次から次へと光つて来る黄包車ワングボウツの車輪を眺めながら、笑つていつた。

「われわれは支那人の排英にはもう賛成しませんね。支那人に出来るのは、排支だけだ。」

「廃止か。」山口はアムリの大きな掌で圧えられてゐるガラス台の下の宝石類を覗き込んだ。「君、これは皆、印度から來たんかね。」

「いや、違う。泥棒からだ。」

「それじや、ひとつ貰つたつて、かまわんね。」

「よろしい。どうぞ。」とアムリはいつて宝石台の戸を開けた。

山口は中につまつてゐる印度製の輝いた麦藁細工の黒象をかきの

けると、お杉にひとつと思つて、アメシストの指環を抜きとつた。

「君、これは贋物じやなかろうね。」

「いや、それは分らぬ。」とアムリはいつた。

「それじや貰つたつて、有難かないじやないか。」

「だから、金五ドルさ。」アムリは掌を山口の方へ差し出した。

「贋物のくせに、君はまだ金をとろうというのかね。」

「それが商売というものだよ。おい、君、五ドル。」

山口は五ドルを出すと、指環を自分の指に嵌めながらいつた。  
は

「今夜からは、わしだけは排印だ。」

「僕をこんなにしたのは、これは英國さ。」

「英國といえば君、この頃の英國はまたなかなかやりよるじやな

いか。君の国の国民会議派も危いね。」

「危い。」とアムリは平然としていった。

「君はどうだ。会議派がもし分裂すればどちらになるんだ。まさか君の御大のジャイランダスまで共産党にくらがえするんじやなかろうね。大丈夫かい。」

「それは分らん。この頃みたいにヤワハラル・ネールが鞍がえすとなると、ジャイランダスだつて、そのままにはいられまい。」  
とアムリはいつた。

「しかし、今頃から鞍がえするなんて、ヤワハラルもあんまり山を張りすぎるじやないか。」

アムリは黙つて戸口の方を眺めたまま答えなかつた。山口は印

度から詳細な通知が、もうこのアムリに来ているにちがいないと  
思つて袖を引いた。

「ヤワハラルの鞍がえは、英國の寿命を五十年延ばしてやつたの  
と同然だよ。君はどう思う。」

「僕もそう思う。」とアムリは答えた。

「それなら、君の敵はまた一つ増えたわけじやないか。」

「増えた。」

「今頃、同志が苦しんで英國と闘っているときに、青年の力を借  
りなければならぬからといって、わざわざ君らを背後から襲うと  
いうのは、分裂している印度を一層分裂させるようなものだ。君  
らは印度を改革しようとするとんじやなくつて、今日からは守備に

つかねばならんのだ。目的が変つて来ている。今度は君らは改革される番じやないか。」

しかし、アムリは前方の靄の中を眺め続けたまま、急激に起つて来たこの祖国の新しい混乱に疲れたかのように、いつまでも黙つていた。

「君、その後の通知はまだ印度から来ないのかね。」

「来ない。」とアムリは答えた。

「それじやよほど今頃は混乱してるんだな。」

「しかし、共産党が印度にも起り出したところで、われわれはその共産党と闘う必要はない。共同の目的はどちらにしたつて英國だ。」

山口はアムリから自國の困憊こんぱいを押し隠そうとしている薄弱な見栄を感じると、ふと、同時に彼も振り向くように、日本に波打ち上っている思想の火の手を感じないではいられなかつた。

「君、印度に共産党が起れば、今まで独立運動に資金を出していた資本家が、英國と結びついてしまうじゃないか。そうしたら、會議派の条件は永久に葬られるより仕様があるまい？」

「それはそうかもしれないが、しかし、支那でも資本家は共産党と結託して排外運動を起しているんだから、印度もそこは、ジヤイランダスとヤワハラルにまかしておくより仕方があるまい。」アムリは時計を仰ぐと、

「おい、店をしまえ。」と大声で小僧にいつた。

「しかし、それにしたつて、印度からこちらの海岸線が、そう無暗に共産化してどうなるんだ。われわれの大アジヤ主義もヨーロッパと戦うことじやなくつて、これじや共産軍と戦うことだ。」「ロシアだ。曲者は。」とアムリはいうと、窓のカーテンを引き降ろした。続いて小僧は表の大戸を音高く引き降ろした。

「この分だと君らのミリタリズムは、当然ロシアと衝突せずにはおられまい。」とアムリはいった。

「ミリタリズムがロシアと衝突すれば、君、印度はどうする？  
これは一番問題だぞ。」と山口は刺し返した。

「そうすれば印度は当然分裂さ。ヤワハラルのこの頃の勢力は、青年の間ではガンジー以上だから大変だよ。」

「そうすると君の大将のジャイランダスはどうなるんだ。」

「ジャイランダスはあくまで英國と闘うさ。問題はまだまだ山のようにある。国防軍の統帥権と、経済上の支配権、印度公債の利權賦与と塩專賣法の否定運動、それに何より政治犯人の控訴権の獲得だ。君、全印国民會議執行委員三百六十名の中、七十六パーセントの二百七十人は現在獄中にいるんだからね。いずれにしたつて、これはこのままじやいられぬさ。牢獄は正義の土でいつぱいだ。もう五年、五年間待ってくれ、やつてみせる。」

アムリは内ポケットから謄写版ですつた用紙を出した。

「これは先日ラホールの同志から来た印度總督攻撃の名文だが、なかなか近頃はない名文だ。——塩税に関して我々のなしたとこ

ろの、げに穩健着実なる提案に対し、総督の採りたる態度は、怪しむべき政府の真情を暴露する。目もくらむばかりのシムラの高原に閑居する全印度の統治者が、平原に住む餓えたる数百万の苦悩を理解し得ざるは、我々にとつてはあたかも日を仰ぐがごとく明瞭である。しか然も彼らは、数百万民衆の不斷の労苦の庇護によつて、シムラの閑居が可能ではないか。」

「君、そりや、共産党の文句じやないか。ラホールももう危いのかい？」と山口はいった。

アムリは用紙から眼を上げると、山口の顔を見ていつた。

「君には何んでも共産党に見えるんだね。そんなに共産党が恐くちや、大アジヤ主義もお終いだよ。」

「まあ、何んでも良いから今夜は出よう。」

「出よう。」

山口は先に表へ出ると、アムリも後から帽子を取つてついて出ていった。

### 三三一

海港からは、拡大する罷業<sup>ひぎょう</sup>につれて急激に棉製品が減少した。対日為替<sup>かわせ</sup>が上り出した。銀貨の価値が落つこちると、金塊相場が続騰した。歐米人の為替ブローカーの馬車の群団は、一層その速力に鞭<sup>むち</sup>をあてて銀行間を馳け廻った。しかし、金塊の奔騰<sup>ほんとう</sup>する

に従つて、海港には銀貨が充満し始めた。すると市場に於ける棉布の購買力が上り出した。外品の払底が続出した。<sup>ニューヨーク</sup>紐育とリバプールと大阪の棉製品が昂騰した。

参木はこの取引部の掲示板に表れた日本内地の好景気の現象に興味を感じた。邦人会社が苦しめられると、逆に大阪が儲け出したのだ。それなら、支那では——支那に於ける参木の邦人紡績会社では、久しく倉庫に溜つた残留品までが飛び始めた。

勿論、この無気味な好況に齊しく恐怖を感じたものは、取引部だけではなかつた。交易所では、俄に買気が停ると、売手がそれに代つて続出した。すると、俄然として棉布が一齊に暴落し始めた。印度人の買占団が横行した。しかし、海港からなおますます

減少する棉製品の補充は、不可能であつた。そうして、罷業紡績会社の損失は、罷業時日と共に、ようやく増進し始めた。然も、操業停止の期間内に於ける賃金支払いの承諾を、工人たちに与えない限り、なお依然として罷業は続けられるにちがいないのだ。

この罷業影響としての棉製品の欠乏から、最も巨利を占めたのは、印度人の買占団と、支那人紡績の一団であつた。支那人紡績は、前から久しく邦人会社に圧迫せられていたのである。彼らは邦人紡績に罷業が勃発すると同時に、休業していた会社さえ、全力を挙げて機械の運転を開始し始めた。罷業職工内の熟練工が続々彼らの工場へ奪られ出した。国貨の提唱が始つた。日貨の排斥

が行われた。そうして、支那人紡績会の集団は、今こそ支那に、初めて資本主義の勃興を企画しなければならぬ機会に遭遇したのだ。彼ら集団は自国の国産を奨励する手段として、彼らの資本の発展が、外資と平行し得るまで、ロシアをその胸中に養わねばならぬ運命に立ちいたつた。な何ぜなら、支那資本はもはやロシアを食用となさざる限り、彼らを圧迫する外国資本の專政から脱出することは、不可能なことにちがいないので。支那では、こうして共産主義の背後から、この時を機会として資本主義が駆け昇らなければならなかつた。

この支那資本家の一団である総商会の一員に、お柳の主人の錢石山が混つていた。彼は日本人紡績会社に罷業が起ると、彼らの

一団と共に策動し始めた。彼らは支那人紡績に資金を増した。排日宣伝業者に費用を与えた。同時に罷業策源部である総工会に秋波を用いることさえ拒まなかつた。そうして、この支那未曾有の大罷業が、どこからともなく押し寄せた風土病のように、その奇怪な翼を刻々に拡げ出したのだ。今や海港には失業者が満ち始めた。無賴の徒が共産党の仮面を冠つて潜入した。秘密結社が活動した。街路の壁や、辻々の電柱や、露路の奥にまで日本人に反抗すべしという宣言單<sup>せんたん</sup>が貼られ始めた。総工会の本部からは、彼らに応ぜしめる電報が、各国在留支那人に向けて飛び始めた。

この騒ぎの中で、高重ら一部の邦人と、工部局属の印度人警官の発砲した弾丸は、数人の支那工人の負傷者を出したのだ。その

中の一人が死ぬと、海港の急進派は一層激しく暴れ出した。彼らは工部局の死体検視所から死体を受けとると、四ヶ所の弾痕がことごとく日本人の発砲した弾痕だと主張し始めた。総工会幹部と罷業工人三百人から成る一団が、棺を担いで、殺人糾明のため工場へ押しかけた。しかし、彼らはその門前で警官隊から追われるを、ようやく棺は罷業本部の總工会に納められた。

高重は自身たちの作つた一つの死体が、次第に海港の中心となつて動き出したのを感じた。支那工人の団結心は、一個の死体のために、ますます鞏<sup>きょうこ</sup>固に塊まり出したのだ。彼はその巧みな彼らの流動を見ていると、それがことごとく芳秋蘭一人の動きであるかのように見えてならぬのであつた。間もなく彼女は数千人の

工人を引きつれて八方に活動するにちがいない。――

しかし、見よ、と彼は思った。

――今に、彼女が活動すればするほど、彼女に引き摺り廻される工人の群れは餓死していくにちがいないのだ。――

総工会に置かれた死亡工人の葬儀は、附近の広場で盛大に行われた。参木の取引部へは、刻々視察隊から電話が来た。

### 三四

襲撃された邦人の噂が 日々 にちにち 市中を流れて來た。邦人の貨物が掠奪されると、焼き捨てられた。支那商人が先を争つて安全な共

同租界へ逃げ込んだ。租界の旅館が満員を続けて溢れて来ると、それに従つて租界の地価と家賃が暴騰した。親日派の支那人は檻に入れられ、獸のように市中を引き摺り廻された。何者とも知れぬ生首なまくびが所々の電柱にひっかけられると、鼻から先に腐つていった。

参木は観察を命ぜられると、時々支那人に扮装して市中を廻つた。彼は芳秋蘭を見たい慾望をおさえることに、だんだん困難を感じて來た。彼は危険区劃に近づくことによつて、急激な疲労を感じると、初めて鼻薬を盛られた鼻のように生き生きと刺激を感じるのであつた。

その日は、参木はいつものようにパーテルで甲谷と逢わねばな

らなかつた。彼の歩く道の上では、夏に近づく蒸気がどんよりと詰つて居た。乞食の櫻樓の群れを、房のように附着させた建物の間から、駆逐艦の鉄の胴体が延び出ていた。無軌道電車が黄包車の群れを追い廻しながら、街角に盛上つた果物の中へ首を突っ込むと、動かなかつた。参木は街を曲つた。すると、その真直ぐに延びた街区の底で、喚く群集が詰りながら旗を立てて流れていた。それは明らかに日本の工場を襲つて追い散らされて來た群衆の一団であつた。彼らの長く延びた先頭は、警察の石の閑門に噛まれていた。

群衆のその長い列は、検束者を奪うために次第に噛まれた頭の方向へ縮りながら押し寄せた。石の閑門は竈の口のように、群衆

をするすると飲み込んだ。と、急に、群衆は吐き出されると、逆に参木の方へ雪崩なだれて來た。関門からは、並んだホースの口から、水が一斉に吹き出したのだ。水に足を掬すくわれた旗持ちが、石の階段から転がり落ちた。ホースの筒口が、街路の人波を掃き洗いながら進んで來た。停車した辺の電車や建物の中から、街路へ人が溢れ出した。警官隊に追われた群衆は、それらの新たな群衆に止められると、更に一段と膨脹した。一人の工人が窓へ飛び上つて叫び出した。

彼は激昂しながら同胞の殺されたことや、圧迫するものが英國官憲に變つて來たことを叫んでいるうちに、突然脳貧血を起して石の上へ卒倒した。群衆はどよめき立つた。宣單が人々の肩の隙

間を、激しい言葉のままで飛び歩いた。幟<sup>のぼり</sup>が群衆の上で振り廻された。続いて一人の工人が建物の窓へ飛び上ると、また同じように英國の官憲を罵り叫んだ。すると、近かづいた官憲が、彼の足を持つて引き摺り降ろした。群衆の先端で濡れていた幟の群れが、官憲の身体に巻きついた。

その勢いに乗じて再び動き始めた群衆は、口々に叫びながら工部局へ向つて殺到した。ホースの筒口から射られる水が、群衆をひき裂くと、八方に吹き倒した。人の波の中から街路の切石が一直線に現れた。<sup>つぶて</sup>礫の渦巻が巡羅官の頭の上で唸り飛んだ。高く並んだ建物の窓々から、河のようなガラスの層が青く輝きながら、墜落した。

もはや群衆は中央部の煽動に完全に乗り上げた。そうして口々に外人を倒せと叫びながら、再び警察へ向つて肉迫した。<sup>はじ</sup>爆ける水の中で、群衆の先端と巡羅とが転がつた。しかし、<sup>たちま</sup>大廈の崩れるように四方から押し寄せた数万の群衆は、<sup>たちま</sup>忽ち格闘する人の群れを押し流した。街区の空間は今や巨大な熱情のために、膨れ上つた。その澎湃<sup>ほうはい</sup>とした群衆の膨脹力はうす黒い街路のガラスを押し潰しながら、関門へと駆け上ろうとした。と、一斉に関門の銃口が、火蓋を切つた。群衆の上を、電流のような数条の戦慄が駆け廻つた。瞬間、声を潜めた群衆の頭は、突如として悲鳴を上げると、両側の壁へ向つて捻じ込んだ。再び壁から跳ね返された。彼らは弾動する激流のように、巻き返しながら、関門めがけて襲

いかかつた。このとき参木は商店の凹んだ入口に押しつめられたまま、水平に高く開いた頭の上の廻転窓より見えなかつた。その窓のガラスには、動乱する群衆が総て逆様に映つていた。それは空を失つた海底のようであつた。無数の頭が肩の下になり、肩が足の下にあつた。彼らは今にも墜落しそうな奇怪な懸垂形の天蓋を描きながら、流れては引き返し、引き返しては廻る海草のように揺れていた。参木はそれらの廻りながら垂れ下つた群衆の中から、芳秋蘭の顔を捜し続けていたのである。すると、彼は銃声を聞きつけた。彼は震動を感じた。彼は跳ね起るよう、地上の群衆の中へ延び上ろうとした。が、ふと彼は、その外界の混乱に浮き上つた自身の重心を軽蔑する気になつた。いつもむらむらと

起る外界との闘争慾が、突然持病のように起り出したのだ。彼は逆に、落ちつきを奪い返す努力に緊張すると、弾丸の飛ぶ速力を見ようとした。彼の前を人波の川が疾走した。川と川との間で、飛沫のように跳ね上った群衆が、衝突した。旗が人波の上へ、倒れかかつた。その旗の布切れが流れる群衆の足にひつかかつたまま、建物の中へ吸い込まれようとした。そのとき、彼は秋蘭の姿をちらりと見た。彼女は旗の傍で、工部局属の支那の羅卒らそつに腕を持たれて引かれていった。しかし、忽ち流れる群衆は、参木の視線を妨害した。彼はその波の中を突き抜けると、建物の傍へ駈け寄つた。秋蘭は巡羅の腕に身をまかせたまま、彼の眼前で静に周囲の動乱を眺めていた。すると、彼女は彼を見た。彼女は笑つた。

彼は胸がごそりと落ち込むように俄に冷たい死を感じた。彼は一  
刀の刃のように躍り上ると、その羅卒の腕の間へ身をぶち当てた。  
彼は倒れた。秋蘭の駆け出す足が——彼は襲いかかった肉塊を蹴  
りつけると跳ね起きた。彼は銃の台尻に突き衝あたつた。が、彼は新  
しく流れて来た群衆の中へ飛び込むと、再びその人波と一緒に流  
れていった。——

それはほどんど鮮かな一閃の断片にすぎなかつた。小銃の反響  
する街区では、群衆の巨大な渦巻きが、分裂しながら、建物と建  
物の間を、交錯する梭ひのように駆けていた。

参木は自身が何をしたかを忘れていた。駆け廻る群衆を眺めな  
がら、彼は秋蘭の笑顔の釘に打ちつけられているのである。彼は

激昂しているように、茫然としている自分を感じた。同時に彼は自身の無感動な胸の中の洞穴を意識した。——遠くの窓からガラスがちらちら滝のように落ちていた。彼は足元で弾丸を拾う乞食の頭を跨<sup>また</sup>いた。すると、彼は初めて、現実が視野の中で、強烈な活動を続けているのを感じ出した。しかし、依然として襲う淵のような空虚さが、ますます明瞭に彼の心を沈めていった。彼はもはや、為すべき自身の何事もないのを感じた。彼は一切が馬鹿げた踊りのように見え始めて來るのであつた。すると、幾度となく襲つては退いた死への魅力が、煌めくように彼の胸へ満ちて來た。彼はうろうろ周囲を見廻していると、死人の靴を奪つていた乞食が、ホースの水に眼を打たれて飛び上つた。参木は銅貨を掴んで

遠くの死骸の上へ投げつけた。乞食は敏捷な**鼬**<sup>いたち</sup>のように、ぴよんぴよん死骸や負傷者を飛び越えながら、散らばつた銅貨の上を這い廻つた。参木は死と戯れている二人の距離を眼で計つた。彼は外界に抵抗している自身の力に朗らかな勝利を感じた。同時に、彼は死が錐<sup>きり</sup>のような鋭さをもつて迫めよるのを皮膚に感じると、再び銅貨を掴んで滅茶苦茶に投げ続けた。乞食は彼との距離を半径にして死体の中を廻り出した。彼は拡がる彼の意志の円周を、動乱する街路の底から感じた。すると、初めて未経験なすさまじい快感にしごれて來た。彼は今は自身の最後の瞬間へと辺り込みつつある速力を感じた。彼は眩惑する円光の中で、次第にきりきり舞い上る透明な戦慄に打たれながら、にやにや笑い出した。す

ると、不意に彼の身体は、後ろの群衆の中へ引き摺られた。彼は振り返った。

「ああ。」と彼は叫んだ。

彼は秋蘭の腕に引き摺られていたのである。

「さア、早くお逃げになつて。」

参木は秋蘭の後に従つて駆け出した。彼女は建物の中へ彼を導くと、エレベーターで五階まで駆け昇つた。二人はボーアに示された一室へ這入つた。秋蘭は彼をかかると、いきなり激しい呼吸を迫らせてぴつたりと接吻した。

「ありがとうございましたわ。あたくし、あれから、もう一度あなたにお目にかかるにちがいないとthoughtおりましたの。でも、

こんなに早く、お眼にかかるうとは思いませんでした。」

参木は次から次へと爆発する眼まぐるしい感情の音響を、ただ恍惚として聞いていたにすぎなかつた。秋蘭は忙しそうに窓を開けると下の街路を見降ろした。

「まあ、あんなに官憲が。——御覧なさいまし、あたくし、あそこであなたにお助けしていただいたんでござりますわ。あなたを狙つていたものが発砲したのも、あそこでですの。」

参木は秋蘭と並んで下を見た。壁を伝つて昇つて来る硝煙の匂いの下で、群衆はもはや最後の一団を街の一角へ吸い込ませていった。真赤な装甲車の背中が、血痕やガラスの破片を踏みにじりながら、穴を開けて静まつてしまつた街区の底をこそぞと怠るそ

うに立つていった。

参木は彼の闘争していたものが、ただその真下で冷然としている街区にすぎなかつたことに気がついた。彼は自身の痛ましい愚かさに打たれると、おかん悪感を感じて身が慄えた。

参木は弾力の消え尽した眼で、秋蘭の顔を見た。それは曙のようであつた。彼は彼女が彼に与えた接吻のしめやかさを思い出した。しかし、それは何かの間違いのように空虚な感覺を投げ捨てて飛び去ると、彼はいつた。

「もう、どうぞ、僕にはかまわないで、あなたのお急ぎになる所へいらっしゃい下さい。」

「ええ、有りがとうござります。あたくし、今は忙がしくつてな

りませんの。でも、もう、あたくしたちの集る所は、今日は定つておりますわ。それより、あなたは今日はどうしてこんな所へお見えになつたんでござりますの。」と秋蘭はいつて参木の肩へ胸をつけた。

「いや、ただ僕は、今日はぶらりと来てみただけです。しかし、あなたのお顔の見える所は、もうたいてい僕には想像が出来るんです。」

「まあ、そんなことをなさいましては、お危うございましてよ。<sup>あぶの</sup>

これからは、なるだけどうぞ、お家にいらして下さいまし。今はあたくしたちの仲間の者は、あなた方には何をするかしれませんわ。でも、今日の工務局の発砲は、日本の方にとつては、幸福だ

つたと思いますの。明日からは、きっと中国人の反抗心が英国人に向つていくにちがいありませんわ。それにもうすぐ、工務局は納税特別会議を召集するでございましょう。工部局提案の関税引上げの一項は、中国商人の死活問題と同様です。あたくしたちは極力これを妨害して流会させなければなりませんの。」

「では、もう、日本工場の方の問題は、このままになるんですか。」と参木は訊ねた。

「ええ、もうあたくしたちにとつては、罷業より英國の方が問題です。今日の工部局の発砲を黙認していくては、中国の国辱だと思いますの。武器を持たない群衆に発砲したということは、発砲理由がどんなに完全に作られましても英國人の敗北に定<sup>きま</sup>っています。

御覧なさいまし、まあ、あんなに血が流されたんでござりますもの。今日はこの下で、幾人中国人が殺害されたか知れませんわ。」

秋蘭は窓そのものに憎しみを投げつけるように、窓を突くと部屋を歩いた。参木は秋蘭の切れ上つた眦めじりから、遠く隔絶した激情を感じると、同時にますます冷たさの極北へ移動していく自分を感じた。すると、一瞬の間、急に秋蘭の興奮した顔が、屈折する爽やかなスポーツマンの皮膚のように、美しく見え始めた。彼は今は秋蘭の猛たけだけ々しい激情に感染することを願つた。彼は窓の下を覗いてみた。——なるほど、血は流れたままに溜つていた。しかし、誰が彼らを殺したのであろうか。彼は支那人を狙つた支那警官の銃口を思い出した。それは、確に工部局の命令したものに

違いかつた。だが、それ故に支那を侮辱した怪漢が、支那人でないと、どうしていうことが出来るであろう。参木はいつた。

「僕は、今日の中国の人々には御同情申し上げるより仕方がありませんが、しかし、それにしたつて、工部局官憲の狡さには、——」

彼はそういつたまま黙つた。彼は支那人をして支那人を銃殺せしめた工部局の意志の深さを嗅ぎつけたのだ。

「そうです、工部局の老獴<sup>ろうかい</sup>さは、今に始つたことじやございませんわ。数え立てれば、近代の東洋史はあの国の罪惡の満載で、動きがとれなくなつてしまひます。幾千万という印度人に飢餓を与えて殺したのも、あたくしたち中国に阿片を流し込んで不具に

したのも、あの国の経済政策がしたのです。ペルシャも印度もアフガニスタンも馬来も<sup>マレイ</sup>、中国を毒殺するために使用されているのと同様です。あたくしたち中国人は今日こそ本当に反抗しなければなりませんわ。」

憤激の頂点で、独楽<sup>こま</sup>のように廻っている秋蘭を見ていると、参考本は自分の面上を撫で上げられる逆風を感じて横を見た。しかし、今は、彼は彼女を落ちつかすためにも、何事かを饒舌<sup>しゃべ</sup>らずにはいられなかつた。彼は落ちつき払つていつた。

「僕は先日、中国新聞のある記者から聞いたのですが、こここの英國陸戦隊を弱めるために、最近ロシアから一番有毒な婦人が数百人輸送されたということですよ。この話の真偽はともかく、この

ロシアの老猾さはなかなか注意すべきことだと思いますね。」参考はこういいつつも、何をいおうと思つてゐるのか少しも自分に分らなかつた。しかし、彼はまたいた。「僕は今日のあなたの御立腹を妨害するためにはうんじやありませんが、僕はただどんなに老猾なことも、その老猾さを無用にするような鍛錬といいますか。——いや、こんなことは、もうよしましよう。僕のいうことは、何もありませんよ、あなたはもう僕を饒舌<sup>しゃべ</sup>らずに帰つて下さるといいんですがね。これ以上僕が饒舌<sup>しゃべ</sup>れば、何をいい出しか知れない不安を感じるので。どうぞ、もしあなたが僕に何か好意を持つていて下さるなら、帰つて下さい。そうでなければ、必ずあなたは無事でこのままでいられるはずがありませんよ。どう

ぞ。」

唚然としている秋蘭の顔の中で、流れる秋波が微妙な細かさで分裂した。彼女の均衡を失つた唇の片端は、過去の愛慾の片鱗を浮べながら痙攣した。秋蘭は彼に近づいた。すると、また彼女はその睫に苦悶を伏せて接吻した。彼は秋蘭の唇から彼女の愛情よりも、軽蔑を感じた。

「さア、もう、僕をそんなにせずに帰つて下さい。あなたはお国をお愛しにならなければいけません。」と参木は冷くいった。

「あなたはニヒリストでいらっしゃいますのね。あたくしたちが、もしあなたのお考えになつてているようなことに頭を使い始めましたら、もう何事も出来ませんわ。あたくし、これから、まだまだ

いろいろな仕事をしなければなりませんのに。」

秋蘭は何かこのとき悲しげな表情で参木の胸に手をかけた。

「いや、誤解なさらんように。僕はあなたを引き摺り降ろそうと企<sup>たく</sup>らんでいるんじやありませんよ。ただどうしたことか、こういう所であなたと御一緒になつてしまつたというだけです。これはあなたにとつては御不幸かもしませんが、僕には、何よりこれで、もう幸福なんです。ただ僕には、もう希望がないだけです。どうぞ。」

参木はドアを開けた。

「では今日はあたくし、このまま帰らせていただきますわ。でも、もう、これであたくしあなたにお逢い出来ないと思いますの。」

秋蘭はしばらく、出て行くことに躊躇しながら参木を仰いでいた。

「さようなら。」

「あたくし、失礼でございますが、お別れする前に、一度お名前をお聞きしたいんでござりますけど。まだあなたはあたくしに、お名前も仰おつしゃ言つて下すつたことがございませんのよ。」

「いや、これは。」

と参木はいうと曇つた顔をして黙つていた。

「僕は甚だ失礼なことをしてしまったが、しかし、それは、もうこのままにさせといて下さい。名前なんかは、僕があなたのお名前さえ知つていれば結構です。どうぞ、もうそのまま、——」

「でも、それではあたくし、帰れませんわ。明日になれば、きっとまた市街戦が始まります。そのときになれば、あたくしたちはどんな眼に合わされるか知れませんし、あたくし、亡くなる前には、あなたのお名前も思い出してお礼をしたいと思いますの。」

参木は突然襲つて来た悲しみを受けとめかねた。が、彼はぴしやりと跳ね返す扇子のように立ち直ると、黙つて秋蘭の肩をドア一の外へ押し出した。

「では、さようなら。」

「では、あたくし、特別会議の日の夜、もう一度ここへ参りますわ。さようなら。」

部屋の中で、参木はいつ秋蘭の足音が遠のくかと耳を聾そばだててい

る自身に気がつくと、ああ、また自分はここで、今まで何をしてたのだろうと、ただぐつたりと力がぬけていくのを感じるだけであつた。

### 三五

市街戦のあつたその日から流言が海港の中に渦巻いた。殺戮される外人の家の柱に白墨のマークが附いた。工務局では発砲のために大挙して襲うであろう群衆を予想して、各國義勇団に出動準備を命令した。市街の要路は警官隊に固められた。<sup>ばっけん</sup>拔劍したまま駆け違う騎馬隊の間を、装甲車が辻つていつた。義勇隊を乗せ

た自動車、それを運転する外国婦人、機関銃隊の間を飛ぶ伝令。  
 —市街は全く総動員の状態に変化し始めた。警官はピストルの  
 サックを脱して騒ぐ群衆の中へ潜入した。すると、核たねをくり抜く  
 ように中からロシアの共産党員が引き出された。辻々の街路に立  
 つて排外演説をする者が続出した。群衆は警官隊の抜剣の間から  
 はみ出してその周囲を取り包んだ。警官は鞭むちを振り上げて群衆を  
 追い散らそうとした。しかし、群衆はただげらげら笑つてますま  
 す増加して来るばかりであった。

参木はほとんど昨夜から眠ることが出来なかつた。彼は支那服  
 を着たまま露路や通りを歩いていた。彼はもう市街に何が起つて  
 いるのかを考えなかつた。ただ彼はときどきほんやりしたファイル

ムに焦点を与えるように、自分の心の位置を測定した。すると、  
遽に彼の周囲が音響を立て始め、投石のために窓の壊れた電車が  
血をつけたまま街の中から這つて来た。それはふと彼に街のどこ  
かの一角で、市街戦の行われたことを響かせながら行き過ぎる。

彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼  
は幾度自身が日本人であることを知らされたか。彼は母国を肉体  
として現していることのために受ける危険が、このようにも手近  
に迫っているこの現象に、突然牙きばを生やした獸の群れを人の中か  
ら感じ出した。彼は自分の身体が、母の体内から流れ出る光景と  
同時に、彼の今歩きつつある光景を考えた。その二つの光景の間  
を流れた彼の時間は、それは日本の時間にちがいないのだ。そし

て恐らくこれからも。しかし、彼は自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめようとする企てを、どうすることが出来るであろう。だが、彼の身体は外界が彼を日本人だと強いることに反対することは出来ない。心が闘うのではなく、皮膚が外界と闘わねばならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘い出す。武器が街のいたる所で光っている中を、参木は再び歩きながら、武器のためにますます自身を興奮させている群衆の顔を感じた。それらの群衆は銃剣や機関銃の金属の流れの中で、個性を失い、その失つたことのためにますます膨脹しながら猛々しくなるのであつた。この民族の運動の中で、しかし、参木は本能のままに自殺を決行しようとしている自分に気がついた。彼は自分で自殺せ

しめる母国の動力を感じると同時に、自分が自殺をするのか、自分が誰かに自殺をせしめられるのかを考えた。しかし、何故にこのように自分の生活の行くさきざきが暗いのであろう。自分は自分の考えることが、自分が自身で考えているのではなく、自分が母国のために考えさせられている自身を感じる。もはや俺は自身で考えたい。それは何も考えないことだ。俺が俺を殺すこと。いや、総ては何んでもない。俺は孤独に腹の底から腐り込まれているだけなのだ。

この彼のうす冷い孤独な感情の前では、銃器が火薬をつめて街の中に潜んでいた。群衆は排外の唾<sup>つば</sup>を飛ばして工部局の方へ流れていった。道路の両側に蜂の巣のように並んでいた消防隊のホー

スの口から、水が群衆目がけて噴き出した。その急流のような水の放射が、群衆の開いた口の中へ突き刺さると、ばたばたと倒れる人の中から、礫<sup>つぶて</sup>が降つた。辻々の街路で、警官に守られていた群衆は騒ぎを聞くと、一齊にその中心へ向つて流れていつた。

参木はこれら膨脹する群衆から脱<sup>(のが)</sup>ながら、再び昨日のように秋蘭の姿を探している自分を感じた。彼は彼の前で水に割られては盛り返す群衆<sup>ひび</sup>を見詰め、倒れる旗の傾斜を見、投げられる礫の間で輝く耳環に延び上つた。すると、ふと浮き上の彼の心は、昨日秋蘭を見る前と同様の浮沈を続け出すのを彼は感じると、やがてホースの水の中から飛び出るであろう弾丸をも予想した。もしいま一度弾丸が発射されたら、この海港の内外の混乱は何<sup>なんび</sup>

人と雖も予想することが出来ないのだ。

しかし、そのとき、群

衆の外廓は後方で膨れる力に押されながら、ホースの陣列を踏み潰した。発砲が命令された。銃砲の音響が連續した。参木は崩れ出す群衆の圧力を骨格に受けると、今まで前進していた通路の人波に巻き込まれたまま逆流し始めた。その流れは電車を喰い留め、両側の外人店舗に投石し、物品を掠奪しながら暴徒となつて四方の街路へ拡がつていつた。参木の前の群衆は急に停止すると、一人の支那人を取り囮んで殴り出した。彼らは彼を「犬」と叫んだ。彼らの叫んでいる間に、もう「犬」は二つに引き裂かれて、手は一方の街へ流れる群衆の先端で高々と振り廻され、足はその反対の街路へ向つて群衆の角のように動いていつた。そのがくが

く揺れて通る足の上方の二階では、抱き合つた日本の踊り子たちの踊る姿が窓の中で廻つていた。すると、その窓を狙つて、礫の雨が舞い込んだ。騎馬隊の警官が群衆に向つて駆けて來た。その後から新製の装甲車が試射慾に触角ふるわを慄せながら走つて來た。道路上に満ちた群衆は露路の中へ流れ込むと、圧迫された水のように再びはるか向うの露路口に現れ、また街路に満ちながら、警官隊の背後から嘲笑を浴びせかけた。

これらの群衆はしばらくは警官隊の騎馬の鼻きを愚弄しながら、だんだん総商会のホールの方へ近づいていつた。そこでは、前から集合していた商会総聯合会と、学生団体との聯合会議が開催されていたのである。附近の道路には数万の男女の学生が会議

の結果を待つて群むらつていた。議題は学生団の提出した外人に対する罷市ひし敢行の決議にちがいないので。もしこの会議が通過すれば、全市街のあらゆる機関は停止するのだ。そうして、恐らくそれは間もないことであろう。

参木にはこれら共産党と資本家団体との一致の会合が、二日の後に開催される外人団の納税特別会議に対する威嚇であることは分つていた。しかし、それにしても、もしその日の納税特別会議が——外人の手で支那商人の首を一層確実に締めつける関税引上げの議案を通過させれば、——参木には、その後の市街の混乱は全世界の表面に向つて氾濫はんらんし出すにちがいないと思われた。すると、新たに流れ来た群衆は再び発砲された憤激の波を伝えな

がら、会場の周囲の群衆へ向つて流れ込んだ。群衆の輪は一つの波と打ち合うごとに、動搖しながら会場の中へ波立つた。恐らくその波の打ち寄せる団々とした刺戟のたびに、提出された議題はその輪の中心で、急速な進行を示しているにちがいないのであつた。

参木は前からこの群衆の渦の中心に秋蘭の潜んでいるのを感じていた。しかし、彼はそのどこに彼女がいるかを見るために、動揺する渦の色彩を眺めていたのである。彼の皮膚は押し詰った群衆の間を流れて均衡をとる体温の層を感じ出した。すると、彼は彼ひとりが異国人だと思う胸騒ぎに締めつけられた。彼は彼と秋蘭との間に群がる群衆の幅から無数の牙を感じると、次第にその

団塊の中に流れた共通の体温から、ひとりだんだんはじき出されていく自分を見た。

### 三六

参木がようやく群衆の中から放はなれて家へ帰ると、甲谷は先に帰つて待つていた。

「おい君、もう僕はここにいたつて駄目だ。四、五日すれば材木が着くんだが、着いたら宮子を連れてシンガポールへ逃げ出そうと思っている。」と甲谷は疲れた眼を上げていった。  
「それで宮子は承知したのか。」と参木は訊ねた。

「いや、承知はまだだ。材木の金がとれるか宮子が落ちるか、とにかくどつちか一つが駄目なら、俺は自殺だ。」

「それやどつちも駄目だ。明日から銀行は危くなるのは定<sup>きま</sup>つているんだ。」

「そんなら、自殺も出来んじやないか。」

笑う後から滲み出る甲谷の困惑した顔色を、参木は黙つて眺めていた。恐らく甲谷には参木の流れる冷たい心理の中へ足を踏み込むことは出来なかつたにちがいない。しかし、それとは反対に、参木は甲谷の健康な慾望の波動から、瞬間、久しく忘れていた物珍らしい過去の暖い日を幻影のように感じて來た。すると、競子の顔が部屋の隅々から現われ出した。

「とにかく、われわれはこうしてはいられない。何とかしなけれ  
や。」と甲谷はうろうろしたようにいつた。

「何をするんだ。」と参木はいつた。

「それが分れば困りあしないよ。」

「君は宮子を落せばいいんじやないか。」

「しかし、君はどうするんだ。」

「俺か。」

参木はもう一度秋蘭に逢いたいだけだ。<sup>しか</sup>然もその可能性は明後日  
に開かれる特別会議の夜だけに、かすかに<sup>ぬすみみ</sup>盜見するほどであつ  
た。しかし、参木はこの混乱の中で、最後の望みがどちらも女を  
見たいと思う鋭い事実だと気がつくと、突然、おかしそうに突き

上げられて笑つた。

「君、あの宮子を君は突き飛ばすことは出来ないのか。」

「出来ない。あの女は僕を突き飛ばしているだけさ。あの女には僕はシンガポールの材木をすっかり食われてしまわなきあ、駄目らしいよ。」と甲谷はいつた。

「君が出て来たときには、フイリツ・ピン材を蹴飛ばさなきあ帰らないといつてたが、皮肉にも程度があるぞ。もう僕は君にあの女をすすめるのはやめたよ。あの子は君の裏と表をすっかりひっくり返してしまつているじやないか。」

「しかし、ひっくり返つてているのは何も俺だけじゃなかろうじやないか。この街まで今は逆さまになつていてるんだ。これじや、俺

ひとりでどう立ち上ろうと知れてるさ。とにかく、何んだつてか  
まうもんか、もういつぺん、俺はひつくり返つてくるまでだ。」

甲谷は重そうに立ち上ると、ポケットから競子の手紙を出して  
出ていった。その手紙の中には、帰ろうとしている競子を邪魔し  
ているものは、この海港の混乱だと書いてあつた。

——帰れなくしたのは誰だ、と参木は思つた。すると、彼の日  
々見せつけられた暴徒の拡つた黒い翼の記憶の底から、芳秋蘭の  
顔が様々な変化を見せて現われて來るのであつた。

宮子は甲谷に誘われるままに車に乗った。彼女は彼女を取り巻く外人たちが、今は義勇兵となつて街々で活動している姿を見たかったのだ。しかし、甲谷はもう宮子に叩かれ続けた自尊心の低さのために、今はますます叩かれる準備ばかりをしていなければならなかつた。二人は車を降りた。河岸の夜の公園の中では、いつものように春婦らがベンチに並んでうな垂れていた。毒のめぐつた白けた女たちの皮膚の間から、噴水が舌のようにちよろちよろと上つていた。甲谷は雨の上つた菩提樹ぼだいじゆの葉影を洩れる瓦斯ガス燈とうの光りに、宮子の表情を確かめながら結婚の話をすすめていった。

「もう僕は何もかもいつてしまつていうことはないんだが、同じいうなら、もう一度いつたつて悪くはなかろう。」

「いやだね、あなたは。そういういつもいつも、あたしがつかり攻めなくたって、良かりようなもんじやないの。」

「それで実は、もう僕も何から何までさらけ出して話すんだが、ひとつ頼むよ。」

宮子は甲谷の肩にもたれかかるとうるさまぎれに、もう毒々しく笑い出した。

「あたし、あなたは嫌いじゃないのよ。だけど、そうあなたのように、いつもいつも同じことをいわれちゃ、あたしだつておかしくなるわ。」

甲谷がベンチに腰を降ろすと宮子もかけた。甲谷は靴さきに浮ぶ支那船の灯火を蹴りながら、饒舌しゃべった言葉の間をすり抜けよう

として藻搔もがいた。すると、対岸に繁つたマストの林の中から、急に揺れ上つた暴徒の一団が、工場の中へ流れ込んだ。発電所のガラスが穴を開けた。銃口が窓の中で火花を噴いた。黒々とした暴徒の影が隣りの煙草工場の方へ流れていった。海上からは対岸のマストを狙つて、モーターボートの青いランプの群れが締るように駆け始めた。甲谷はこの遠景の騒ぎの中から、宮子の放心している心をひき抜くように彼女を揺すつた。

「あちらはあちら、こちらはこちらだ。ね、君、君とこうして坐つて話していても、仕方がないから、もういい加減に僕を落ちつけてくれたつていいだろう。とにかく、これからすぐ、僕のところへ行こう。」

「まあ、あんなに煙が出たわ。御覧なさいよ。あれは英米煙草だわ。もうこの街もおしまいだわ。」

「街なんかどうなろうといいじやないか。いずれこの街は初めから罈<sup>ひび</sup>の入ってる街なんだ。君は僕と一緒にシンガポールへ逃げてくれ給え。」

「だって、あたしにやこの街ほど大切な所はないんですもの。あたしここから出ていつたら、鱗<sup>うろこ</sup>の乾いたお魚みたいよ。もうどうすることも出来なくなれば、あたし死ぬだけ。あたし死ぬ覚悟はいつだってしてるんだけど、でも、あたしこの街はやっぱり好きだわ。」

甲谷は乗り出す調子が脱<sup>はず</sup>れて来ると、駆け込むようにベンチの

背中を掴んで周章<sup>つかあわ</sup>て出した。

「もうそんなことは考えないでくれないか。ただ結婚してくれれば万事こちらで良くしていく。それなら良かろう。それなら、僕は、——」

「だつて、あたし、だいいち結婚なんかしてみたいと思つたことなんてないんですもの。あたしもし結婚したければ、あなたが初め仰言<sup>おつしゃ</sup>つて下すつたとき、さつさとお返事していてよ。いくらあたしだつて、そうはあなたのように気取つてばかりはいられないわ。」

甲谷は頭を搔くように笑いながら、一寸後を振り返つたがまた急いだ。

「それや、いくら悪口いわれたつていいから、とにかく、これじゃ、いくら君を廻つてぐるぐるしたつて、これはただぐるぐるしているというだけで、何んでもないんだからね。」

「あたしは駄目なの。あたし、自分が一人の男の傍にくつついて生活している所なんか、想像が出来ないわ。あたし男の方を見ていると誰だつて同じ男のように見えるのよ。これで結婚なんかしていたら、あなたから逃げ出されるにきまつているわ。それよりあたしはあたしの流儀で、困つている沢山の男の方にちやほやしているの。あたしに瞞されたと思うものは、それや馬鹿なの。だって、今頃瞞されたと思つて口惜しがつてる男なんか、日本につつていやしないわ。あなたにしたつて、あたしがどんな女だつて

いうことぐらい、一と目見ればお分りになりそうなもんじやないの。それにあたしにお嫁入の話なんか仰おっしゃ言つて、あたしが冗談にしてしまうことだつて、これでたいていのことじやないことよ。

波がよせると、それが冷たい幕のように甲谷の身体に沁み透つた。彼は彼女から腕を放した。切られた鎖のように沈む彼の心の断面で、まだ見たこともない女の無数の影が入り交つた。が、その影の中で、宮子の顔だけはますます明瞭に浮き上つて來るのだった。

「駄目だ。」と甲谷はいうと、不意に彼女を抱きよせようとした。が、後ろのベンチで、春婦の群きのこれが茸かたまのように塊かたまつたままじつと

二人を眺めていた。彼は溜息を洩らすと、再び宮子から放れて脊を延ばした。すると、逆に宮子の身体が甲谷の方へ倒れて来た。彼は宮子を抱きよせながら、この急激な彼女の変化に打たれてぽんやりした。

「あなた、あたしにしばらくこうしていさせて頂戴。あたし一日にいつぺん、誰かにこうしていないと、駄目なの。あたし、あなたのお心はもう分つたわ。だけど、駄目よあたしは。あなたは早くお綺麗な方を貰つてシンガポールへお帰りなさいな。あたしは誰にでもこんなことをする性質たちなんだから。あたしあなたには、お氣の毒だと思うけど、これも仕様がないわ。」

イミタチオンの宮子の靴先が軽く甲谷の靴を蹴るたびに、甲谷

の腕は弛<sup>ゆる</sup>んで來た。彼は彼女がただ自分を慰める新らしい方法を用いだしだけだと気がついたのだ。

「君の優しさは前から僕は知っていたんだが、しかしこの上僕を迷わすことは御免してくれ。ただもう僕は君が好きで仕方がないんだ。」と甲谷はいつてまた強く宮子を抱きすぐめた。

「あなたはあなたに似合わず、今夜はつまんないことばかり仰言るのがね。あの橋の上を御覧なさいよ。義勇兵が駆けててよ。それにあなたは、まあ、なんて子供っぽいことばかり仰言るんでしょう。もつとこんなときには、何んとかしてよ。何んとか。」

甲谷は宮子を芝生の上へ突き飛ばすと、立ち上つた。しかし、彼は彼女が彼にそのようにも怒らせようと企んだ彼女の壺へ落ち

込んだ自分を感じると、再び宮子の前へ坐つていつた。

「君、もう虐めるのは、やめてくれ。僕は君には一生頭が上らないのだ。ただ僕の悪いのは、君を好きになつたということだけじゃないか。それに君は何ぜそんなにふざけてばかりいたいのだ。」

宮子は髪を振りながら芝生の上から起き上つた。

「さア、もう、帰りましょうね。あたし、あなたがあたしを愛していて下さるんだと思うと、もういつでも我ままになつちやうのよ。ね、だから、もう何もあたしには仰言らないで、——」

しかし、甲谷は完全に振り落された男がここに転げているのだと気がつくと、もう動くことも出来なくなつた。宮子は公園の入口の方へひとりときどき振り向きながら歩いていつた。芝生の上

に倒れている甲谷の頭の上の遠景では、火のついた煙草工場がしきりに発砲を続けていた。

### 三八

海港の支那人の活躍は変つて來た。支那商業団体の各路商会聯合会、納稅華人会、總商會の總ては、一致團結して罷市賛成に署名を終えたのだ。学生団は戸ごとの商店を廻り歩いて營業停止を勧告した。罷市の宣伝<sup>ビラ</sup>が到る所の壁の上で新しい壁となつた。電車が停り、電話が停つた。各学校は開期不明の休校を宣言した。市街の店舗は一齊に大戸を降ろし、市<sup>マーケット</sup>場は閉鎖された。

その日の夕刻、騒擾<sup>そうじょう</sup>の分水嶺となるべき工部局の特別納稅会議が市政会館で開かれた。戒厳令を施された会館の附近では、銃剣をつけた警官隊と義勇隊とが数間<sup>けん</sup>の間を隔<sup>お</sup>いて廻っていた。

会議の時刻が近づくと、昼間市中に波立つた不吉な流言の予告のために、会館の周囲は息をひそめて静まり出した。徘徊する義勇兵の眼の色が輝き出した。潜んだ爆弾を索<sup>さぐ</sup>り続ける警官が、建物と建物との間を出入した。水道栓に縛りつけられたホースの陣列の間を、静に装甲車が通つていった。やがて、外人の議員たちは武装したまま、陸續と議場へ向つて集つて来た。

丁度<sup>ちょうど</sup>参木の来たのはそのときであつた。会館附近の交通遮断線の外では、街々の露路から流れて来た群衆は街路の広場に溜り

込んだまま、何事か待ち受けるかのように互に人々の顔を見合っていた。参木はそれらの人溜りの中を擦り抜けながらその中に潜んでいるにちがいない秋蘭の顔を捜していった。もし彼女が彼との約束に似た暗黙の言葉を忘れないなら、彼が彼女をこの附近で捜し続けていることも忘れないはずであつた。しかし、彼は歩いているうちにだんだん周囲の群衆と同様に、不意に何事か湧き起つて来るであろうと予感を感じて來た。すると、群衆はじりじり遮断線からはみ出して会館へ向つていつた。騎馬の警官がその乱れる群衆の外廓に従つて、馬を躍らせた。スコットランドの隊員を積み上げた自動車が抜劍を逆立てたまま、飛ぶように疾走した。すると、急に、群衆の一角が静まつた。つづいて、今まで騒いで

いた群衆は奇怪な風を吸い込んだように次から次へと黙つていった。すると、全く音響のはたと停つた底氣味悪い瞬間、その一帯の沈黙の底からどことも知れず流れる支那人の靴音だけが、かすかに参木の耳へ聞えて來た。しかし、間もなく、それはなんの意味も示さぬただ沈黙そのものにすぎないことを知り始めると、再び群衆は騒ぎ立つた。その騒ぎの中から揺れて来る言葉の波は漸次に会議の流会を報らせて來た。それなら、これで支那商人団の希望は達したわけだと参木は思つた。間もなくその流会の原因は定員不足を理由としていることまで、寄り集つた人波の呟きからだんだんと判つて來た。参木は、極力会議を流会させることを宣言していた芳秋蘭の笑顔を感じた。今は彼女はこの附近のどこか

の建物の中で、次の劃策に没頭しているにちがいない。しかし、もしそれにしても、なおこのうえ海港の罷市が持続するなら、このときを頂点として 困憊こんぱいするものは支那商人に変つていくのだ。——もし支那商人の一団が困憊するなら、なお罷市の持続を必要とする秋蘭一派の行動とは、当然衝突し出すのは定きまつていた。

参木は思った。これは何か必ず今夜、謀たくらみが起るにちがいない。

——その謀みはなお商業団体と群衆とを結束させんがための謀みであることは、分つているのだ。しかし、その手は——その手も今はただ外人をして発砲させるようにし向ければそれで良いのだ。

しかし、参木には自分の頭脳の廻転が、自分にとつて無駄な部

分の廻転ばかりを続いていることに気がついた。彼はただ今は死ねば良いのだ。死にさえすれば。それにも拘らず秋蘭を見たいと思う願いがじりじり後をつけて来るのを感じると、彼はますます自身の中で跳梁する男の影と蹴り合いを続けるのであつた。ふとそのとき、彼は梅雨空に溶け込む夜の濃密な街角から、閃めく耳環の色を感じた。彼はその一点を見詰めたまま、洞穴を造つた人溜の間を魚のように歩き出した。しかし、彼はその街角へ行きつくまでに急に停つた。もしその耳環が秋蘭であつたなら、と思う彼の心が、突然、彼女と逢つた後のことを考え出したのだ。全く彼は彼女と逢つたとしても、為すべきことは何もないのだ。それなら、——いや、それより、彼女がこの街の混乱の最中に、

どうして自分を捜しに来るであろうか。彼は壁に背中をひつつけ  
ると、彼女が自分を捜しに来るであろうと想像したがる自身の心  
を締めつけた。しかし、もし彼女が自分の言葉を忘れないなら、  
——締めつける後から湧き上つて来る手に負えない愛情に、もは  
や彼はにやにや笑い出した。

そのとき、前方の込み合つた街路を一隊の米国騎馬隊が彼の方  
へ駆けて来た。それと同時に、両側の屋内から不意に銃声が連續  
した。騎馬隊の先頭の馬が突つ立つた。と、なお鳴り続けている  
音響の中で、馬は弛<sup>ゆる</sup>やかに地に倒れた。投げ出された騎手の上を  
飛び越して、一頭の馬は駆け出した。後に続いた数頭の馬はぐる  
ぐる廻りながら、首を寄せた。一頭の馬は露路の中へ躍り込んだ。

乱れ出した馬の首の上で銃身が輝やすく、屋内へ向けて発砲し始めた。馬は再び群衆の中を廻り始めた。群衆は四方の露路から溢れて来ると、躍る馬の周囲で喚声を上げ始めた。群つた礫つぶてが馬を目がけて降り注いだ。馬は倒れた馬の上を飛び越えると、押し出る群衆を蹴りつけて駆けていった。

参木の周囲では、群衆は彼ひとりを中心に挟んだまま、馬の進退に従つて溶液のように膨脹し、収縮した。そのたびに、彼はそれらの流動する群衆の羽根に突き飛ばされ、巻き込まれながら、だんだん露路口の壁の方へ叩き出されていった。

騎馬隊が逃げていくと、群衆は路の上いっぱいに詰まりながら、狼狽うろたえた騎馬隊の真似をしてはしゃいだ。銃砲の煙りが発砲され

た屋内から洩れ始めた。そのとき、工部局の方から近づいて来た機関銃隊が、突然、復讐のために群衆の中へ発砲した。群衆は跳ね上つた。声を失つた頭の群れが、暴風のように揺れ出した。沈没する身体を中心に、真つ二つに裂け上つた人波の中で、弾丸が風を立てた。露路口は這い込む人の身体で膨れ上つた。閉された戸は穴を開けて眼のように光り出した。その下で、逃げ後れた群衆は壁にひつついたまま唸り始めた。

参木は押しつけられた胸の連結の中から、ひとり反対に道路の上を見廻した。彼はそこに倒れた動かぬ人の群れの中から、秋蘭の身体を探そうとして延び上つた。馬の倒れた大きな首の傍で、人の身体が転がりながら藻搔いていた。

発砲のあつた家を中心にして、霞のような煙が静々と死体の上を這いながら、來檢らいけんの通るたびに揺らめきながら廻っていた。

しかし、参木には、もはや日々見せられた倒れる死骸の音響や混乱のために、眼前のこれらの動的な風景は、ただ日常普通の出来事のようにしか見えなかつた。だが、彼は彼の心が外界の混乱に無感動になるに従い、却つて一層、その混乱した外界の上を自由に這い廻る愛情の鮮かな拡がりを、明瞭に感じて來るのであつた。

街路の上から群衆の姿が少くなると、騎馬隊へ向けて発砲した家の周囲が、工部局巡捕によつて包囲かこされた。機関銃が据えられた。すると、その一軒の家屋を消毒するかのように、真暗な屋内めがけて弾丸がぶち込まれた。墜落する物音、唸り声、石に衝あたつ

て跳ね返る弾丸の律動と一緒に、戸が白い粉を噴きながら、見る間に穴を開けていった。機関銃の音響が停止すると、戸が蹴りつけられて脱はずされた。ピストルを上げた巡捕の一隊が、欄干からぶら下つたまままだ揺れ続いている看板の文字の下を、潜り込んだ。すると、間もなく、三人のロシア人を中心に混えた支那青年の一団が、ピストルの先に護られて引き出された。

参木はもし秋蘭がその中にと思いながら、露路の片隅からそれらの引き出された青年たちを見詰めていた。——やがて、検束された一団は自動車に乗せられると、機関銃に送られて工部局の方へ駆けていった。銃器が去つたと知ると、また群衆は露路の中から滲み出て來た。彼らは燈ひの消えた道路の上から死体を露路の中

へ引き摺り込んだ。板のよう張りきつた死体の頭は、引き摺られるたびごとに、筆のように頭髪に含んだ血でアスファルトに黒いラインを引き始めた。丁度そのとき、一台の外人の自動車が辻つて来ると、死体の上へ乗り上げた。箱の中で、恐怖のために茉莉の花束に隠れて接吻していた男女の顔が乱れ立つた。すると、礫が頭へ投げつけられた。自動車は並んだ死骸を轢き飛ばすと、ぐつたり垂れた顔を揺りながら疾走した。

参木は群衆の中から擦り抜けると、この前秋蘭と逢った建物の前まで来かかった。しかし、もう彼は秋蘭を探す眼に全身の疲れを感じた。疲れ出すると、今まで何も無いものを有ると思つて探し廻つた幻影が亂れ始め、ごそごそ建物の間を歩いている自分の身

体が急に心の重みとなつて返つて來た。だが、彼はそこで、しばらくの間うろうろしながら、もし秋蘭が來ているならここだけは必ず通つたであろうと思われそうな門の下を、往つたり來たりして歩いていた。彼は高い建物の上方を仰いだり、門の壁にペつたりと背中をつけて居眠るように立つてみたりしていると、ふと、向うから若い三人の支那人の來るのを見た。すると、その中の短く鼻下に髭を生やした一人の男が、擦れ違う瞬間、素早く參木の右手へ手を擦りつけた。參木は彼の冷たい手の中から、一片の堅い紙片を感じた。彼ははツとすると同時に、それが男装している秋蘭だつたことに気がついた。しかし、もうそのときには、秋蘭は他の二人の男と一緒に、肩を並べて行きすぎてしまつてゐる後

だつた。参木は紙片を握つたまま、しばらく秋蘭の後から追つていつた。しかし、彼がそのまま秋蘭の後から追つていくことは、彼女を一層危機へ落し込むことと同様だと思つた。彼女は優しげにすらりとした肩をして、一度ちらりと彼の方を振り返つた。参木はその柔いだ眼の光りから、後を追うことを拒絶している別れの歎きを感じた。彼は立ち停ると、秋蘭を追うことよりも彼女の手紙を読む楽しみに胸が激しく騒ぎ立つた。

参木は秋蘭の姿が完全に人ごみの中へまぎれ込んだのを見ると、急いで真直ぐに引き返した。彼は自分の希望を、底深く差し入れた手の一端に握つたかのように明るくなつた。彼は今さきまで鬱々として通つた道を、いつ通り抜けたとも感じずに歩き続けると、

安全な河岸の橋を見た。彼はそこで、紙片を開けて覗いてみた。紙片にはよほど急いだらしく英語が鉛筆で次のように書かれてあつた。

「もう今夜、あたくしたちは危険かと思われます。いろいろ有り難うございました。どうぞ、それではお身体お大切にしなさいませ。もしまだこの上永らえるようなことでもございましたら、北四川路のジャウデン・マジソン会社のこづかい小使、陳に王の御名でお訊ね下さいませ。では、さようなら。」

参木は公園の中のカンナの花の咲き誇っている中を突き抜けた。すると、芝生があつた。紙屑が風に吹かれてかきかさと音を立つながら、足もとへ逆辺りに近つて來た。彼は露を吹いて湿つてい

る鉄の欄干を握つて足もとの波を見降ろした。

——ああ、もう、俺も駄目だ。——

そう思えば思うほど、参木は波の上に面おもてを伏せたまま、だんだん深く空虚になりまさつていく自分をはつきりと感じていった。

### 三九

その夜、参木は遅く宮子の部屋の戸を叩いた。ピジヤマ姿の宮子は上長衣ルダンコオトをひつかけたまま出て来ると、黙つて参木を長椅子に坐らせた。参木は片手で失敬の真似をしながらいきなり横に倒れると、眼を瞑つた。宮子はウイスキーを彼に飲ませた。彼女は

彼の傍に坐ると、彼の蒼ざめた顔を見詰めたままいつまでも黙っていた。隣家の廊下を通る燭台の火が、窓のガラスに柘榴さくろの葉影を辻らせつつ消えていった。参木は眼を開けると彼女にいつた。

「君、今夜だけは、赦してくれ給え。」

「だつて、寝台はあちらにあるわ。あちらへいつて。」

口へあてがう宮子のコップの底を見詰めながら、彼は片手で宮子の手を強く握った。

「あなたは今夜へんよ。あたし、さきから天地がひっくり返ったような気がしていて、そんなことをされたつて、何のことだかわかんないわ。」と宮子はうつろな眼で参木を眺めながらいつた。

しかし、宮子は急に澆刺はつらつとし始めると、鏡に向つて顔を叩い

た。ひつかけた上長衣<sup>ルダンコオト</sup>が宮子の肩からずり落ちた。

「あたし、あなたがいらつしやる前まであなたの夢を見ていたの。そしたらあなたがいらつしやるんでしょう。あたしそれまで、あなたと何をしてたとお思いになつて。」

鏡の前から戻つて来ると、宮子は参木の頭を膝の上へ乗せながら顔を近々と擦り寄せた。

「あなた、もう元気をお出しになつてよ。あたし、あなたの疲れてらつしやるお顔を見るのはいやなのよ。」

参木は起き上つた。彼は宮子の手を掴むといつた。

「とにかく、つまらん。」

「何が。」

「もういつぺん黙つて寝させておいてくれないか。」

参木はまた倒れると眼を瞑つた。宮子は彼の身体を激しく揺り動<sup>うごか</sup>した。

「駄目じやないの、あたしを叩き起して自分が眠るなんて、まだあたしはあなたの奥さんじやないことよ。」

すると、参木は傍にあつたウイスキーをまた一杯傾けた。

「そう、そう。結構だわ。あたし、あなたのわがままなんか初めつから認めてやしないのよ。だから、あたしはあなたなんかに同情したことなんか一度もないの。人の顔を見ると聾<sup>しが</sup>めつ面ばかりし続けて、つまんないことばかり考えて、もうそんなことはお止<sup>よ</sup>しなさいよ。あたしあなたなんか好きになっちゃおしまいだわ。」

「どうも失礼。これでどうやら君に叱られているのも分つて來たよ。」

「当りまえよ。あなたなんかに憂鬱な恰好なんか見せていただかなくたつて、街にいくらだつてごろごろしているわ。あたしなんか見て頂戴。馬鹿なことは一人前に馬鹿だけど、面白そうなことだけは、これで何んだつて知つてるのよ。」

宮子は不機嫌そうに外方を向くと煙草をとつた。参木は予想とは反対に、急に怒り出した宮子の様子に気がつくと、またぐつたりと横に倒れた。宮子は床に落ちている上長衣ルダンコオトを足で跳ね上げた。彼女は立ち上ると寝室の方へ歩いていった。

「君、もうしばらく僕の傍そばにいてくれないか。そうすると僕もだんだん生しょうき気になるよ。」と参木は倒れたままにやにやした。

「いやよ、あたしあなたのお相手なんかまつぱらだわ。」

「ときどきはこういう男も君の傍にいたつて悪くはなかろう。人には怒るものじやない。朝早くから夜中まで僕は今日は幾回死にそこなつたかしれないんだ。たまには疲れて來たんだから、君、疲れたときには、人は一番親しい所へ転がり込むもんだ。そう怒らずにもうしばらくここにいさせてくれたつて、良からうじやないか。」

宮子はドアの前に立つたまま参木の方へ向き直つた。

「あなたは今夜はどうかしててよ。まさか幽靈じやないんでしょ

うね。」

「いや、それは分らん。しかし、実はちょっと白状したいことがあつて来たんだが、もういうのはいやになつた。これ以上馬鹿になるのは、神さまに対してあいすまんよ。」

「そうよ、あなたは、すまないのは神さまにだけじやないことよ。あたしにだつてすまないわ。競子さんのことを考えていらつしやるのも結構だけど、それじゃ競子さん、もつたいないわ。」

「競子は競子、これはこれさ、僕はふわふわした男だから、ふわふわしてしまわなきあおさまらないんだ。それで今夜はのるかそるか、ひとつ無茶をやろうと思つてやつたんだが、とうとうそれも失敗だ。どうもおれは饒舌しゃべり出すと、これや饒舌るな。」

「饒舌りなさいよ、饒舌りなさいよ。あなたのして來たこと、仰お  
言つしゃつてよ。」

宮子は参木の傍へぴつたりくつつくと、彼の頭をかかえてまた揺つた。参木は揺られる頭の中で今日一日のして來たことを考えた。すると、ますます自分の心が身体の上へ乗りかかつて来る重々しさを感じるのであつた。彼は行きつまつた心を抛り出すように饒舌り出した。

「僕はこの間から支那の婦人に感心して、一ヶ月の間自尊心と喧嘩し続けて、とうとうやられてしまつたのが、今夜なんだ。それから僕は死のうと思つた。しかし今死ぬなら支那人に殺される方が良い。日本人が一人でも殺されたら、日本の外交だけでも強く

なる、とそうまあ、西郷さんみたいなことを僕は考えた。僕は愛国主義者だから、同じ死ぬなら国のために死のうと思つたんだが、ところが、なかなか支那人は殺してくれぬ。殺されないなら、死んだつて国の為にはならないし、同じ死ぬなら殺されよう、と思っているうちに、いつまでたつたつてこの醜態だから、死ぬことが出来やしない。」

「まあまあ、結構な御身分ね。あたし嫌いよ、そんな話は。」と宮子はいつて膝を動かした。

「それから、ここだ。僕が何ぜ殺されないかと考えた。すると僕はこんな支那服を着流してうろつき廻っていたからなんだ。しかし、それなら何ぜ支那服なんか着て歩くと君は思うかも知れない

が、この支那服を着てないと相手の女と逢つたつて、役に立たぬ。

そこが僕の新しい苦悶なんだ。どうだ、こりや新しかろう。」

「あんまり馬鹿にしないで頂戴、あたし聞いてるのよ。あたし、さきまであなたの夢まで見てたんだわ、ああ、口惜しい。」

宮子は手を延ばすとまたウイスキーを荒々しく傾けた。

「しかし、こうして考えて見ると、まあ、馬鹿な話は話さ。とこ

ろが、そいつを眞面目に考えていたんだから、ちよつとはどうかしてるんだ。頭というものは、馬鹿になり出すると、つまり、馬鹿な方へばかりだんだん頭が良くなり出す。譬えば君にした所で、甲谷と結婚しないことなんて、馬鹿な方へ頭がふくれだしたからさ。良いか、分つたね。」

「そうよ。あたし、あなたなんかに眼が眩んで、とうとうお嫁さんになりそこねたわ。これもあなたよ。甲谷さんに仰言つといて。だけど、甲谷さんも甲谷さんだわ。あたしにあなたを紹介するなんて、あたしよりまだ馬鹿ね。あたしあなたと結婚するまでは甲谷さんは結婚してやらないわよ。これがあなたへの復讐よ。あなたは甲谷さんへ気兼ねして、あたしから逃げることばかり計畫してらっしゃるんでしょう。え？ そうでしょう。それならそれで、支那の女のことなんか、話さなくたって、もつといくらだつて、話すことがありそうなもんだわ、でももういいのよ。あたしももうじき愛国主義者になるんだから。」

宮子は立ち上るとひき抜いた白蘭花で円卓の上を叩き出した。

参木は、ここにもひとり地獄のつれがいたのかと気がつくと、心が楽しげに酒の上で浮き上つた。

「おい君、ここへ来てくれ、愛国主義者は一番豪えらいのだ。僕は君には同情するぞ。恐らく僕は君を一番理解しているにちがいなかろう。理解がなければ愛なんてものはあるものか。だから君、来たまえ、僕は君が好きなんだよ。」

宮子は近寄る参木を突き飛ばした。参木は後の壁へよろけかかると、また宮子の肩へ手をかけた。

「よして頂戴。あたしは支那人じゃなくつてよ。」

「支那人であろうが鱈であろうが、かまうものか。愛国主義者を出したからには、誰であろうと恩人さ。われわれ下級社員に愛国

主義以外の何がある。」

参木は宮子のピジャマの足を掬うように抱き上げると、絨氈の  
真中できりきり速度を加えて廻り出した。と、足が曲つた。二人  
は倒れた。宮子は参木の胸から投げ出されると、そのまま動かず  
に倒れていた。参木は仰向きになつたまま、まだ廻り続ける周囲  
の花壁の中から、突然絞り出された母の顔を楽しげに眺めながら、  
いつまでもにやにや笑い崩れてとまらなかつた。

## 四〇

海港の罷市は特別会議が流会したのにも拘らず、ますます深刻

に進んでいった。支那銀行は翌日からことごとく休業した。錢莊発行の小切手が不通になつた。金塊市場が閉鎖された。<sup>かわせ</sup>為替市場の混乱から外国銀行は無力になつた。そうして、この全く破壊され尽した海港の金融機能の内部では、ただ僅かに對外為替の音だけが、外国銀行の奥底で、鼓動のようにかすかに響いているに過ぎなくなつた。

しかし、倒れたものはそれだけでなかつた。海港のほとんど全部の工場は閉鎖された。群がる埠頭の苦力クリーが罷業し始めた。ホタルのボーイが逃げ始めた。警察内の支那人巡捕が脱出した。車夫が、運転手が、郵便配達が、船内の乗組員が、その他あらゆる外人に雇われているものがいなくなつた。――

船は積み込んだ貨物をそのままに港の中でぼんやりと浮き始めた。新聞の発行が不能になつた。ホテルでは音楽団が客に料理を運び出した。パン製造人がいなくなつた。肉も野菜もなくなり出した。そうして、外人たちはだんだん支那人の新しい強さに打たれながら、海港の中で籠城し始めた。

参木は人通りのほとんどなくなつた街の中を歩くのが好きになつた。ざつとう 雜鬧していた市街が急に森のように変化したことは、彼には市街が一層新しく雑鬧し始めたかのように感じるのであつた。義勇隊は出没する暴徒の爆弾を乗せたトラックを追つ駆け廻した。時々夜陰に乗じて、白い手袋を揃えた支那人の自転車隊が秘密な策動を示しながら、建物と建物との間をひそかな風のようにのつ

ていつた。外国婦人は疲れた義勇団の背後で彼らに食物を運搬した。閉め切られた街並の戸の隙間からは、外を窺う眼だけがぎろぎろ光っていた。

しかし、参木は頻々として暴徒に襲われ続ける日本街の噂を聞き始めると、だんだん足がその方へ動いていつた。日本街では婦人や子供を避難所へ送った後で町会組織の警備隊が勇ましく街を守つて徹宵<sup>てつししょう</sup>を続け始めた。すると、彼の身体の中で、秋蘭を愛した記憶の断片が、俄に彼自身の中心を改め始めた。彼は煙に襲われるよう、道から外れてひとり隠れた。しかし、また彼は日本街の食糧の断絶を聞いて出かけた。邦人暗殺の流言を聞いては出かけた。暴徒の流れ込んだ形跡を感じるとまた出かけた。

そうして彼はいつの間にか、日本人の外廓に従つてぐるぐる廻り  
続けている斥候のような自体を感じた。そのたびに、危害を受け  
た邦人の増加していく話の波が、締めつけられるように襲つて來  
た。

或る日、参木と甲谷はいつもの店へ食事をしに出て行くともう  
食料がなくなつたといつて拒絶された。米をひそかに運んでいた  
支那人が発見されて殺されたという。それに卵もなければ肉もな  
かつた。勿論、野菜類にいたつては欠乏しなければ不思議であつ  
た。

甲谷は外へ出ると参木にいった。

「これじや、飢え死するより仕方がないね。銀行は有つても石ば

つかりだし、波止場に材木は着いても揚げてくれるものはなし、宮子にはやられるし、米も食えぬとなれば、君、こういう残酷な手は、神さまが知つていたのかね神さまが。」

しかし、参木には昨夜からの空腹が、彼の頭にまで攻め昇るのを感じた。すると、彼は彼をして空腹ならしめているものが、ただ僅に自身の身体であることに気がついた。もし今彼の身体が支那人なら、彼は手を動かせば食えるのだ。それに——彼は領土が、鉄より堅牢に、最後の瞬間まで自身の肉体の中を貫いているのを感じないわけにはいかなかつた。

「君、君の休業中の手当が出るのかね。俺の金はもうないよ。しばらく君の手当をあてにするから、そのつもりでいてくれ給え。」

と甲谷はいつた。

「そうだ、すっかり手当のことは忘れていた。いずれなんとかなるだろう。手当が出なけれや、今度はわれわれが罷業ひぎょうをするさ。

「それやそうだな。しかし、そんならその罷業はどういうのだ。

罷業をしたつてお先に支那人にされちや、罷業にもならんじやないか。」

「そしたら支那人と共同だ。」と参木はいつて笑つた。

「それじや、俺たちを一層食えなくするのも、つまり君たちだとなるのか。」

「もう食う話だけは、やめてくれ。僕は腹が空すいてたまらんのだ

。」と参木はいった。

「しかし、休業中の手当を日本人だけ出しといて、支那人に出さぬとなると、これやますますもつて大罷業だね。この調子だと、俺もいつまでたつたつて食えないかもしけないぞ。」

二人は両側の家々の戸の上に、「外人を暗殺せよ。」と書かれた紙片の貼られたのを読みながら、歩いていった。

「とにかく、殺されるためにや、食べなくちゃ。」と参木はいつた。

「いや、この上殺されちゃ、おしまいだよ。」と甲谷はいった。

二人は笑つた。参木は笑いながらふと甲谷と富子を妨害していふ自分という存在について考えた。すると、ここでも彼は不必要

に自分の身体に突きあたらねばならなかつた。

「君は宮子が本当に好きなのかい。」と参木はいつて甲谷を見た。

「好きだ。」

「どれほど好きだ。」

「どういうもんだか俺はあ奴が俺を蹴れば蹴るほど好きになるのだ。まるで俺は蹴られるのが好きなのと同じことだ。」と甲谷はいつた。

「それで君は結婚して、もし不幸な事でも起ればどうするつもりだ。」

「ところが、俺の不幸は今なんだからね。今より不幸のことつてあつてたまるか。」

参木は競子をひそかに愛していた昔の自分を考えた。そのとき、甲谷は競子の兄の権利として、絶えず参木の首を掴んでいた。が、今は、彼は甲谷の首を逆に掴み出したのだ。

「君、君はお杉をどう思う。」と参木はいった。

「あれか、あれは俺にとつちや捨石すていしだよ。」

「あれは君にとつちや捨石かも知れないが、僕にとつちや細君の候補者だつたんだからね。お杉を攻撃したのは君だろう。」

瞬間、甲谷の顔は赧あかくなつた。が、彼は赧さのままでなお反り出すと、

「ふん、俺の捨石になる奴なら、誰の捨石にだつてなろうじやないか。」といつてのけた。

参木は自分の捨石になり出す宮子のことを考えながら、その捨石の、また捨石になり出した甲谷の顔を新しく眺めてみた。

「とにかく、僕にはお杉より適當な女は見当らぬのだ。君の捨石を拾つたって、君に不服はなかろうね。」と参木はいった。

「君、もう冗談だけはよしてくれよ。俺は飯さえ食えないときだ。これからひとつ馳け廻つて、君、飯一食を搜すんだぜ。」

参木は黙つた。すると、しばらく忘れていた空腹が再び頭を擡<sup>もた</sup>げて來た。彼は乞食の胃袋を感じた。頭が胃袋に従つて活動を始め出すると、彼はまたも自然に秋蘭を思い出すのであつた。——ところが、これがいちばん秋蘭のしたかつたことなのだ。とふと彼は考えた。——彼は彼女の牙の鋭さを見詰めるように、自分の腹

に刺し込んで来る空腹の度合を計りながら、食物の豊富な街の方へ歩いていった。

しかし、参木と甲谷の廻つた所はどこも白米と野菜に困っていた。明日になれば長崎から食料が着くという。二人は明日まで空腹を満すためには、暴徒の出没する危険区域を通過しなければならなかつた。だが、今はその行く先にも食物があるかないかさえ分らないのだ。参木は甲谷とトルコ風呂で落ち逢う約束をすると、甲谷を安全な街角から後へ帰して、ひとり食物を捜しに出かけていった。

甲谷は参木と分れると一層空腹に堪えかねた。それにはないものはパンだけではなく煙草もないのだ。街路は夕暮だのに歩いているのは彼ひとりであつた。どこもかしこも閉めてしまつてある戸の隙から、何物が狙つているともしたものがなかつた。それにしても、兄の高重もひどいことをしたものだ。高重と印度人の弾丸が、彼をこんなに混乱させてしまう原因にならうとは、——甲谷は自分の船の材木が港に浮いたまま誰も揚手のないのを思うと、いまさら兄め、兄め、と思うのであつた。

街に革命が起つてゐるのも知らぬらしい一台の黃包車ワングボウツが、甲谷の傍へ近づいて来ると、乗れとすすめた。今頃日本人を乗せて

見つかれば殺されるに決っているのに、乗れとは幸いなので、彼は乗つた。が、さてどちらへ車を向けて走らせて良いものか分らなかつた。彼は乗つたままの方向へ車を走らせていてから、ふと車夫の背中を見た。すると、車夫にとつては、自分が死神と同様なのに、それを乗せて引つぱつて走つている車夫の姿が面白くなつて來た。ひとつ彼が見つかって殺されるまで、死神みたいに彼の後からどこまでも追つかけてやろう——そう思うと、甲谷も先日からの打撃の連続のために、思う存分いたずらがしたくなつた。彼は、「走れ、走れ。」とステッキを振り上げては車の棍かじを叩いてみた。車夫の背中は一層低くなると、スピードを増し始めた。

しかし、いつたいどこまで自分は走ろうとするのだろう。彼は

地図を考えた。一番近いのは山口の家である。——山口の家には不用な女がごろごろしている話をきかされた。それがこの革命で死人と一緒に、どんなことをしているやら。お負けにその女のひとりを譲ろうといったのも山口なのだ。そうだ、山口の家へいつてやろう。甲谷には眼の前の人けのない夕暮が、奇怪な光りをあげたように楽しくなつた。彼は山口が洩もらした第二の商売を思い出した。それは支那人から買い集めて造つた人骨を、医学用として輸出するのである。

「左様、先ず一つの死体の価格で、ロシア人七人の妾めかけが持てる。  
七人。」

そう傲ごうぜん然といつたのも山口だ。今は彼もこの革命で定めし死

人が増して喜んでいることだろう。しかし、それにしても、眼前で自分を引つぱつている車夫までが、いまに見つかって死体となつて山口に買われたなら、——左様、それは俺が売つたと同様だ。金をよこせ、と俺は傲然といつてやろう。

もつと走れ、走れ。——

車夫はあばたの皮膚へ汗のたまつた顔を辻ごとに振り向けて、甲谷を仰ぐと、またステッキの先の方向へ、静まり返つた街路をすたすたと素足の音を立てながら走つていつた。

甲谷は山口が家にいなければ、お柳の家へいこうと思つた。お柳の家なら、彼女の主人は総商会の幹事をしている支那人だ。殊に共産党のあの芳秋蘭は、お柳の主人の錢石山と、気脈を通じて

いるにちがいない。お柳の話では、いつかも芳秋蘭が二階の奥の密室へ来たことがあるという。俺はあの芳秋蘭を殺したなら、——そうだ。俺の材木をすっかり腐らせた奴め。俺はあ奴を殺したなら、そうだ俺があ奴を殺したって、ただそれは一人の人間を殺したというのと同じではないか。

彼は自分の考えていることが、車の上の気まぐれな幻想なのか、それとも真面目なのかどうなのかを考えた。全く、今はもう彼は、空腹と絶望のために、考えることそのことが夢のようで、考えが実行していることとどこで擦れちがつていてるのか分らないのであつた。

彼は周囲の色が、次第に灰白色に変化して来るのを見ていると、

もうあたりがいつの間にか、租界外の危険区域であるのを感じた。

しかし、もう彼の空腹は、迫る危険の度合いを正当に判断するこ  
とさえうるさくなつて、ずるずると車と一緒に立つていつた。彼  
は宮子が今頃どうしているであろうかを考えた。或いはもう先夜  
自分を跳ねつけた行為を後悔して、今は自分の助けにいくのを待  
つているかもしれない。それとも、もう彼女を愛していたスコッ  
トランドの士官にでも救われているのであろうか。それともあの  
甲虫のファイルゼルに、——いや、畜生、死ね、死ね。——

遠くで、遅い柳絮りゆうじよが一面に吹き荒れた雪のように茫茫として舞い上つた。彼はこつそりと盗んでおいた宮子の手巾ハンカチをポケ  
ットから取出すと鼻にあてた。道路の青葉が宮子の胸の匂いで締

められながら沈んでいった。彼は彼女の胸の笑いを腕に感じた。  
彼は彼女のために使用した船の材木量を計算した。だが、何もかも、もう駄目だ。――

そのとき、突然彼を乗せた車が、煉瓦の弓門を潜ろうとすると、  
行手に見える長方形の空間が輝いた。それは六、七十人の暴徒に  
襲われている製氷会社の氷であつた。氷はトラックの上から、ひ  
つかかつた人と一緒に辺り落ちた。アスファルトの上で爆ける氷、  
その氷の間に挟まつて格闘している日本人と支那の群衆――甲谷  
は開いた口へ、物が詰つたように背後へ反り返つた。が、車夫は  
その意志とは反対に、前へ前へと出ようとした。彼は車の上から  
飛び降りた。彼の咄嗟<sup>とっさ</sup>の動きに靡<sup>なび</sup>き出した群衆のいくらかは、彼

の後から駆けて来た。彼は露路へ飛び込むと壁から壁を伝いながら河岸へ出た。そこで、彼はひとりになると、もはや動くことが群衆に見つかるのと同様なのに気がついた。もし動いて逃げるとすれば、河へ飛び込むか再び路へ出て向う側の露路へ逃げ込むかのどちらかだつた。彼は這いながら弓門の見える建物の裾に蹲うすくまつつて街路の方を見た。すると、そこでは、吹雪のように激しく襲つて来た柳の花の渦の中で、まだ格闘が続いていた。トラックの上で、破れた襯衣シャツが花と一緒に廻つていた。長い鉄棒の先が氷に衝あたるたびに、襠ぼろの間からきらりきらりと氷の面が光つた。弓門の傍には、先きまで甲谷の乗つっていた車が、浅黄の車輪を空にあげて倒れていた。その下から二本の足の出ているのは、確に先きま

で生きていた車夫の足にちがいない。傾いた氷の大盤面の上には、血がざるざる辺りながら流れていた。血にまみれた苦力がその氷塊の一つをかかえて走り出した。

甲谷はもうすぐに山口の家があるのを思うと、今から後へひき返すことは、これまで来たことより一層危険なことだと思つた。彼は群衆が氷塊の傍から次の地点まで暴力を移動していくまで、しばらくそこに隠れていなければならなかつた。

丁度、幾条かの夕榮え<sup>ゆうば</sup>が複合した建物の頂上から流れていた。

アスファルトの上に散乱している氷塊が、拾われては投げつけられ、拾われては投げつけられるたびに、その断面がぱつと爆けて、輝きながら分裂しているときである。肩から背中へ裂傷を負つた

日本人が、真赤な旗を巻きつけたように、血をシャツにつけたままトラックを捨てて逃げていった。群衆は彼の後から追っかけた。

甲谷は群衆が彼の前を通り抜けて空虚になると、初めて街路に出て、群衆とは反対に山口の方へ馳け始めた。しかし、そのとき、初めに甲谷を追つて露路へ這入つた群衆のいくらかが、逃げる甲谷を見付けて彼の後から馳けて來た。甲谷はもう疾風のようであつた。走る速力に舞い上る柳の花の中をつきぬけた。背後から氷の破片と罵声がだんだん速度を早めて追つて來た。彼は追つつかれない前に露路へまた逃げ込もうと思つた。しかし、ふと右手の街角にアメリカの駐屯兵の屯とんしょ所が見えた。彼はいきなりその並んだ軍服の列の中へ飛び込んだ。

「諸君、頼む、危険だ。あれが。——」

しかし、駐屯兵は微笑を浮べたまま、追手の群衆を迎えるかのように動こうともしなかつた。動かぬ兵士の中にいつまで停つても、危険は刻々に迫るばかりであつた。彼は一人の兵士の胴を一度くるりと廻ると、木柵の中を脱け出るようそのまま裏へ飛び抜けてまた駆けた。橋があつた。甲谷は橋の上で振り返ると、駐屯兵たちが追つかけて来る群衆を遮断してくれているものかどうかを見た。しかし、もう群衆は笑いながら立つている駐屯兵たちの前を通り過ぎて、彼の手近に迫つていた。甲谷はもう息が切れそうになつた。自分の足の関節の動いているのが分らなかつた。ときどき身体が宙を泳いで前にのめりそうになるのを、ようやく

両手で支えてまた馳けた。橋を渡り抜けると、次の街角から草色をした英國の駐屯兵の新しい服が見えた。英國兵は馳けて来た甲谷を見つけると、たちま忽ち、街路に横隊に並んで銃を向けた。が、それは甲谷を追つて来る支那の群衆を狙つたのであつた。甲谷は双手を上げると、テープを切るランナーのように感謝の情を動かさぬ唇に込めて、駐屯兵の銃の間を馳け抜けた。

甲谷は山口の家の戸口へ着いたときには、もう、ぼんやりとして立つたまま急に言葉ものをいうことが出来なかつた。

「どうした。」

そう山口が出て来ていつても、甲谷はまだしばらくの間黙つていた。山口は甲谷の背中を強く叩いて階段を連れて上つてから水

を飲ました。

「寝るか。」

「寝る。」

と甲谷は一言いうと同時に、傍にあつたベッドに横に倒れた。  
「パンをくれ。パンを。いや、水だ、水だ。」と甲谷はいつた。

## 四二

陽がもう全く暮れてから、ようやく食事にありつくと甲谷は再び元気になつた。彼は今朝から起つた始終の話を山口にした。

「僕は君のこの家に這入つて来るなり、いきなり変異が起つてね。

僕は君のように愛国主義者になつたんだが、もう僕は君より立派なものさ。覺悟をしてくれ。」

建築師の山口はポケットからナイフを出すと、黙つて甲谷に血判状をつくれと迫つた。甲谷はナイフの溝にたまつてゐる黒い手垢を見ると山口の日頃触つてゐる死体の皮膚が、定めしそこに溜り込んでいるのであろうと思つて顎をひいた。

「あ、そうだ。君から僕は金を貰わなくちやならないのだが。」  
と甲谷はいつた。

「今日僕の乗つて來た車夫は、門の下で確に殺されていたんだが、どうだ、それは僕が殺したのと同様なんだよ。僕にその労金をくされられないものかね。僕はもう金がなくなつて困つてゐるんでね、

冗談じゃない、君。」

「駄目だよ、そんなものは。」と山口はいつて相手にしなかつた。  
「だつて、僕がその車にさえ乗らなきあ、あ奴は死人なんかにならなくたつて良かつたんだからね。それにわざわざ君んとこの傍まで追い込んで来たのは、誰だと思う。」

山口は手を振つて甲谷の攻め立てて来る機略をまた圧おさえた。

「そんなことをいいだしたら、今から君の骨ほね賃ちんだつて、もう払つとかなくちやならんじやないか。」

「しかし、他のときじやないよ。僕の材木はもう船から上の見込みがないんだからね。金はもう僕はこれきりだ。」

甲谷はズボンのポケットを揺つて銅貨の音を立てながら、

「君、くなきや、その代り、僕が死人になるまで君の所に厄介になるまでさ。いいか。」

「いや、それも困るぞ。」と山口はいつてナイフを机の上に抛り投げた。

「それじや、僕を困らないようにしてくれたつて、良かろうじやないか。僕は今日は自分の生命いのちを犠牲にして、あの車夫を追つめて來たんだぜ。」

山口は立ち上ると机の引出から蠅燭を取り出した。

「おい君、地下室へいこう。俺の製作所を見せてやろう。」

甲谷は先に立つた山口の後から土間を降りると、真暗な黴臭いかび四角な口から梯子はしごを伝つて地下室へ降りた。そこで、山口は急に

振り返つて甲谷を見ると、探偵物の絵のように蠟燭の光りの底で眼を据えた。

「もうここまで這入ればおしまいだぞ。」

「なんだ。生命まで取ろうというのか。」と甲谷はいつて立ち停つた。

「勿論生かしておいや、明日から俺のパンまでなくなるさ。」

二人はまた奥の扉を押して進んだ。すると、急に甲谷の足は立ち竦んだ。<sup>すく</sup>壁にぶらりと下つた幾つもの白い骨の下で、一人の支那人が刷毛<sup>はけ</sup>でアルコールの中のち切れた足を洗つていた。甲谷は骨の整理をするからにはいざれこれほどのことはするであろうと思つていた。しかし、よく見ると、骨を入れた槽の縁が円く盛り

上つてぎらぎらと青白く光りながら滑らかに動いていた。それは重なり合つて這い出ようとする虫の厚みであつた。彼は足元から這い上つて来る虫のぞろぞろした冷い肌を感じると、もうそこに立つていることが出来なくなつた。

「出よう。これだけはもう僕も御免こうむるよ。」

そのとき、彼はふと壁を見ると、そこにかかつてていた白い肋骨の間を、往つたり来たりしている鼠があつた。それは間もなく二足になり、三足になつた。が、それは三足どころではなかつた。しばらく見てゐる中に、一方の隅から渡つて来た鼠の群れが真黒になりながら肋骨の下や口の中から、出たり這入つたりして壁を伝つて下へ降りた。

「君、あれは飼つてあるのかね。」と甲谷は訊ねた。

「そうだ。あれを飼つとくと手数がはぶける。鼠というものは昔から、地上を清めるために生息しているものなんだ。」

蠟燭の光りの中で、大きな影を造つて笑つている山口の顔が、このとき甲谷には恐るべき蛮族のように見えて來た。

「頭の上に革命があるというのに、ここで君は始終そんなことを考へてゐるんだね。」と甲谷はいった。

「何アに、革命といつたつて、支那の革命じやないか。弱る奴は白人だけさ。良い加減に一度ヨーロッパの奴を捻じ上げとかないと、いつまでたつたつて馬鹿にしやがる。今日こそアジヤ万歳だ

。」

山口は鼠の傍へよつていつて手を出した。すると、忽ち鼠の群が音も立てずに地を這つて甲谷の方へ流れて來た。

しかし、甲谷はもう充分であつた。臭氣と不潔さとで嘔吐をもよおしそうになつた彼は、胸を圧えながら梯子を登つて土間へ出了。

### 四三

甲谷が山口からチュウトン系のがつしりと腰の張つた若いオルガを紹介されたのは、それから間もなくであつた。オルガは黙つて初めは笑顔も見せなかつた。しかし、甲谷が参木の友人だと教

えられると同時に、彼女は輝くような笑みを見せた。

「あなたは参木のお友達でいらっしゃいますの。参木はどうしていますかしら？　あたしあの方とは、ここで一週間も一緒に遊んでおりましたわ。」とオルガは早口な英語でいつて甲谷の方へ手を出した。

「そうだ、あいつはここに一週間もいたくせに、とうとうオルガに負けて逃げちゃつた。」と山口は剃かみそり刀に溜つた石鹼の泡を拭きながら、鏡に向つていった。

「ここにあ奴、いたのかい、それは知らなかつたね。そうかい。」

甲谷はうす笑いを浮べながらオルガの顔を見なおした。「どうです、オルガさん、こんどの支那の革命と、あなたのお国の革命と

は違いますか？」

すると、急に山口は鏡の中から甲谷を見て、  
「おいおい、革命の話だけはよしたらどうだ。オルガを泣かして  
しまうだけだ。こいつは革命の話となると、狂人みたいになるか  
らね。」と遮つた。

「しかし、それや何より聞きたいさ。こんな事は、どうなるやら  
さっぱり僕には分らんからね。経験のある人に聞いとかないと、  
材木の処分に困るんだよ。」

「そんなこと聞いたけれど、後でゆつくり聞けばいいさ。俺はこ  
れから、ひと仕事しないと寝られないんだ。」

甲谷はふとそのとき、いつかサラセンで逢つた山口の話を思い

出した。それでは山口は話の通り、オルガを自分に譲ろうというのであろうか。しかし、何事も計画は直ちに実行に移していく山口のことであつた。

「じゃ、君はこれからどつかへ行くのか。」と甲谷は訊ねた。

山口は剃刀を下へ降ろすともう一度鏡を覗きながら、

「君をここへ一人ほつたらかしておいたって、無論よからうね。」

と顎を撫でつつ訊ね返した。

「良いとは、何が良いのだ？」と甲谷は訝しそうに山口を見上げていつた。

「たくさん沢山俺の家には鼠がいるからさ。分らん奴だね。」

「しかし、それは分らんよ。鼠に俺が曳かれて悪ければ、何も君

は出ていかなきあいいじやないか。」

「ところが、そこを出ようというのだから、察して貰おう。早く出ていかないと、君の乗つて来た車夫は拾われてしまうかも知れないからな。それにまだ俺は、お杉の所へもいかなくちやならんのだ。」

甲谷は山口の口からお杉と聞くと、言葉を次ごうとしていた呼吸も思わずはたと止つてしまつた。——甲谷は再びお杉の顔を思い描いた。すると、参木も山口もお杉にした自分の行為を知つていて、ともに胸の底では、ひそかに自分に突つかかつてゐるのではないかと思つた。しかし、彼はたちまち昂然となると、

「お杉か。あれは北四川路八号の皆川だ。」彼はとぼけた笑いを

浮き上らせながら白々しくいつた。

「じゃ、君も行つたことがあるのかい。」

一瞬の間、山口は眉を強めて甲谷を見返した。

「いや、僕はお柳に訊いたのだが。お杉をあんなにしたのは、あれはお柳の仕業でね。氣の毒は氣の毒だが、氣の毒なものは、まだそこにも一人いらつしやるじやないか。」

「俺か？」と山口はいうと、拳を固めて甲谷を殴りつける真似をした。

「馬鹿をいえ。氣の毒なのはこのオルガさんだよ。この夜更けにひとりほつたらかされて行かれちや、たまるまいよ。」

山口は笑いながら帽子をゆつたり冠つた。

「今夜は少々危いが、俺がやられたら後を頼むよ。昨夜は何んでも、芳秋蘭がスパイの嫌疑で仲間から銃殺されたとか、されかけたとかいうんだが、いつか君は、あの女の後を追つかけたことがあつたつけ。」

「殺<sup>や</sup>られたか、芳秋蘭？」と甲谷は思わずいつた。

「いや、そりや真個<sup>ほんと</sup>かどうか、無論分らんが、何んでも日本の男に内通してたというので疑われたらしいんだ。そのうち一つ、俺はある女の骨も貰つて来ようと思つているのさ。」

山口は、ポケットから手帖と手紙を出すと、甲谷を見せた。

「君、俺がもし死んだら、君はこの二人の男に逢つてくれ。一人は李英朴<sup>りえいほく</sup>といつて支那人で、一人はパンヂット・アムリつてい

う印度人だ。この印度人は宝石商こそしているが、実は印度の国民会議派の一人でね。ジヤイランダス・ダウラツトムの高足だ。この男は君と逢つてゐるうちに、君のするべきことをだんだん君に教えていくよ。」

「じゃ、君も今夜はいよいよ死人になるんだな。」

山口はしばらく甲谷を見ていてから急に高く笑い出した。

「そうだ。死人になつたら、俺の家の鼠にやつてくれ。定めし鼠どもも本望だろう。」

「そりや、本望だろう。鼠にだつて、この頃は洒落しゃれたのはいるからね。」

山口は、ともかくもこの場の悲痛な話を冗談にしてしまう甲谷

の友情を感じたのであろう。オルガの肩を叩いて英語でいった。

「おい、お前の好きな参木に逢わしてくれるのも、この男よりも  
いんだからね。甲谷には親切にしないといけないぜ。」

彼は甲谷を振り返った。

「じゃ、失敬、頼むよ。この李の手紙を読んどいてくれないか。  
なかなかの名文だよ。」

甲谷は悠々と笑いながら出ていく山口の後を見ていると、それ  
はたしかに死体を拾いにいくのではなく、この騒動の裏で動くア  
ジヤ主義者としての、彼の危険な仕事が何事があるにちがいない  
とふと思つた。彼は渡された李英朴の手紙を見ると、それは三日  
前にどこからか使いの者に持たして来たものであつた。

山口君、本日の市街の惨案は、そもそもこは誰人の発案にかかるものであろうか。世界は常に公論ある人類の、永久的生存権を有するに非ざれば、必ず毀滅<sup>きめつ</sup>の時日あるであろう。凡そ今回の事件は、中、英、國際の紛争に非ずして、実は黄白消長<sup>かんけん</sup>の関鍵<sup>かんけん</sup>であり、これを換言すれば、即ち、亞洲黃色人種が、白種に滅亡せらるるの先導に非ずして他にはない。試みに思い給え。現在世界に存留する大民族は、即ち黃白の二種にして、彼の黒種紅種は早くも既に白種に征服せられ、米のインディアン、南洋の馬来、アフリカのエグロの如き數十年ならずしてこの種の人種は絶滅し終るであろう。<sup>けだ</sup>蓋し、<sup>かれ</sup>白人は滅種計画を励行し、彼らの大帝国主義の志は、全世界

を統御して後已やまんとす。その心の邪じやにして、その計りの險けんなることかくのごとし。我われ黃種は危機に頻す。五大洲の彼に圧せらるる形勢は既にその四所に蔓延し、一塊の乾淨土かんじようどを剰すは、ただ僅にわが黃人の故郷、亞洲あるのみ。然るに君、一たび試みに亞洲の地図を検し給え。南部の南洋群島、フイリッピン、西部の印度、大陸に接する安南、緬甸ビルマ、香港、澳門マカオも亦すでに彼白人の勢力にして、猶なお、未だ白人の雄心死せざるなり。日と中とは同種同文、唇齒相依る。例えば中国一たび亡びんか、日本も必ず幸いなし。何ぞそれ能く国家の旗まかを高く樹てるを任せんや。嗚呼君、われら、今彼らの滅種政策の下に嫉えん転呼号するもの。然るにわが日中両国を返顧すへんこ

るも、猶お未だ、昏々蒙々<sup>こんこん もうもう</sup>、一に大祥の将<sup>まさ</sup>に臨み亡種の惨を知らざるが如し。願くば君吾<sup>ねがわ</sup>が説に賛成するあらば、共に起<sup>た</sup>ちてこれを図り、併せてわが民族の救援につき討論せんことを請う。

李英朴

山口卓根<sup>たくね</sup>先生

オルガは甲谷の傍へ寄つて来ると、支那婦人の用いる金環<sup>かなわ</sup>の<sup>たく</sup>を手首に嵌<sup>は</sup>めて涼しげに鳴らした。

「ね、甲谷さん、あなた、参木のことを御存知だつたら、教えてちようだい。あたし参木に逢いたいの。」とオルガはいつて寝台

の上に腰を降ろした。

「参木とはさつきまで一緒にいたんだが。しかし先生、僕の食い物を捜しに別れてからどこへいったか、僕にも分らんね。多分、あいつも途中でやられてしまったかも知れないぜ。」と甲谷はいつてオルガの顔の変化を見詰めていた。

「じゃ、もう参木は死んだかしら。」オルガは首を上げて窓の外を見ながら動かなかつた。

「それや、分らんよ。僕だつてここへ来るには死にかかつたんだからね。とにかく外は革命なんだから、何事が起るかさっぱり見当がつかないんだ。あなたたちの革命のときも、こうでしたか。まあ、それから僕に聞かしてくれ給え。」

「あたしたちロシアのときは、何が街で起つているのか誰も知らなかつたわ。ただときどき鉄砲の音がして、街を通つている人があつちへ塊かたまつたり、こつちへ塊つたりして、それも誰も何んにも知らないで、ただわいわいいつてるだけだつたの。そのうちにあたしの父が、こりや革命だつていうの。だけど革命だつていつたつて、革命つて何んのことだか誰も知りやしないでしよう。だから矢つ張り、革命だつて聞かされたつて、ぼんやりして、今に鎮まるだらうと思つて見てているだけなの。それや、今はまるでそんなところは違つてゐるわ。革命つて何んなことだかだいたいでも分つていれば、あたし、革命なんか起るもんじやないとと思うの。……だけど、参木、ほんとうに死んだのかしら。」とオルガはい

つてじつと床に眼を落した。

「それから、どうしたんです、それから。」と甲谷は物珍らしそうに訊き始めた。

「それから、あたしの父が母とあたしとをつれて、とにかく逃げなけれやこれや危いっていうんでしよう。だから、あたしたち、まだ誰も革命だとは気付かないうちに、もうモスクワを逃げて來ました。だけどお金はあたしたち貴族は貴族だけど、いま急につていつたつて、ないものはないんですからね。だからもう赤裸<sup>はだか</sup>同然よ。ただもう逃げればつていうんで逃げたもんだから、旅費はすぐ無くなつちやうし、仕様がないから、無くなつたところで降りて、それからすぐ新聞社へ駆けつけたの。新聞社へ駆けつけ

たのも父の考へで、あたし、父もなかなかそこは考へたものだと今になつて思うのよ。ね、新聞社だつて田舎だから、モスコウの出来事なんかまだ何も知りやしないんだし、モスコウの騒動を今見て來たというように話せば、特種料とくだねが貰えるでしよう。そこを父が狙つたの。うまいでしよう。それでようやく特種料を握つてその旅費のなくなる所まで逃げて来て、そこでまた前のようにモスコウの話と前のところの話をするの。そうすると、またそこでも特種料が貰えるの。丁度あたしたち、そんなことを幾度も幾度も繰り返しながら、革命の波の拡がると競争して逃げ出していたようなものなのね。そうして、とうとう革命があたしたちに追いついたとき、あたしの父は捕まえられて殺されかかつたの。

まあ、そのときつたら、あたし、今でもはつきり覚えてるわ。」

オルガは丁度そのときもそうしたのであろう、胸に両手を縮めて空を見ながら、ぶるぶる慄える恰好をつけたまましばらく黙つて縮んでいた。しかし、どうしたものか、オルガはそのまま話しあうとしていて話さないのであつた。

「なんだ。それから、どうしたんだね。」とまた甲谷はせき立てた。

「あたし、この話をするときは癲癇てんかんが起るのよ。あなた、あたしの身体からだが後ろへ反らないように抱いててよ。」

オルガは甲谷の膝の上へ横に坐つて身を擦りつけた。

「あなた、もしあたしが慄え出したら、あたしの身体をしつかり

抱いてちようだい。そうしたら、あたしもうそれで大丈夫なんだから。」

甲谷はオルガを抱きよせた。

オルガは手品を使う前の小手調のよう<sup>しらべ</sup>に、しばらくの間淡紅色に輝いたパルバラチヤンの指環を眺めたり、耳環を爪さきではじいてみたりしていてから、深い呼吸を面に幾回も繰り返して黙つていた。甲谷は思わずも彼女の身体を反らさないようにとしつかりと抱きかかえた。

「君、大丈夫かい。今から嚇かしちやこのまま逃げるぞ。僕は癪<sup>おど</sup>なんてどうしたらいんか知らないからね、僕にとつちや革命みたいだ。」

「大丈夫よ、しつかりさえ抱いて下されば、そうそう、そうしてあたしが懶え出したら、だんだん強く抱いてつてよ。あたしのお父さんも、いつでもそうしてあたしを抱いて下すつたわ。」

「君のお父さん、まだいるの？」と甲谷は訊いた。

「お父さんはハルピンで亡くなつたわ。だけど、もう革命のときトムスクでお父さん殺されかかつたもんだから、よくまああれまで生きられたもんだと思つてるの。」

「じゃ、君たちトムスクまでも逃げたんかね。」

「ええ、そうなの。あそこはあたしにとつちや忘れられないところだわ。」

「だつて、電話や電信があるのに、よくそこまで新聞の特種が続

いていつたね。」

「そこがあたしたちにも分んなかったの。何んでも革命が起ると一緒に、電話局と電信局とは政府軍と革命軍との争奪の中心点になつたらしいのよ。だもんだから、あそこの機械はすぐ壊されてしまつたらしいのね。もし電話やなんか役に立つたりしちゃ、そりやあたしなんか、トムスクまでは逃げられなかつたにちがいないわ。」

オルガはそういう言葉のひまひまにときどき寒気を感じるよう  
に胴慄いをつづけた。甲谷はオルガの顔色を眺め眺めいつた。

「そりや今夜だつて、こここの租界の駐屯兵は一番電話局と電信局  
とを守つているからね。何んでもそれに水道が危いということだ。

電氣もまだこうして点いてるが、これだつていつ消えっちまうか  
知れたもんじやないさ。君たち、じゃ、汽車はあつたんだね、そ  
のときは？」

「ええ、汽車はあつたわ。だけど、それもトムスクまでよ。あた  
したちトムスクまで逃げて来たら、そこの広場ではもう革命があ  
たしたちより先になつていて、街の人々の集つている中で、怪し  
いものを一人ずつ高い台の上へ乗せて、委員長というのが傍から、  
この男は過去に於て反革命的行為をしたことがあるかどうかって、  
いちいち人々に質問してるの。そうすると集つている街の人々は、  
下の方からそれは誰々何々という男で、宗教心が強くつて慈善家  
で、悪いことは何一つしたことがないというように、証明してる

の。皆の証明がすむとその男はすぐ無罪放免ということになるん  
だけど、あたしの父のように誰も何も知らないところじゃ、まつた  
くもう怪しいと睨まれちゃそれじまいよ。すぐ傍でぽんぽん銃殺  
されちやうの。だもんだから、お父さんがあたしたちから放れて  
ひとりパンを買つてるとき、もうちゃんとつかまつて、いつの間  
にか高い台の上へ立たされてるんでしよう。あたしそのときは  
もう、お父さんの生命はないものと思つたわ。それであたし、た  
だもう空を向いて十字ばかりきつてたの。そうすると、誰だか人  
の中から女の声がし始めて、あたしの父のことしきりに弁明し  
ていてくれるのよ。あたし、誰かしらと思つて見ると、それはお  
母さんじやありませんか。お母さんはもうひとり下から喚わめき立て

て、父のことを、その男はオムスクの冷凍物輸出支局の局員で、英國のユニオン獣肉会社のトラストが北露漁場の漁業権を買収しようとしたとき、反対した男で、北露漁業権をロシアのために保存するのにつとめたとか、北洋蟹工船の建設草案を民衆のためにしたんだとか、それから何んだとかかだとか、なるべく難しそうなことを必死になつて饒舌しゃべつているんでしょう。それでも委員長はお母さんのいうことには何の感動もせずに聞いてるだけなの。

そうするとお母さんはもう真赤になつて、手を振つたり足をばたばたさせたりしながら、やつきになつて来て、しまいにどうしてあんなことを考え出したものやら、アゼルベイジヤンの漁場へ電報で聞き合せたら分る。そこでその男は自分の兄と一緒に、漁業

会社の力を弱めるために、アゼルベイジヤン漁民組合を起すのにつとめたんだといい出したの。そうしたら、今まで黙つていた委員長は、宜しい、と一言いつたのよ。お父さんはもうそしたらすぐ台の上から降ろされたわ。それから、お母さんが、うつかりして降りて来るお父さんの傍へ駆け寄ろうとして、すぐまたそつちを向いて知らぬ顔をしているの。あたし、もうそれからやたらに有り難くなつて、十字ばかり切りながらぶるぶる慄えていたの。そうしたら、今度はあたしが、「——」とオルガはいつたまま黙つてしまふと、甲谷の膝の上で俄にぶるぶる慄え出した。  
甲谷はオルガの身体を<sup>そ</sup><sub>にわか</sub>反らさぬようにしつかりと抱きすくめていった。

「大丈夫か、君、おい。」

オルガは生唾なまつばをぐつと飲み込むように首を延ばした。

「ええ、大丈夫。あたし、なんだかちよつと慄えただけなの。だつて、あのときのことと思うと、それやもうあたし、恐くなるの。あたしそのときも、そこでそのまま癲癇を起しちゃつて、気がついたときは、お父さんがあたしをこうして抱きすくめていてくださったわ。あたしたちそれから、まあそれはそれは、鉄道線路を伝うようにしてハルピンまで落ち延びて來たんだけど、もう全くハルピンまで來たものの、どうして良いか分らないもんだから、支那人に持つて來た宝石を売つたり何んかして、やつと生活はしていたんだけど、いよいよそこにもいられなくなるし、それにま

たハルピンは、やつぱりソヴェートの手が這入つていて不愉快で  
しようがないもんだから、いつの間にやらこんなところまで来て  
しまつたの。だけど、ここではここで、またこれからどうして生  
活していくのか皆目見当がつかないんでしょう。もうそう  
なれば、だいいちその日その日のパンが手に這入らないもんだか  
ら、こんな困つたことつてなかつたわ。今までこれがお母さんで  
これがお父さんだと思つていたのに、浅ましいわね、もうお父さ  
んよりお母さんより、何より自分よ。自分さえパンが食べられれ  
ば後はもうどうなつたつて、いいと思うものよ。あたしこれでも  
なかなか親孝行な方だつたんだけど、ここへ来ちや、もう獸けだものよ。  
それであたし悲しいには悲しかつたけど、売られちやつて来てみ

たら、それが木村っていう日本人の競馬狂人なの。この人は、まああたしを人間だと思ったことは一度もなくつてよ。言葉が一つも通じないもんだから、逢つたらいきなりあたしの腰を抱いてぴしゃぴしゃ叩くの。あたしそれが初めは日本人の礼儀なんだと思つていたわ。そしたらあたしをしばらくしてから競馬場へ連れてつて、自分が負けたらすぐその場であたしを売つちやつたの。それがつまり今の山口なんだけど、でも、木村ほどひどい男つてあたし初めてだつたわ。山口に後で聞いたんだけど、木村はいつもそうなんだつて。お妾さんを沢山いつも貯金みたいに貯めといて、競馬のときになると売り飛ばすんだつて。」

「そうだよ、あの男は狂人だ。」と甲谷はいうと、乾いた唇へ冷

たく触れるオルガの水滴形の耳環の先を舌の先で押し出した。

「あたし、それからここでいろんな日本人に逢つたわ。だけど、参木みたいな人は一人もみないわ。あんな頭（ず）の高い人なんて、ロシア人にだつてなかつたし、支那人にだつてひとりも逢わなかつたわ。の人、でも、殺されたのかしら。」

オルガは窓から見える傾いた橋の足や、停つて動かぬ泥舟を眺めながらいった。

「ね、甲谷さん、あなたどう思つて。」とオルガは急に振り返ると、甲谷の首に腕を巻きつけた。「もうあなたは、ロシアに昔のような帝政が返らないとお思いになつて。どう？」

「それや、もう駄目だ。どつちみち返つたところで、またすぐひ

つくり返されるに定つてゐるさ。」

<sup>きま</sup>

オルガは寒氣を感じたように身を慄わすといった。

「そうかしら、もうロシアは、あたしたちいつまで待つても前のようにはならないかしら。」

「駄目だね。だいいちここがもうこんな騒ぎになるようじや、すぐまたどつかの国も騒ぎ出すよ。」

「あたしたち、でも、まだまだみんなで、昔のようになるのを待つてるのよ。いつまで待つてもこんなじや、あたし、死ぬ方がいい。」

またオルガの身体がぶるぶる前のないように慄えるのを感じると、「君、おい、大丈夫かい。おかしいぜ、おい、君。——」と甲谷

はオルガを揺りながら顔を覗き込んだ。

オルガはハンカチを出して口に銜えた。<sup>くわ</sup>

「あたし、お父さんに逢いたいわ。お父さんはハルピンで宝石を安く買って、それからこんなハンカチに包んでね、ロシアを通り越して、ドイツへいって、そこで宝石を売つてまた帰つて来たのよ。そうすると、それはたいへん儲かつたの。だけど一度モスクウへ用事がなくとも降りなきあ、疑われるもんだから、その降りるのが恐いんだって。あたしのお父さん、あたしにアメリカへ連れてつてやろうつていつてたんだけど、——あたし、お父さんにもう一度逢つてみたい。ああ逢いたい。」

オルガはいきなりまたハンカチを銜えて甲谷の肩に噛みつくよ

うにつかまつた。甲谷はオルガの顔を見た。すると、もうセツと彼女の顔色は変っていた。

「君、どうした、しつかり頼むよ。おい、おい。」と甲谷はいつた。

オルガは頬をぺつたりと甲谷の首にくつつけたまま黙つて静に、びりびり揺れ続けた。すると、指さきの固く中に曲つたオルガの手が青くなつた。<sup>そ</sup>頭がだんだんに反り始めた。眼はじつと前方の一点に焦点を失つたまま開いていた。歯がぎりぎり鳴り出すると、強く甲谷の首がオルガの片腕に締めつけられた。と、「あッ。」とオルガは叫んだと思うと、一層激しく甲谷の膝の上で慄え出した。

甲谷はオルガを寝台の上へ寝させるとそのまま手を放さずに抱きすぐめた。汗が二人の身体から流れて來た。甲谷の首を締めつけつつ懲えているオルガの顔が真青になつて來た。すると、耳から唇へかけてびこびこ痙攣しながら、間もなく赧<sup>あか</sup>く変つて來た。甲谷は弓のように反り始めたオルガを抱きすぐめたまま、両手と足と身体で間断なく摩擦し始めた。しかし、突き上げて来る弾力と捻れる身体の律動に、甲谷はいつとはなしに、格闘するそのものが彼女の病体ではなくて、自分自身だと思い始めた。

間もなく、甲谷の摩擦は効果があつたのであろう。オルガは大きな呼吸を一度落すと、そのままぴつたりと身体の痙攣をとめてしまつた。すると、彼女の顔色は前のように安らかに返つて来て、

だんだん正しい呼吸を恢復させながら眠り始めた。甲谷はオルガを放して窓を開けると風を入れた。黒々とした無数の泡粒を密集させた河の水面は、灯<sup>ひ</sup>の氣を失つたまま屋根の間に潜んでいた。

その傍を、スコットランドの警備隊を乗せた自動車がただ一台疾走していつてしまうと、後はまたオルガの呼吸だけが聞えて来た。  
——さて、これでよし、と。——

甲谷は汗にしめつて横たわっているオルガを花嫁姿に見たてながら、上着を脱いで釘にかけた。それから、石鹼壺の中でじやぶじやぶ石鹼の泡を立てて顔に塗ると、山口の置いていつた剃刀の刃を横に拡げてひと刷き頬にあててみた。

## 四四

外は真暗であつた。所々に塊かたまつた車夫たちは人通りの全くなくなつた道路の上に足を投げ出して風しらみを取つていた。道路に従つて、冬枯つるの蔓のよう絡まり合つた鉄条網の針の中を、義勇隊の自動車が抜剣の花を咲かせて這つていった。すると、どこかに切り落されていた頭髪が、車体の巻き上の風のまにまにふわりふわりと道路の上を漂つた。その道路では一人の子供が、アスファルトの上で微塵みじんに潰れている白い落花生らっかせいの粉を、這いつくばつて舐めていた。

参木は泥溝どろどぶに沿つて歩いていった。彼はふとお杉のいる街の

方を眺めてみた。もう彼は長い間お杉のことを忘れていたのに気がついたのだ。自分のために首を切られたお杉、自分を愛して自分が愛せられることを忘れたお杉、お杉はいつたい、今自分がお杉のことをこうして考えている間、何を今頃はしているのだろう。

しかし、彼の断滅する感傷が、次第に泥溝の岸辺に従つて凋んしほで來ると、忽ち、朝からまだひとむしりのパンも食べていない空腹が、お杉に代つて襲つて來た。彼は身体がことごとく重量を失つてしまつて、透明になるのを感じた。骨のなくなつた身体の中で前と後の風景がごちやごちやに入り交つた。彼は橋の上に立ちまじで停るとぼんやり泥溝の水面を見降ろした。その下のどろどろした

水面では、海から押し上げて来る緩慢な潮のために、並んだ小舟の舟端が擦れ合つてはぎしげし鳴りつつ揺れていた。その並んだ小舟の中には、もう誰も手をつけようともしない都会の排泄物が、いっぱいに詰りながら、星のうす青い光りの底で、波々と拡つては河と一緒に曲つっていた。参木は此処を通るたびごとに、いつもこの河下の水面に突き刺さつて、泥をくわえたまま鏽びついていた起重機の群れを思い浮べた。その起重機の下では、夜になると、平和な日には劉髮の少女が茉莉の花を頭にさして、ランプのホヤを売つていた。密輸入の伝馬船てんませんが真黒な帆を上げながら、並んだ倉庫の間から脱け出で来ると、魔のようにあたりいっぱいを暗くしてじりじり静に上つていつた。

参木はそれらの帆の密集した河口で、いつか傷ついた秋蘭を抱きかかえて、雨の中を病院まで走った夜のことと思い出した。あの秋蘭は今は何をしているだろう。

そのとき、参木は河岸の街角から現れて来た二、三人の人影が、ちらちらもつれながら彼の方へ近づくのを感じた。すると、それらの人の塊りは、急に声をひそめて彼の背後で動きとまつた。彼は険悪な空氣の舞い上るのを沈めるように、後ろを振り向こうとしたがる自身を撫でながら、そのまま水面を眺めていた。しかし、いつまでたつても停つた人の気配は動こうとしなかつた。彼はひよいと軽く後を振り返つた。すると、星明りであばたをぼかした数人の男の顔が、でこぼこしたまま、彼を取り巻いて立つていた。

彼はまた欄干に肱をつくと、それらの男たちの群れに背を向けた。すると、二本の腕が静にそつと、まるで参木の力を驗すがよう、後から彼の脇腹へ廻つて來た。彼の身体は欄干の上へ浮き上つた。彼は湿つた欄干の冷たさをひやりと腰に感じながら、ただ何もせず、じつと男の肩へ手をかけて周囲の顔を眺めていた。と、突然、停つていた人の塊りが、彼に向つて殺到した。瞬間、彼は空が二つに裂け上るのを感じた。同時に、彼は逆さまに堅い風の断面の中へ落ち込んだ。――

ふと、参木は停止した自分の身体が、木の一端をしつかり掴んでいるのに気がついた。――しかし、ここは――彼は足を延ばしてみると、それはさきまで見降ろしていた船の中であつた。彼は

周囲を見廻すと、排泄物の描いた柔軟なうす黄色い平面が首まで自分の身体を浸していた。彼は起き上ろうとした。しかし、さて起きて何をするのかと彼は考えた。生きて来た過去の重い空気の帯が、黒い斑点をぼつぼつ浮き上がりせて通りすぎた。彼はそのまま排泄物の上へ仰向きに倒れて眼を閉じると、頭が再び自由に動き出すのを感じ始めた。彼は自分の頭がどこまで動くのか、その動く後から追つ駆けた。すると、彼は自分の身体が、まるで自分の比重を計るかのようにすっぽりと排泄物の中に倒れているのに気がついて、にやりにやりと笑い出した。――

しかし、自分はいつまでこうしているのであろう。――服の綿布がだんだん湿りを含んで緊しまつて來た。参木は舟の中から橋の上

を仰いでみた。すると、まだ支那人たちは橋の欄干からうす黒い顔を並べて彼の方を眺めていた。彼はまたじつとしたまま、彼らが橋の上から去るのを待つていなければならなかつた。——ああ、しかし、船いっぱいに詰つたこの肥料の匂い——これは日本の故郷の匂いだ。故郷では母親は今頃は、緑ろくしょう 青せい の吹いた眼鏡に糸を巻きつけて足袋たびの底でも縫つてるだろう。恐らく彼女は俺が、今こここのこの舟の中へ落つこつていることなんか、夢にも知るまい。——いや、それより秋蘭だ。ああ、あの秋蘭め、俺をここからひき摺すくり上げてくれ。俺はお前にもう一眼ひとめ 逢わねばならぬ。俺はお前のいったマジソン会社へこれから行こう。しかし、俺は秋蘭に逢つてきて何をしようというのである、とまた彼は考えた。

だが、彼は逢うたびに彼女にがみがみいつた償いを一度この世でしたくてならぬのだ。

しかし、ふとそのとき、参木は仰向きながら、秋蘭の唇が熱を含んだ夢のように、ねばねばしたまま押し冠かぶさつて来たのを感じた。すると、今まで忘れていた星が、真上の空で急に一段強く光り出した。彼は橋の上を見た。橋にはもう支那人の姿は見えなくて、ぼろぼろと歪ゆがんだ漆喰しっくいの欄干だけが、星の中に浮き上つていた。彼は船から這い上ると、泥の中に崩れ込んでいる粗あらい石垣を伝つて道へ出た。彼はそこで、上衣とズボンを脱ぎ捨てて襯衣シャツ一枚になると、一番手近なお杉の方へ歩いていった。しかし、彼は今朝甲谷と別れるとき、お杉の家の所在を聞いたのは聞いた

のだが、今頃お杉がまだしかにそこにいるかどうかは明瞭に分らなかつた。もしお杉がそこにいなければ、もう一度橋を渡つて、何一つ食い物のない自分の家まで帰らなければならぬのだつた。それなら、もう行く先きにお杉がいようといまいと、彼にはただ行くより他に道はなかつた。

彼は歩きながら、もう危険区劃を遠く過ぎて來てゐるのを感じると、しばらく忘れていた疲労と空腹とにますます激しく襲われ出した。彼はお杉のいる街の道路がだんだん家並みの壁にせばめられていくに従つて、いつか前に、度々<sup>たびたび</sup>ここを通つたときに見た油のみなぎつた豚や、家鴨<sup>あひる</sup>の肌が、ぎらぎらと眼に浮んで来つづけた。そのときこここの道路では、いくつも連つた露路の中に霧

のようにつぱいに籠つて動かぬ塵埃ほこりの中で、ごほんごほんと肺病患者が咳をしていた。ワンタン売りの煤すすけたランプが、揺れながら壁の中を曲つていつた。空は高く幾つも折れ曲つていく梯子はしごの骨や、深夜ひそかにそつと客のような顔をしながら自分の車に乗つて楽しんでいた車夫や、でこぼこした石ころ道の、石の隙間に落ち込んでいた白魚や、鋳ついた錠前ばかりぎつしり積み上つた古金具店の横などでは、見るたびに剥げ落はちていく青い壁の裾にうずくまつて、いつも眼病人や阿片患者が並んだままへたばつていたものだ。

参木はようやく甲谷に教えられたお杉の家を見つけると戸を叩いた。しかし、中からはいつまでたつても、戸を開けようとする

物音さえしなかつた。彼は大きな声で呼んでは支那人に聞かれる心配があつたので、間断なく取手の鎧<sup>かん</sup>をこつこつと戸へあてた。すると、しばらくしてから、火を消した家の中の覗き口がかすかに開いた。

「僕は参木というのですが、この家にお杉さんという人がいませんか。」と参木はいった。

忽ち、戸がぱつたりと落ちると、潜り戸<sup>くぐ</sup>が開いて、中から匂いを立てた女が突然参木の手をとつた。参木も黙つて曳かれるままに戸をくぐると、顔も分らぬ女の後から、狭い梯子を手探りで昇つていつた。彼はときどき軽く女の足で胸を蹴られたり、額を腰へ突きあてたりしながら、ようやく二階の畳の上へ出た。そこで、

参木はこれはお杉にちがいないと思うと、初めていった。

「あなたはお杉さんか。」

「ええ。」

低く女が答えると、参木は感動のまま、ねつとりと汗を含んで立っているお杉の肩や頬を撫でてみた。

「しばらくだね。僕はいま河へほうり込まれて這い上つて來たばかりなんだが、何んでもいいから着物を一枚貸してほしいね。」

すると、お杉はすぐ火も点けずに戸棚の中をがたがたと搔き廻していくから、また手探りのまま黙つて浴衣を一枚手渡した。

「君、火を点けてくれないか。こう暗くちやどうしようもないじやないか。」

しかし、お杉は「ええ。」と小声で返事をしたまま、矢張りいつまでたつても電気を点けようともせず、彼から離れて立つていった。参木はお杉が火を点けようとしないのは、顔を見られる羞恥<sup>はずか</sup>さのためであろうと思つたので、着物を着かえてしまうと、その場へぐつたり倒れたまま黙つていた。

しかし、あまりいつまで待つてもお杉が火を点けようとしないのを考えると、部屋の中には、今自分に見られては困るものが沢山あるのにちがいないと彼は思つた。とにかく、あまりに自分の這入つて来たのは突然なのだ。殊に、お杉は自分の所にいたときは違つて春婦である。いや、それとも、もしかしたらこの部屋の中には、自分以外の客が他に寝ているかも知れたものではない

のである。

参木はもう火のことでお杉を羞しがらせることは慎しみながら、多分そのあたりにいるであろうと思われる彼女の方に向つていつた。

「君、何か食べるものはないだろうかね。僕は朝から何も食べていいんだが。」

「あら。」とお杉は低くいうと、そのまま何もいおうともしなければ動こうともしなかつた。

「じゃ、無いんだな、あんたのところも。」

「ええ、さきまであつたんだけど、もうすっかりなくなつてしまつたの。」

参木は今は全く力の脱けるのを感じた。これから朝まで何も食べずにすごさねばならぬと思うと、もう早や頭の中では、今朝から見て來た空虚な空ばかりがぐるぐると舞い始めた。しかし、そのまま黙つていては、久し振りにお杉と逢つた喜びも、彼女に伝えることさえ出来なくなるのだつた。

「君とはほんとにしばらくだね。お杉さんのここにいるのは、実は今日初めて甲谷に聞いたんだが、僕んとことは近いじゃないか。どうして今まで報せなかつたんだ。」

すると、返事に代つてお杉の啜り上げる声がすぐ手近の畳の上から聞えて來た。参木は彼女がお柳の所を首になつたいつかの夜、自分の前でそのように泣いたお杉の声を思い出した。——あのと

きは、あれはたしかに自分が悪かつた。もしあのとき自分がそのまま、お柳のするままにしておいたら、お杉はお柳の嫉妬には逢わずに首にならなくともすんだのだ。殊に今のような春婦にまでにはならなくとも。――

「あんたが出ていったあの夜<sup>よ</sup>は、僕はとにかく急がしくつて家にいられなかつたんだが、しかし、お杉さんが僕の所にあのままでくれたつて、ちつともさしつかえはなかつたんだ。僕もあのとき、あんたにはそういうつて出たはずじやなかつたかね。」

参木はふと、お杉がどうしてあのまま自分の所から出ていく気になんかなつたのだろうかと、いまだに分らぬ節の多かつたその日のお杉の家出について考えた。たとえその夜、甲谷がお杉を追

い立てるようなことをしたとはいえ、それならそれで、お杉も売ば  
女いじょにならずともすますることは出来たのではないか。しかし、そ  
う思つても、お杉を売女にした責任は参木からは逃れなかつた。

——参木は久しく忘れていた鞭を、今頃この暗中で厳しくこんな  
に受け出したのを感じると、それなら、いつそのこと、このまま  
火を点けずにおいてくれるのは、むしろこつちのためだと思うの  
だつた。

「あれから一度、お杉さんと街であつたことがあつたね。あのと  
きは僕は君の後からしばらく車で追わしたんだが、あんたはそれ  
を知つてるだろうね。」

「ええ。」

「そんならあのときもうあんたはここにいたんだな。」

「ええ。」

しかし、参木は、そのとき激しく秋蘭のことで我を忘れ続けていた自分を思い出した。もしあの日秋蘭とさえ逢つて来ていなければ、そのままお杉の後をどこまでもと自分は追い続けていたにちがいなかつた。だが、何もかももう駄目だ。自分は今でもある秋蘭めを愛している。自分はあ奴の主義にかぶれているんじやない。俺はあ奴の眼が好きなんだ。あの眼は、いまに主義なんてものは捨てる眼だ。あの眼光は男を馬鹿にし続けて来た眼光だ。お杉の傍にいるこの喜びの最中に、まだ秋蘭のことを、いつとはなしにいきまき込んで頭の中へ忍び込ませている自分に気がつくと、

彼は闇の中で、のびのびと果しもなく移動していく自由な思いの限界の、どこに制限を加えるべきかに迷い出した。確に、自分は今は秋蘭のことよりお杉のことを考えねばならないときだ。お杉は自分のためにお柳から食を奪われ、甲谷の毒牙にかかり、そしてこのじめじめした露路の中へ落ち込んだのではないか。しかし、さてお杉のことを今考えて、彼女を自分はどうしようというのであろう。——彼はお杉を妻にしている自分を考えた。それは己惚うぬぼれでなくとも必ずお杉を喜ばすことだけはたしかなことだ。

彼はお杉が首になつたその夜のお杉の、あの初心な美しさに心を乱された不安さを思い浮べた。それがその夜自分に變つて、甲谷がお杉に爪をかけたと分ると同時に、忽ち自分はお杉を妻にせず

してすんだ自分の失われなかつた自由さを喜んだのだ。それに、今自分が甲谷に变つて、わざわざ自分のその失われなかつた自由をお杉に奪われようと望むとは。——彼は自分のその感傷が空腹と疲労とに眼のくらんでいる結果だとは思つたが、しかしたしかに、泥を潜つて来たお杉の身体を想像することによつて、参木は前より一層なまめかしく、お杉を感じ始めて来るのだつた。彼はいまこそ甲谷がお杉に手を延ばしたと同様に、自分もお杉に手を延ばすことの出来るときであつた。しかもそれは、彼が一時ひそかに望んで達することの出来なかつた快樂ではないか。俺はお杉の客のようになろう。——しかし、彼の心がばつたりそのまま行き詰つて、お杉の膝を急に探ろうとしかけると、また彼はお杉に

触るといつも必ず起つて来る良心に、ぴつたり伸び出る胸をとめられた。たしかにお杉を見て今急に客のようになることは、それはお杉をもはや泥だと思うことによつて責任を廻避したがるおのれの心の、まるで滴るような下劣な願いにちがいない。

「お杉さん、僕は今夜は疲れているので、もうこのまま休ませて貰つたつてかまわないかね。」と参木はいった。

「ええ、どうぞ。ここに床があるから、ここで休んではよ。夜が明けたらあたし食べ物を貰つてきとくわ。」

「有り難う。」

「電気も今夜は切られてしまつてるので、真暗だけど、我慢をしてね。」

「うむ。」

「うむ」と参木は手探りでお杉の声の方へ近よつていつた。手の先が冷い畳の上からお杉の熱く盛り上つた膝に触つた。お杉は参木の身体を床の上へ導くと、彼に蒲団をかけながらいつた。

「今頃街なんか歩いて、危いわね。どこにもお怪我はなかつたの。」

「うむ、まあ怪我はなかつたが、君はどうだつた?」

「あたしは家からなんか出ないわ。毎日いつぺん日本人から焚き出しせ貰つて来るだけ。いつやまるのかしら、こんな騒動?」

「さア、いつになるかね。しかし、明日は日本の陸戦隊が上陸してくるから、もうこの騒動は続かないだろう。」

「ほんとに早くおさまるといいわ。あたし毎日、もう生きている気がしないのよ。」

参木は自分の身体からお杉の手の遠のいていくのを感じると、お杉はどこで寝るのであろうと思つていった。

「お杉さんは寝るところはあるのかね。」

「ええ、いいのよ。あたしは。」

「寝るところがないなら、ここへお出でよ。僕はかまわないんだから。」

「いいえ、そうしていて。あたし眠くなれば眠るからいいわ。」

「そうか。」

参木はお杉が習い覚えた春婦の習慣を、自分に押し隠そと努

めているのを見ると、それに対して、客のようになり下ろうとした自分の心のいまわしさにだんだんと胸が冷めて来るのであつた。しかし、あんなにも自分を愛してくれたお杉、その結果がこんなにも深く泥の中へ落ち込んでしまったお杉、そのお杉に暗がりの中で今逢つて、ひと思いに強く抱きかかえてやることも出来ぬということは、何んという良心のいたずらであろう。前にはお杉を、もしや春婦に落すようなことがあつてはならぬと思つて抱くこともひかえていたのに、それに今度は、お杉が春婦になつてしまつていることのために、抱きかかえてやることも出来ぬとは。——「お杉さん、マッチはないか。一遍お杉さんの顔が見たいものだね。良かろう。」

「いや。」とお杉はいつた。

「しかし、長い間別れていたんじやないか。こんなに顔も見ずに暗がりの中で饒舌しゃべつていたんじや、まるで幽霊と話しているみたいで氣味が悪いよ。」

「だつて、あたし、こんなになつてしまつているとこ、あなたに今頃見られるのいやだわ。」

参木は暗中からきびしく胸の締つて来るのを感じた。

「いいじやないか、あんたと別れた夜は、あれは僕も銀行を首になるし、君もお柳のとこを切られた日だつたが、男はともかく女は首になつちや、どうしようもないからね。」

二人はしばらく黙つてしまつた。

「あなたお柳さんにお逢いになつて。」とお杉は訊ねた。

「いや、逢わない。あの夜あんたのこと喧嘩してから一度もだ  
。」

「そう。あの夜はお神きん、それやあたしにひどいことをいつた  
のよ。」

「どんなことだ？」

「いやだわ、あんなこと。」

嫉妬にのぼせたお柳のことなら、定めて口にもいえないことを  
いつたのにちがいあるまい。あのときは、風呂場へマツサージに  
来たお柳をつかまえて、戯れにお杉を愛していることを、自分は  
ほのめかしてやつたのだつた。すると、お柳はお杉を引き摺り出

して来て自分の足もとへぶつけたのだ。それから、自分はお杉に代つてお柳に詫びた。すると、ますますお柳は怒つてお杉の首を切つたのだ。ああ、しかし總てがみんな戯れからだと参木は思つた。それに自分はお杉のことを忘れてしまつて、いつの間にかことごとく秋蘭に心を奪われてしまつっていたのである。しかし、今は彼は、だんだんお杉が身内の中で前のように暖まつて来るのを感じると、心も自然に軽く踊つて來るのだつた。

「お杉さん、もう僕は眠つてしまふよ。今日は疲れてもうものもいえないからね。その代り、明日からこのまま居候をさせて貰うかもしけないが、いいかねあんたは？」

「ええ、お好きなまでここにいてよ。その代り、汚いことは汚い

わ。明日になつて明るくなればみんな分ることだけど。」

「汚いのは僕はちつともかまわないんだが、もうここから動くのは、だんだんいやになつて來た。迷惑なら迷惑だと今の中につてくれたまえ。」

「いいえ、あたしはちつともかまわないわ。だけど、ここは参木さんなんか、いらつしやるところじやないのよ。」

参木は自分のお杉にいつたことが、すぐそのまま明日から事実になるものとは思わなかつた。だが、事実になればなつたで、もうそれもかまわないとと思うと、彼はいつた。

「しかし、一人いるより、今頃こんな露路みたいな中じや、二人でいる方が氣丈夫だろう。それとも、お杉さんが僕の家へ来てい

るか、どつちにしたつてかまわないぜ。」

すると彼女は黙つたまま、またしくしく暗がりの中で泣き始めた。参木はお杉がお柳の家で初めてそのように泣いたときも、いま自分がいつたと同様な言葉をいつてお杉を慰めたのを思い出した。しかも、自分の言葉を信じていくたびに、お杉はだんだん不幸に落ち込んでいったのだ。

しかし、彼がお杉を救う手段としては、あのときも、その言葉以外にはないのであつた。生活の出来なくなつた女を生活の出来るまで家においてやることが悪いのなら、それなら自分は何を為すべきであつたのか。ただ一つ自分の悪かつたのは、お杉を抱きかかえてやらなかつたことだけだ。だが、それはたしかに、悪事

のうちでも一番悪事にちがいなかつた。

それにしても、まあお杉を抱くようになるまでには、自分はどれだけ沢山なことを考えたであろう。しかも、それら数々の考えは、ことごとく、どうすればお杉を、まだこれ以上<sup>いじ</sup>虐め続けていかれるであろうかと考えていたのと、どこ一つ違つたところはないのであつた。

「お杉さん、こちらへ来なさい。あんたはもう何も考え方や駄目だ。考えずにここへ来なさい。」

参木はお杉の方へ手を延ばした。すると、お杉の身体は、ぽつてりと重々しく彼の両手の上へ倒れて來た。しかし、それと同時に、水色の皮襖<sup>ピーオ</sup>を着た秋蘭が、早くも参木の腕の中でもう水々し

くいっぱいに膨れて来た。

お杉は喜びに満ち溢れた身体を、そつと延ばしてみたり縮めてみたりしながら、もう思い残すことも苦しみも、これですっかりしまいになつたと思つた。明日までは、もう眠るまい。眠るといつかの夜のように、——ああ、そうだ、あの夜はうつかり眠つてしまつたために、闇の中で自分を奪つてしまつたものが、参木か甲谷か、とうとうそれも分らずじまいに今日まで來たのだ。しかも、その夜はそれは最初の夜であつた。あれから今日まで、あの夜の男はあれは参木か甲谷か、甲谷か参木かと、どれほど毎日毎夜考え続けて來たことだろう。しかし、今夜は——今夜もあの夜

のようすに部屋の中は真暗で、参木の顔さえまだ見ないことまでも同様だが、しかし、今夜の参木だけは、これはたしかに本当の参木にちがいない。でも、あの夜の参木が、もしあれが本当の参木なら、今夜のこの参木とは何と違つてゐるのであろう。

お杉は眠つてゐる参木の身体のここかしこを、まるで処女のよううに恐々<sup>こわごわ</sup>指頭<sup>ゆびさき</sup>で压えていきながら、ああ、明日になつて早く参木の顔をひと眼でも見たいものだと思つた。すると、お柳の浴場の片隅から、いつも自分がうつとりと見ていた日の、参木のいろいろな顔や肩が浮んで來た。しかし、間もなくそれらの参木の白々とした冷たい顔も、忽ち夜ごと夜ごとに自分の部屋へ金を落していく客たちの、長い舌や、油でべつたりひつついた髪や、堅

い爪や、胸に咬みつく歯や、ざらざらした鮫肌や、阿片の匂いのした寒い鼻息などの波の中できらきらと浮き始めると、彼女は寝返り打つて、ふつと思わず歎息した。しかし、もし明日になつて参木が部屋の中でも見廻したら、何と彼は思うであろう。南の窓の下の机の上には、蘇州の商人の置いていつた杭州人形や、水銀剤や、枯れ凋んだサフランや、西蔵産の蛇酒の空瓶が並んでいるし、壁には優男の役者の黄金台の画が貼つてあるし、いや、それより、何より参木の着ているこの蒲団は、もう男たちの首垢で今はぎらぎら光つているのだつた。しかも、敷布はもう洗濯もせず長い間そのままだ。――

お杉は蒲団の中からそつと脱け出すると、手探りながら杭州人形

と蛇酒と水銀剤とを押入の中へ押し込んだ。それから、抽出か  
 ら香水を取り出して蒲団の襟首へ振り撒くと、また静に参木の胸  
 へ額をつけて円くなつた。しかし、もうこんなにしていられるこ  
 とは、恐らく今夜ひと夜が最後になるにちがいない。すると、お  
 杉は、この恐ろしい街の騒動が一日も長く続いてくれるようにな  
 念じないではいられなかつた。明日になつて、日本の陸戦隊が上  
 陸して来れば、いつもの暴徒のように街はまた平音無事になる  
 ことだらう。そうすれば参木もここから出ていつて、もう再びと  
 はこんな所へ来ないであらう。——お杉は参木の匂いを嗅ぎ溜め  
 ておくように大きく息を吸い込むと、ふと、お柳の家を首になつ  
 た夜の出来事を思い出した。そのときは、お柳は何ぜとも分らず

いきなり自分の襟首を引き摺つていって、湯気を立てて横わつて  
いる参木の胴の上へ投げつけたのだ。自分はそのまま浴場に倒れ  
て泣き続いていると、またお柳は自分を引き摺りながら、出てい  
った参木の後から追っかけて、もう一度彼の上へ突き飛ばした。

しかし、その参木が、ああ、今は自分のここにいるのだ、ここに。  
——あのときから今までに、自分は幾度この参木のことを思い続  
けたことだろう。ああ、だけど、今参木はここにいるのだ。——

自分はあの夜、参木の家へ泣きながらとぼとぼいつて、誰もいな  
い火の消えた二階をいつまでぼんやりと眺めていたことであろう。  
それにようやく参木が帰つて来たと思つたら、それは参木ではな  
くつて甲谷であつた。

お杉は参木があの夜限り帰らずに、自分を残して家を出ていつてしまつた日の、ひとりぼんやりと泥溝の水面ばかり眺め暮していた侘しさを思い出した。そのときは、あの霧の下の泥溝の水面には、模様のように絶えず油が浮んでいて、落ちかかつた漆喰の横腹に生えていた青みどろが、静に水面の油を舐めていた。その傍では、黄色な雛の死骸が、菜つ葉や、靴下や、マンゴの皮や、藁屑わらくずと一緒に首を寄せながら、底からぶくぶく噴き上つて来る真黒な泡を集めては、一つの小さな島を泥溝の中央に築いていた。——お杉はその島を眺めながら、二日も三日もただじつと参木の帰つて来るのを待つていたのだ。——しかし、明日から、もし陸戦隊が上陸して来て街が鎮まれば、またあの日のように、自分は

ここでぼんやりとし続けていなけばならぬのだろう。そのときには、ああ、またあのざらざらした鮫肌<sup>さめはだ</sup>や、くさい大蒜<sup>にんにく</sup>の匂いのした舌や、べつたり髪にくついた油や、長い爪や、咬みつく尖つた乱杭歯<sup>らんぐいば</sup>やが——と思うと、もう彼女はあきらめきつた病人のように、のびのびとなつてしまつて天井に拡<sup>ひろが</sup>つてゐる暗の中をいつまでも眺めていた。

上海 534

## 付録

## 序〔初版〕

この作の最初の部分は昭和三年十月に改造に出し、それから順次同雑誌へ発表を続け、最後も昭和六年十月に改造へ出した。全篇を纏めるにあたつて、突然上海事變シャンハイじへんが起つて来たので題名には困つたが、上海という題は前から山本氏との約束もあり、どうしたものか自然に人々もそのように呼び、またその題以外に素材と一致したものが見当らないので、そのまま上海とすることに

した。この作の風景の中に出で来る事件は、近代の東洋史のうちでヨーロッパと東洋の最初の新しい戦いである五三十事件であるが、外国関係を中心としたこののつべきならぬ大渦を深く描くということは、描くこと自体の困難の他に、発表するそのことが困難である。私は出来得る限り歴史的事実に忠実に近づいたつもりではあるが、近づけば近づくほど反対に、筆は概観を書く以外に許されない不便を感じないわけにはいかなかつた。したがつて個有名詞は私一個人で変更し、読者の想像力に任す不愉快な方法さえ随所でとつた。

五三十事件は大正十四年五月三十日に上海を中心として起つた。中国では毎年この日を民族の紀念日としてメーデー以上の騒ぎを

するが、昭和七年の日支事変の遠因もここから端たんを発している部分が多い。

私はこの作を書こうとした動機は優れた芸術品を書きたいと思ったというよりも、むしろ自分の住む惨めな東洋を一度知つてみたいと思う子供っぽい気持ちから筆をとつた。しかし、知識ある人々の中で、この五三十事件という重大な事件に興味を持つている人々が少いばかりか、知っている人々もほとんどないのを知ると、一度はこの事件の性質だけは知つておいて貰わねばならぬと、つい忘れていた青年時代の熱情さえ出て來るのである。

昭和七年六月

横光利一

# 青空文庫情報

539 序〔初版〕

底本：「上海」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年1月9日第1刷発行

2008（平成20）年2月15日改版第1刷発行

2008（平成20）年5月15日第3刷発行

底本の親本：「上海」書物展望社

1935（昭和10）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：野口英司

校正：門田裕志、小林繁雄

2011年5月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 上海

## 横光利一

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>